Date Due

All library items are subject to recall at any time.

MAY 1 9 2012		
May 30, 2016		

Brigham Young University

大正十二年九月廿九

於宅書之

朝鮮とその藝術

YANAGI, Sōetsu:

Chōsen to Sono Geijutsu.

Korea and Her Art.

Sōbun-kaku, 1922.

柳宗悦著

朝鮮とその藝術

叢文閣
一九二二年



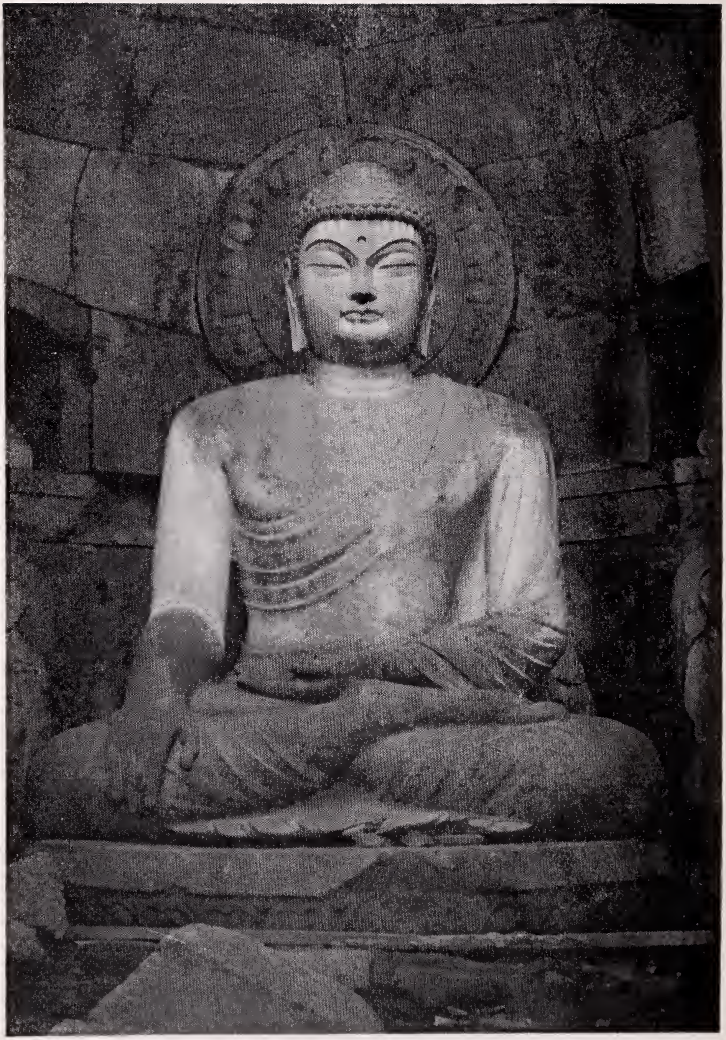




3



4



5



6



7



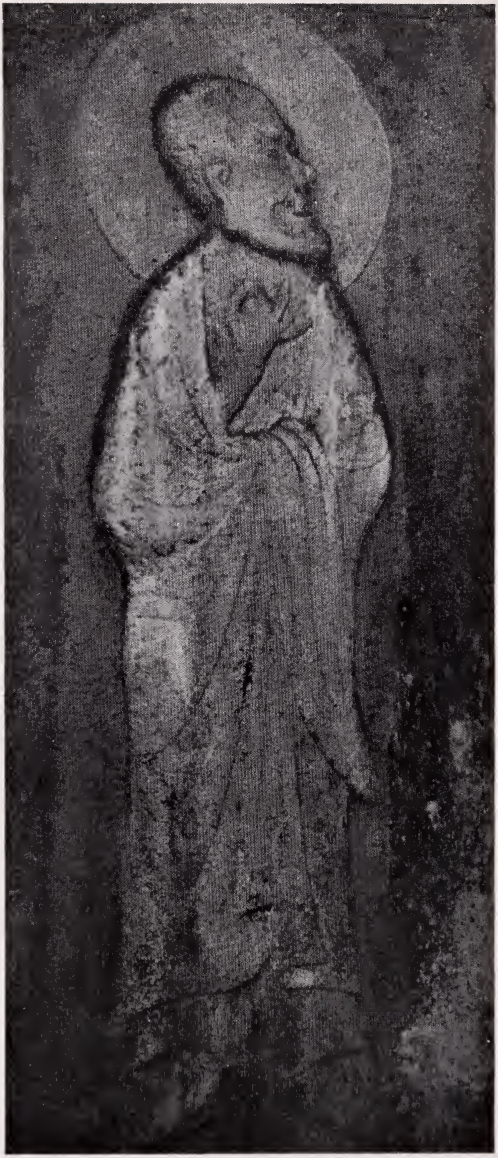


9











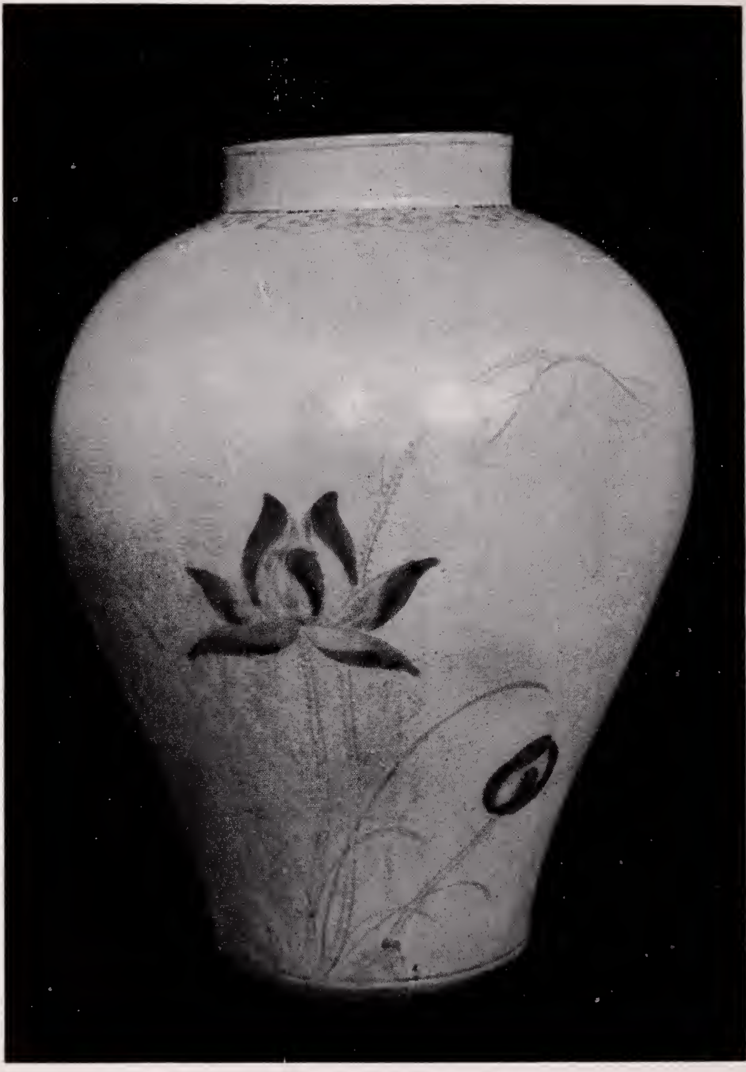


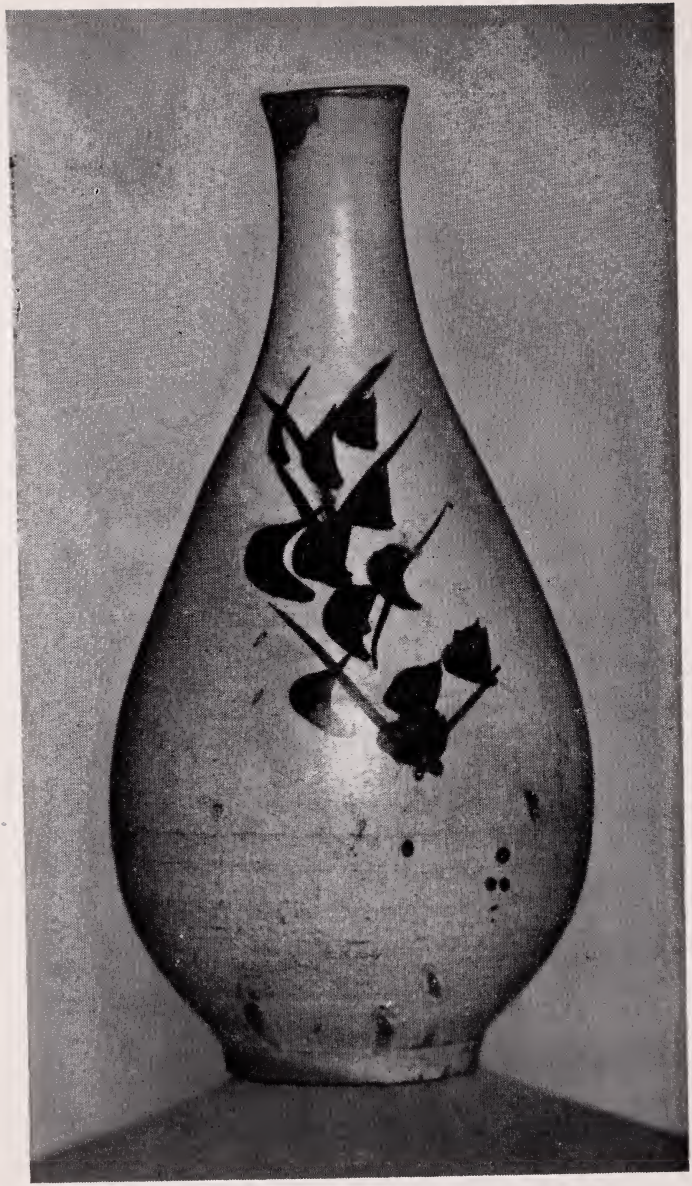
15



16















23

序

此書は朝鮮の美に關し又その特點に關する一考察である。
目前に開かれてゐる日鮮の事情は、是等の斷片の集輯をすら、世に公にする事を求めてゐる。それ程語るべき事が語られずに終り、又語りたい事が語るを許されずにゐると私は想ふ。それ故是等は私一個人の筆になつたものではあるが、幾多の見知らない知巳を背景に持つてゐる事を知つてゐる。更に又發言の自由を持たぬ多くの朝鮮の人に、代つて語る幾つかの眞理である事をも知つてゐる。それ故是は私一人の孤獨な著述では決してない。萠え出ようとしてゐる思潮が、私を通じて最初の聲を擧げしめたに過ぎぬ。言葉に誤謬があつたり、思想に未熟な所があつたら、それは私一人が責を負ふべきであつて、志を同じ

くしてゐる人の罪では決してない。

日本人が公開した朝鮮に關する文獻はまだ非常に貧しい。多少史學に於て見るべき研究があるであらうが、それも未完成の現狀である。況んや思想界で洞察ある理解が公表せられた事は殆どないであらう。偶々あつても卒直な發言を選ぶ事に躊躇が見える。それ故此書を今世に追加することに、何等辯明を用ゐる必要はないであらう。

併し私は此書に於て世に誇るべき知識を贈り得るのではない。殆ど凡てはもだし難い感情によつて綴られた斷片である。或時は憤り或時は寂しく又屢々苦しく、或時は嬉しく或時は美に醉つて筆をとつたのである。然し是等の事情は此書の由來を純粹にする事はあつても、その價値を下げる事はなからうと思ふ。第一には朝鮮問題に對する公憤と、第二にはその藝術に對する思慕とが私にな

かつたら、恐らく此一書を著はす機緣が私に來なかつたらうと思ふ。朝鮮に就て私は何等專問的教養を持たない。教養を缺く場合凡ての者は彼の言說を愼まねばならぬ。況んや專問以外の事に就て著書をする事を餘程ひかへねばならぬ。此事を熟知してゐる私が此冒險を敢てするのは、目前に惱ましい光景が開展されてゐるからである。默してゐる事が私には一つの罪と思へたからである。「朝鮮人を想ふ」と題した一つは私がそも〳〵朝鮮に關して公開した最初のものであつた。三年前のあの折戰慄すべき出來事が起つてゐなかつたら、私は恐らくあれを書かずに終つたであらう。從つて此書も生れてこなかつたかも知れぬ。

思索する者は靜寂の深さを知つてゐる。感情に自らを殺す事の愚を知つてゐる。然し冷たさが彼の心ではない。一度忍び得ない事があるなら、眞理の爲に彼の神經は振ひ起つであらう。その間に矛盾はあらぬ。事情が私をしてかゝる

場合の一つを撰ばしめたのである。どうして私が朝鮮の事に關はる様になつたかを多くの人は尋ねる。然し私はその閑かな問ひを如何に心もどかしく思ふであらう。冷靜な學術に志す者だからと云つて、彼に時局の問題と關係がないと誰が云ひ得るのであるか。生命の問題や運命の問題が彼の觸れてゐる最も重要な問題ではないか。その問題が目前に具象化されてゐるのである。彼はどうして默してゐられよう。思索は活きた問題に於て、一層深められる。

ましてその國にある幾多の藝術が、彼の心を引きつける場合、どうして彼は發言の機會を放棄し得よう。私は失はれようとしてゐる藝術の價値と、その未來とを擁護しようとして起つたのである。朝鮮民族美術館の計畫は、此理想を具象化しようとする私の努力である。

私は是等の論篇を公にするに當つて、そこに充分な學識がないとは云へ、純

粹な動機によつて書かれたと云ふ事を自ら信じてゐる。

人は知的根據のみが正確なものゝ一切の基礎であると思つてはならぬ。私の考へでは寧ろ辯證を持たない自然な人情と云ふが如きものが、却て眞理の本質に近いといつも想ふ。獨斷を去る爲の知識が、獨斷に陷らない場合は稀有だと云つてもいゝであらう。もとより私は氣儘な感情と云ふが如きものを辯護してゐるのではない。然し自然さに基礎をおいた感情は、常に正しく溫い眞理の世界を示してくれる。如何に屢々理知の爲の理知に此自然な道が見失はれてゐるであらう。日鮮の間に蟠る冷たく暗い雲は、此至純な人情の道が虐げられてゐるからだと私は想ふ。嘗て理知が溫い友誼の保證だつたためしがあらうか。それは情が溫めてくれる福祉ではないか。私はかゝる自然な根底の上に一切の私の思想を基礎附けようと希つたのである。情愛の水の涸れきつた河床に、もう

一度泉から出て來る自然の水を流したいと私は求めたのである。

事實を卒直に述べるが、私は未だ嘗て一度も要路の人々から朝鮮の特點に就て聞かされた場合を持たない。嘘の樣な此事は驚くべき事實であつた。特點をこそ私は理解しようと求めたのであるが、私の求めは實に堆積せられた缺點の指摘の爲にいつも阻止せられた。私は聞く毎に苦しさと寂しさとを感じた。もとよりそれ等の事が悉く事實だと云ふ理由からではなく、かゝる見方によつては朝鮮の心の何ものにも觸れる事が出來ないからである。缺點の意識が嘗て友誼を保つた場合があるであらうか。憎みが憎みに對する時、どこに相互の理解が湧かう。朝鮮の特點を認識し得ないものは、朝鮮に就て語る特權を持たぬ。缺點に對して盲目であるのは愚かである。然し特點に對して盲目である方が數倍愚かである。私は未だ嘗て日本人の間から、その特點に關する公な辯護を耳にした場合

を持たない。私はいつも想ふのであるが、かゝる事をなし得る公平な特權は却て日本人にのみ與へられてゐるのである。試みに朝鮮の人自らが自らの長所に就て誇るなら、それは愛國心から出る辯護であると想ひ得よう。どの國でも愛國心には偏見が伴つてゐる。更に又外國人が朝鮮を辯護する場合を考へてみよう。それは一層不純である。それは日本を誹謗する爲に或は自らを利する爲に試みる辯明に過ぎない。然し日本は朝鮮の特質を理解する事に於てかゝる不純な動機を持たない。之に反して缺點を指摘する時程、日本人が不純な動機に包まれる時はないであらう。それ故眞に朝鮮の友が現はれる日が來るなら、それは日本から現はれるべきものだと信じてゐる。況んや血緣に於て日本は最も朝鮮に近いではないか。私は自らが朝鮮の友たり得ない理由を見出す事は出來ぬ。友たる事が出來ないなら、それは私が不純な爲であつて、私が日本人であるか

らではない。然し日本人は今日本人に與へられた此特權を撰ばうとしない。さうして缺點に對する最も不純な指摘に吾々の思想を腐らしてゐる。凡ての日本人は朝鮮を謗る前に、もう一度かゝる言葉に不純な動機が交つてゐはしないかを強く省みねばならぬ。

日鮮の問題がやかましい今日、不思議にも此本は朝鮮に對する最初の公な辯護である運命を受ける。如何に奇異な不自然な事實であらう。若し人間が與へられた人情に活き特權に活きるならば、私の此著書の如き斷片が、どうして必要であり得よう。然し進んで發言しようとする者がない今日、私は此本を世に送り出す事に躊躇する理由を見ない。辯護に過ぎると云つて誹られるであらうか。然し誹謗の多過ぎる間にあつて、特點に對する一考察を得る事は強ち無益ではないであらう。況んや之は辯護の爲の辯護ではない。私は私の情愛に於て

自らを僞り朝鮮を僞り更に日本を僞る個所はないと信じてゐる。

私は最初この書の表題に「朝鮮を想ふ」と題したのである。之が私の心持ちを現はすのに最も應はしい題だつたのである。然し書肆の所望によつて「朝鮮とその藝術」と改題した。それは朝鮮の藝術を取扱つた部分が多いからである。然しかく題する時、それによつて聯想される誤解を避ける爲に、多少の注意を添えようかと思ふ。表題は一見すると朝鮮美術史の研究を示す樣にとれる。然しかゝる歷史的研究と本書とは全く目的を異にする事を明白にせねばならぬ。前者は學的攻究であるが、私がこゝに披瀝しようとするのは、思想であつて學術ではあらぬ。思慕であつて說明ではあらぬ。時間の上に現はれた藝術への叙述ではなく、心の現はれとしての美術への理解である。科學的に攻究するものの報告ではなく、藝術を愛するものゝ洞察である。私が認めて美に對する本質

的理解と見做すものに觸れようとしたのである。單なる學的叙述は美の本質をまで解く事は出來ぬ。私にとつては現はされた作品の客觀的攻究が主題ではない、その作品を通じて民族の心理に觸れようとしたのである。私は目下の所朝鮮民族の運命と直接交渉を持たぬ「もの丶見方」に興味を持たぬ。私は二三の朝鮮美術史に詳しい人々を知つてゐる。私はいつもそれ等の人々の知識を尊敬するが、同時にそれ等の人々が作者たる民族に對して冷淡なのに驚かされる。その研究は全く自己の知識を滿足させるが爲の努力であつて、朝鮮の價値を守護し闡明しようとする希願ではあらぬ。況んやその民族の運命が如何にならうが少しも關與する所があらぬ。知識は正しくとも心情は非常に冷たい。かゝる人人の中にあつて、私の異る見方は存在すべき積極的理由を持つと考へてゐる。讀者は此本から知識と名づけ得べき程のものを殆ど汲む事は出來ぬ。だが多量

な心情をその酬ゐに得る事は出來るであらう。

讀者も知る通り、之は私が過去三年間に時に應じて書いた斷片的思想の輯錄である。最初から計畫した一著述ではないが故に、屢々同一の思想が反復するのに倦むかもしれぬ。然し反復せられた個所は恐らく私の言はうとする所の、最も強い一面であるにちがひない。私はその反復の爲に此著書の價値を引き下げる事はなからうと思ふ。且つよき讀者は却てそこから何ものかを汲みとつてくれるであらう。私は此本に於て、問題の解決を呈供しようとするのではない。朝鮮學に於て、又は政治學に於て何等專問の學識を持たない私が、恐らく爲し得る凡ては只讀者に朝鮮に對する情愛を誘はふとするにある。私は人情の溫かさを信じ、そこに於て果される心と心との內なる理解の確かさを信じてゐる。

此本の讀者には必ずや朝鮮人もあるであらう。それ故私はそれ等の友に、嘗

て私が卒直に開陳した私の思想を略述して、此序文を結ばうと思ふ。

私が過日或特殊な會合に招かれて、朝鮮に關する講演を終つた時、聽衆の一人が起つて、日本がその領土に向つて加へる壓迫に就て、激しい憤怒の情を述べた。私はそれを聞き終つた時、實に辯明すべき一語が私にないのを知つて、胸の絞られるのを感じた。よしそれ等の事の一切が事實でないとしても、私はまだ不完全な日本人の一人として、それを辯解すべき資格が無いと云ふ事を反省した。然しその人の顏が興奮して苦痛に暗くなつてゐるのを見た時、私は思はず起ち上つて次の見解を述べた。

「私は一言の辯疏を加へる資格と意志とを持たない。私は無言のまゝに貴方がたの言葉を受ける。そうして述べられた事が事實であるなら、尙更私は日本が正しい日本となる樣に今後努力しよう。貴方がたは日本をどこ迄も疑ふかも知

れぬ。だが私は未來の日本を信じてゐる。さうして貴方がたの苦痛と暗い氣持ちとが光ある一面に轉廻される日を信じてゐる。私は空論を說くのではない。私は明晰な三個の理由によつて、それが必ず果される事を信じてゐる。私は私の信念を貴方がたの前に陳述しよう。そうして若し私の云ふ事が眞實であるなら、貴方がたは現在の苦痛を越えて希望を未來に抱き得るであらう。且つ又私達に對する憎惡の念を柔らげて下さる事が出來るであらう。私をしてかゝる希望を持たせる三個の根據とは何々であるか。

第一は自由への思慕、及びその確立、之が現に世界思潮の本流となつてゐると云ふ事實である。此流れは今非常に强い。之は人間に許された正しい理想であるから死滅する事は決してあるまい。古い幾つかの勢ひは之に抗しようとしてゐるが、日に〳〵何れも倒れて行く。そうして人間に賦與された自由の本質

が、漸くその本來の意義を現はして來た。世界の凡ての人類は今此理想に向つて戰つてゐる。經濟や軍力による支配はもう昔の力を盛り返す事は出來ぬ。たとへ日本が一人その趨勢を阻止しようとしても、それは徒勞に過ぎない。果して日本は世界の思潮に遲れる樣な愚を爲すであらうか。私はそうは思はぬ。如何なる國も正しい世界思潮より、より强い力を持たぬ。劒も力であらう、然し眞理は尚强い力だ。貴方がたはたとへ日本を信じなくとも、人類の思想を信じるであらう。此信念は貴方がたの絶望をもう一度覆へさす力はないであらうか。憤怒に自らを殺してはいけない。かくするかはりに健實に自らを養つて、人類と共に未來の王國を建てねばならぬ。之は私達に於てもそうである。貴方がたに於ても同じである。自由への無限な思慕、此普遍な趨勢は人類の未來への力强い基礎とならないだらうか。之よりも明かな希望への保證があり得るだらう

か。

第二に私は若い日本の人々を信じてゐる。貴方がたはそれを知らないかもしれぬ。然しこゝでは思想が激變してゐる。政治によつて代表された日本と、若い思想の日本と、如何に明確な差別があるであらう。貴方がたの憎みの的となつてゐるのは前者である。然しかゝる日本のみが凡ての日本だと思ふなら非常な錯誤である。まもなく貴方がたの前に時間はその光景を廻轉するであらう。現に私は若い非常に多くの日本の人々が、朝鮮の友であると云ふ事を知つてゐる。私の如きものを只一人の除外例だと思つて下さつてはいけない。私達は貴方がたに對して何等の先天的憎惡を持たない。私達はいつも政治の日本によつて、日本を代表せられる事に迷惑を感じる。日本人と貴方がたの敵とを同一に見てはいけない。若い者は貴方がたを理解する事を準備してゐる。それはもは

や時間の問題に過ぎない。此事を、熟知して下さるなら、不幸な憎惡に貴重な時を費す事を幾分かは少くして下さるであらう。私は若い日本が貴方がたの友である事をどうしても信じないわけにはゆかぬ。

第三は最も深い強い根底である。私はこゝに正義そのものゝ力を指して云ふのだ。眞理そのものが凡ての運命を決定すると私は信じてゐるのだ。若しも貴方がたが云ふ樣に、眞に日本が惡いなら、かゝる日本はいつか亡滅する。惡は最後の捷利者となる力を持たぬ。こゝに正義そのものゝ力が出て、日本の誤謬を正さずにはおかないであらう。惡しきものは正しきものに勝つ事は出來ぬ。之は道德界に於ける淘汰の法則である。それは進化の原則ではないか。私は道德律を疑ふ事が出來ぬ。法則を破り得る日本の存在は許されてをらぬ。それなら貴方がたの運命を殺し得る日本がどこにあるのだ。よし日本を疑つても道德

律をまで疑つてはならぬ。私は永續する惡がないと云ふ事を確信する。況んや日本の若い人々は日本を眞理の國に高めようとして努力してゐる。私は日本に生れた一人として、惡の爲に亡びてゆく日本を見るに忍び得ない。私は正義の上に日本が安泰せられる日を熱望する。私達は貴方がたから誹られる前に、それ等の事を自身に於て反省しよう。若し私達がその反省を怠るなら、私達は當然陷るべき滅亡に自らを導かねばならぬ。私は眞理が最後に一切を審く力だと信じてゐる。此信念こそは人類の未來を保證する最も大きな確かな根底ではないか。

若しも私達の日本が罪を犯してゐるなら、私はそれに對する凡ての非難に耳を傾ける誠實を持たう。然し過去のそれ等の事實によつて、日鮮の間にある未來の保證が絶望であると速斷する事は出來ぬ。私は以上の三個の確實な基礎に

立つて、吾々の幸な未來を信じてゐる。

私達にとつても貴方がたにとつても今は危期である。互に自らを愼んで眞理への信念を失はぬ樣にしよう。卑下や憎惡に互を殺さずに、生命の價値を互に確立しよう。その望みが少しもないなら、世界は暗黑である。然し暗黑だと判じるにしては、前述の三つの根據は餘りに强く餘りに確かではないか。

之が私の答へ得る凡てゞある」。

私も興奮し是等の言葉を言ひ終つて、その友を顧みた時、その人も點頭いてくれるかの樣に見えた。一人の鮮人は立つて私に溫みある感謝の挨拶を述べてくれた。傍にゐた一人の印度人が特に第三の點に於て全然私に一致すると云ふ考へを力强く述べた。私も云ひたい事を言ひ終へ心に釋放を覺えた。

朝鮮の人達よ、今は一國の精神的運命に關はる大切な時期である。新しい出發の爲に不變な基礎を準備せよ。よく熟慮し反省し、深くその使命を意識せよ。獨立を仰望する前に大人格の出現を仰望せよ。何事よりも先に偉大な科學者を出し、偉大な思索家を産み、偉大な藝術家の出現を熱望せよ。眞と美と善とを除いて、朝鮮を永遠ならしめる基礎はないと深く悟れよ。不平の時間を出來るだけ少く持ち、勉勵の時間を出來るだけ多くせよ。耐へ忍び自暴自棄になつてくれるな。君達は基督の云つた言葉を覺えてゐるだらう。終り迄忍ぶ者は救はれるのだ。悲む者は慰められるのだ。世界は君達の敵ではないのだ。況んや神は君達の運命を守護する事を忘れてはゐないのだ。

日本の同胞よ、劍にて起つものは劍にて亡びると、基督は云つた。至言の至言だ。軍國主義を早く放棄しよう。弱者を虐げる事は日本の名譽にはならぬ。

彼等の精神を尊び肉體を保證する事が友誼であると深く覺れよ。他人を卑下する事に何の誇りがあらう。愛する友を持つ事は吾々の名譽だ。だが奴隷視する者を持つ事は吾々の耻辱だ。他人を蔑り卑み虐げる事に少しでも時間を挪つてくれるな。弱者に對する優越の快感は動物に一任せよ。吾々は人間らしく活きようではないか。自らの自由を尊重すると共に他人の自由をも尊重しよう。若しも此人倫を踏みつけるなら世界は日本の敵となるだらう。そうなるなら亡びるのは朝鮮ではなくして日本ではないか。

東洋は結合しなければならぬ。然し結合と征服による統一とを混同してはならぬ。個性と個性との互の認許によつて、敬念と理解と愛情とが湧くのだ。相互の愛が結合の基礎だ。之に反して排斥と征服とこそは憎惡の基礎だ。私は此不備た著書が、尙幾分なりかゝる結合の出發に人を誘ふ緣となる事を切に希ふ。

目次

挿繪目次

李王家博物館藏、三國時代。

四　觀　音

大和國法隆寺藏、百濟時代。

五　釋　迦

慶尙北道慶州郡內東面吐含山石佛寺、新羅景德王十年。

以下第六より十五まで同上。

六　十一面觀音

七　金剛神 附 仁王

八　四天王

九　女菩薩

十　同　上

一九　德　利

李朝磁器、鐵砂模樣、以下四個「朝鮮民族美術館」藏。

二〇　壺

李朝磁器、牡丹圖、辰砂入染附

二一　壺

李朝磁器、野菊圖、染附

二二　壺

李朝磁器、龍圖、鐵砂

二三　光化門 附石獅

京城府景福宮正門、李朝末期

附

朝鮮人を想ふ

大正八年五月二〇—四日讀賣新聞所載。同年三月一日京城を中心として朝鮮の各所に起つた所謂騷擾事件に對して、誰も不幸な朝鮮の人々を公に辯護する人がないのを見て、急ぎ書いたのである。之は私が朝鮮に就て書いた最初のものであつた。誰かの好意によつて大部分は英譯されてThe Japan Advertiser (Aug. 13, 1919)に掲載された。翌年その朝鮮譯が京城東亞日報(四月十二日より)に掲載された。

朝鮮人を想ふ

一

自分は朝鮮に就いて充分な豫備知識を持つてゐるわけではない。僅かに所有する根據があれば、それは凡そ一ケ月の間朝鮮の各地を巡歴した事と、旅立つ前二三の朝鮮史を繙いた事と、豫てからその國の藝術に厚い欽慕の情を持つてゐる此の三つの事實だけである。

併し是等は僅かな根柢に過ぎぬかも知れぬが、今もだし難い情が余に此一篇を書かせたのである。余は以前から朝鮮に對する余の心を披瀝したい希ひがあ

つたが、今度不幸な出來事が起つた爲、遂にその期が來て余にこの筆を執らせたのである。

余は今度の出來事に就いて少からず心を引かされてゐる。特に日本の識者が如何なる態度で、如何なる考を述べるかを注意深く見守つてゐた。併しその結果朝鮮に就いて經驗あり知識ある人々の思想が殆ど何等の賢さもなく深みもなく又濕みもないのを知つて、余は朝鮮人の爲に屢々涙ぐんだ。

余は前にも云つたやうに朝鮮に就て何等の學識ある者ではないが、幸に余はその藝術に現れた朝鮮人の心の要求を味ふ事によつて、充分な情愛を所有する一人であるのを感じてゐる。余は屢々想ふのであるが、或國の者が他國を理解する最も深い道は、科學や政治上の知識ではなく、宗教や藝術的な内面の理解であると思ふ。云ひ換へれば經濟や法律の知識が吾々を他の國の心へ導くのではな

くして、純な情愛に基く理解が最も深くその國を内より味はしめるのであると考へてゐる、余は日本に於ての小泉八雲（Lafcadio Hearn）の場合の如きをその適例であると思つてゐる。恐らく今迄ハーン程日本を内面から味ひ得た人は無いであらう、外國人の書いた日本に關する本が何百あるか知らないが、ハーン著作ほどその美しさと鋭さと溫かさとに充ちたものはないであらう。彼は或日本人よりも日本を一層よく理解してゐた藝術家であつた。藝術は實に鋭い直觀の理解であるが、科學や政治は却つて屢々獨斷に充ち利己に傷づいた不純な理解であつた。

特に他人の心に觸れ逢はうとする微妙な契機に對して、知よりも情こそ深い理解の道であらう。隣人との交りは只愛が結ぶのである。軍政や壓迫が人と人とを結ぶと誰が思ひ得るであらう。知でもなく刄でもなく只一つの情にこそ不

思議な力がある。平和を愛する者はたえず微笑むであらう。怒號が何時何處で平和を齎らした場合があらうか。

朝鮮に住み朝鮮を語る人々の間にはまだハーンのやうな姿は一人もないのである。その古墳を發き古藝術を集める人はあるかも知れぬが、それによつて朝鮮に對する愛の仕事を果した人は一人もないやうである。彼等は如何なる美を捕へ得たであらうか。涙が嘗て彼等に湧いた事があるであらうか。日本は多額の金と軍隊と政治家とをその國に送つたであらうが、いつ心の愛を贈つた場合があらうか。如何なる日本の藝術家が彼等の間にあつたか。況んや如何なる日本の宗教家が朝鮮の靈を救はうとしたであらうか。余は想ふのである。凡ての朝鮮人は金よりも政治よりも軍隊よりも、只一片の人情に、より多く飢ゑてゐるのである。

二

誰も朝鮮史を繙く時、その暗黒な悲慘な時としては恐怖に充ちた歴史に心を蔽はぬ者はないであらう。東洋の黃金時代—唐の朝に於ては朝鮮にも新羅の盛代があつた。慶州を旅する者は奈良に行つて推古天平の昔を想ふのと同じ感慨があるであらう。併し朝鮮史はかゝる明るい時代にのみ活きてゐたのではない。寧ろそれは束の間であつて絕えまなく襲ふ外寇と、互に傷つけた內亂とで國民は休らう暇がなかつた。後者は自身に罪があるであらうが、前者は忍ぶのに苦しい運命であつた。歷史家はその國是を「事大主義」と云ふかも知れぬが、併し

地理上よりしても受けねばならなかつた彼等の宿命は、吾々には深い同情を誘ふのである。

強大な粗暴な北方大陸の漢民族は、彼等のか弱い體には不可抗の壓迫であつた。彼等は絶えまない掠奪に加へて、貢により使によつて身にしみる屈辱を餘儀なくされた。併し彼等に自由な獨立の呼吸を許さなかつたのは只殘忍な北方の大國のみではなかつた。實にか弱い彼等を尙苦しめたのは吾々の祖先であつた。歷史家はよく「朝鮮征伐」を一國の勇敢な記錄であるかのやうに語るが、それは只古代の武士が彼等の征服慾を滿す爲に意味なくして企てた罪深い行であつた。余はかゝる遠征を一國の名譽ある物語とは思はぬ。況んや今日朝鮮の古藝術即ち建築や美術品が殆ど廢頽し破壞し盡されたのは大部分實に怖るべき倭寇の行であつた。支那は朝鮮に宗敎や藝術を贈つたが、それを殆んど破壞し

たのは吾々の武士であつた。是等の事實は朝鮮の人々には骨身にしみた怨みであつたであらう。併し國家は短く藝術は長いのである。勝ち誇つた吾々の武士に對してよりも、僅かに殘された彼等の藝術に未來の愛は集まるであらう。勝つのは彼等の美であつて、吾々の刄ではない。

今日朝鮮人の間に傳へられる美談、卽ち義士とか忠臣とか烈女とかの古い物語は、殆ど全く倭寇に對して勇敢に抵抗した人々の話のみであると聞いてゐる。今總督府が朝鮮人の學校で歷史を敎へない事實も、右の罪が吾々にあるからである。(余は余の知る日本の或歷史家が近く朝鮮人に讀ます特別の歷史敎科書を編纂してゐるのを知つてゐる。特別とは云ふ迄もなく日本が嘗て朝鮮を苦しめた部分を歷史から削り取る事を指すのである。)余は余の旅行中朝鮮の家屋に貼りつけられ乃木大將の肖像を見た。或人の告白によれば之は取りはづした

いのである。若し乃木大將に範をとるなら、必然乃木大將の如き義臣たる爲に日本に反抗すべきだからである。吾々の或者が所謂義臣を好んで祭り乍ら、傍ら朝鮮人の反抗心を罵るのは、丁度何人も義臣になつてはならぬと云ふのと等しい。吾々は説明出來ないディレンマに陷り乍ら、樣々な詭辯によつてその矛盾した態度を辯じようと企てゝゐる。我々日本人が今朝鮮人の立場にゐると假定してみたい。恐らく義憤好きな吾々日本人こそ最も多く暴動を企てる仲間であらう。或道德家は此時こそ志士、烈女の理想を果す時だと叫ぶであらう。わがことならぬ故に、只それを暴動だと云つて罵るのである。余はかゝる反抗を賢い道だとも又賞む可き態度だとも思つてはゐない。併し彼等を只罵り、尙もそれを拘束する態度を、矛盾に充ちた醜い愚な狹い心に過ぎぬと思ふのである。吾々の態度に矛盾がないとどうして云ひ得よう。今の世では政治は道德の域に

すら達してゐない。併しこれが政治への辯解とはならぬ。却て意識すべき恥辱でなければならぬ。反抗する彼等よりも一層愚かなのは壓迫する吾々である。血の流を見るが如き暴行を人は如何なる場合に於てもなしてはならぬ、併しこれと共に壓制によつて人々の口を閉ざす如き愚さを重ねてはならぬ。かゝる事は嘗て一度も如何なる處に於ても眞の平和と友情とを齎した場合がない。刄の力は決して賢い力を生まぬ。

三

朝鮮の歷史が受けた運命は悲しいものであつた。彼等は抑へられ抑へられ

て、三千年の月日を送つた。彼等は力もほしく又金もほしいであらう。併し虐げられ、いぢめられた身には何よりも人情がほしいのである。愛がほしいのである。恐らく彼等程愛情を飢ゑ求めてゐる人民はないであらう。基督教が彼等に迎へられるのも非常に自然である。深い思索や厚い信仰が彼等を動かす主因ではない。情愛の教が彼等には嬉しさに餘る福音である。軍政に彼等は沈默するかもしれぬ。然しその冷さを如何なる心が喜び得るであらう。

余は朝鮮の藝術―特にその要素とも見られる線（Line）の美は實に彼等が愛に飢ゑる心のシムボルであると思ふのである。美しく長く〳〵引く朝鮮の線は、實に連々として訴へる心そのものである。彼等の怨みも、彼等の祈りも彼等の求めも、彼等の涙も、其線をつたつて流れるやうに感じられる。一佛像を想ひ浮べても、又一陶器を擇んでも、吾々は此朝鮮の線に觸れない場合はない。涙

にあふれる諸々の訴が此線に託されてゐる。彼等はその寂しい心持と、何ものかに憬がれる苦みの情とを美しくも又應はしくもそれ等の長くたわやかな線に含めたのである。强大な泰然とした支那の形（Form）の美の前にその線の美は實によき對比であらう。彼等は美しさに寂しみを語り、寂しみに美しさを含めたのである。追迫せられ抑壓せられた彼等の運命は、止むなく寂しみと憬がれとに慰めの世を求めたのである。悲母の觀音は彼等の靈の慰めであつた。優しく柔かな高麗の磁器は日々の樂しい友であつた。余はその藝術を想ふ毎に、にじみ出る涙を想はない時はない。それ等の製作者が何を求め何を現はそうとしたかを知るものは、愛の心を彼等に贈らずにはゐられぬであらう。弱さを嘲る事が何の誇となり得よう。彼等の寂しさは心の底から滲み出てゐる。それは切な生命の聲であつた。かゝる經驗がその藝術を永遠のものにし、その作品を永

劫の美に導いたのである。

併し如何なる國も彼等に情愛を寄せたものはなかつた。支那は抗し難い暴君であつた。その勢が衰へた時、立つたのは朝鮮自身ではなく滿州から迫つた露國の力であつた。最近その位置を奪つたのは再び朝鮮自身ではなくして海を隔てた日本であつた。朝鮮は只時の流と共に移りゆく暴君を迎へたのみであつた。彼等は漸時疲勞し衰頽する境遇を餘義なくされた。もとより新しい司配者は昔のやうに掠奪や收斂に彼等を苦じめる事を一つもしない。否、之に反して多額の金や諸々の治政組織や、所謂教育を彼等に送らうと努めた。併し先づ彼等から奪つたものは軍隊であり、吾々から送つたものが彼等のではない吾々の軍隊であつた。吾々は先づ永遠の獨立を彼等に不可能ならしめる固定した方法をとつた。更に尙自律する彼等の精神を認めない事によつて、只日本に適する道

德と教育とを與へた。一言で云へば物質に於ても靈に於ても彼等の自由と獨立とを奪つた。かくて人は日本の思想を植ゑようとするが彼等の心を活かそうとは試みてゐない。彼等に接する時與へるのは刄であつて愛ではなかつた。吾々は費用と主權者とを與へて彼等の自由と交換させた。彼等は生命と財產との保證を得る事によつて、愛を永へに見かぎる悲しみを嘗めた。併し人は位置を奪ひ得ても、その心をまで奪ふ事は出來ぬ。彼等は依然として愛に飢ゑる不安な日を續けてゐる。

四

或朝鮮人は次のやうなありのまゝな質問を吾々に與へた。「日本は吾々の爲に

教育を與へるのか、日本の爲に吾々を教育するのか、何れなのか」と。如何なる日本人も前者であると云ひ切るものはないであらう。實際その教育は彼等の衷心の要求や歷史的思想やを重んじて行ふ教育ではない。寧ろかゝる事を否定し歷史を教へず、外國語を避け、主として日本語を以て、日本の道德、又彼等には今迄無關係であつた日本の恩惠を中樞として、彼等の思想の方向をさへ更へようとするものである。全然新な教育の方針に對して彼等が親しみ難い情を抱くのも自然な事實であらう。彼等には掠奪者と見えた者を、最も尊敬せよと云はれるのである。彼等にはこれが解し難い奇異な矛盾に充ちた聲に響くにちがひない。余は或日京城で李朝初期の作であらうと思ふ古い優秀な刺繡を求めた。明かに明の作の影響をうけたものであるが、その色彩に於ても線に於ても圖案に於ても古朝鮮の美を語るのに充分な作品であつた。それを求めた日から

間もなく、余は案內されて朝鮮人の高等女學校を參觀した。生徒の製作品を澤山見たが、丁度壁にかけられた大作の刺繡を見た時余は奇異な感慨に打たれた。それは何處にも朝鮮固有の美を認め得ない現代日本風の作品――卽ち半西洋化された趣味もなく氣品もない愚な圖案と淺い色彩との作品であつた。併し先生の說明によれば、それはよく敎育せられた驚くべき手工を示す優等の作品と云はれるのである。余は余の所有する古刺繡を想ひ囘して、あやまられた敎育の罪を想ひ、かゝる敎育を强ひられて固有の美を失つて行く朝鮮の損失を淋しく思つたのである。

日本の古藝術は朝鮮に恩を受けたのである。法隆寺や奈良の博物館を訪ふ人はその事實を熟知してゐる。吾々が今國寶として海外に誇るものは殆んど支那と朝鮮との恩寵を受けないものはないであらう。然るに今日の日本は少くとも

酬るるのに固有な朝鮮藝術の破壞を以てしたのである。好事家は古作品の聚集をするが、かゝる作品を再び造る心を彼等に活かそうとするのではない。之が所謂同化の道であるなら、それは恐るべき同化である。余は世界藝術に立派な位置を占める朝鮮の名譽を保留するのが、日本の行ふべき正當な人道であると思ふ。敎育は彼等を活かす爲の敎育であつて、殺す爲の敎育であつてはならぬ。

五

一ケ月の旅行の後、支那に入る爲に余は再び一人旅を續けた。汽車が開城を立つて新義州に向ふ或夕方、余が客の少い車で讀書してゐた時、突然ボーイが自

分の傍に來て次のやうな奇異な質問をした。『甚だ失禮ですが「そんな事を云つたつて無理だ」と云ふのは英語で何と云つたらいゝのですか』。何故そんな事を聞くのかと尋ねた時、ボーイは彼の經驗を話し出した。此朝鮮にゐる外國人程わけの分らない傲慢な下等な奴は居ないと云ふのである。汽車にのつて餘りひどい振舞や勝手な事を要求されるので「そんな事を云つたつて無理だ」と云ふ言葉を覺えておきたいのですと云つた。彼はそれ等の外國人が主に宣敎師やその仲間だと云ふ事をつけ加へた。余は此挿話がどれだけ政治上の事にも關係するかを知らない。併し宗敎徒の身であり乍ら、不正行爲をする者が、宣敎師の間にあると云ふ事を余は否むわけには行かぬ。彼等が政治的隱謀を屢々企てたと云ふ事は、多くの殖民地で現れた事實であつた。又宗敎に方便をとる事は屢々或行爲をとる場合最も好都合な辯解であつた。余はいつも宣敎師の罪惡史は

その善業史よりも百數が多いと考へてゐる。余は今度の不幸にどれだけかゝる背景があつたかを知らない。併し余は其が或範圍迄否定できない事實であらうと思ふ。特に朝鮮に於ける宣教師の値は非常に粗惡である。只之によつて不幸の原因を朝鮮人並びに宣教師のみに歸する事によつて、吾々自身の罪を蔽ふのは卑しい態度であると思ふ。よし彼等に明かな罪があつても、寧ろかゝる罪を釀したのは吾々に起因すると知らねばならぬ。日本が彼等に愛を與へずして日本に對する愛を彼等から强要するのは無理であらう。かゝる愛は基督敎がひとり彼等に與へたのである。宣教師が彼等の愛を集めたのは自然な形と云はねばならぬ。多くの宗教家は不純であるかも知れぬ。併し彼等の或者が日本の治政者よりも、より溫く朝鮮を愛したのは事實である。

六

吾々とその隣人との間に永遠の平和を求めようとなれば、吾々の心を愛に淨め同情に溫めるよりほかに道はない。併し日本は不幸にも刄を加へ罵りを與へた。之が果して相互の理解を生み、協力を果し、結合を全くするであらうか。否、朝鮮の全民が骨身に感じる所は限りない怨恨である、反抗である、憎惡である。分離である。獨立が彼等の理想となるのは必然な結果であらう。彼等が日本を愛し得ないことこそ自然であつて、敬ひ得ることこそ例外である。

人は愛の前に從順であるが、抑壓に對しては頑强である。日本は何れの道に

よつて隣人に近づからうとするのであらう。平和がその希望であるなら、何の穉愚を重ねて抑壓の道を撰ぶのであらう。

金錢や政治に於て心は心に觸れる事は出來ぬ。只愛のみが此悅びを與へるのである。殖民地の平和は政策が產むのではない。愛が相互の理解を產むのである。此力を越える軍力も政權もあらぬ。余は想ふ、國と國とを交び人と人とを近づけるのは科學ではなく藝術である。政治ではなく宗敎である。智ではなく情である。只ひとり宗敎的若しくは藝術的理解のみが人の心を內より味ひ、味はれたものに無限の愛を起すのである。

日本は朝鮮を治めようとして軍人を送り政治家を送つた。併し友情や平和の眞意を知つてゐるのは宗敎家であり藝術家である。余は習慣が國際の問題をひとり政治家にのみ委ねるのを奇異な幼穉な態度であると思ふ。余は古いソクラ

テスやプラトーンの如き又は孔子、老子の如き人々が眞に一國の治平、萬國の平和を語り得る人々であると確く信じてゐる。

朝鮮の人々よ、余は御身等に就いて何の知識もなく經驗もない一人である。又今迄御身等の間に一人の知人をすら持つてゐないのである。併し余は御身等の故國の藝術を愛し、人情を愛し、その歴史が嘗めた淋しい經驗に盡きない同情を持つ一人である。又御身等がその藝術によつて長い間何を求め何を訴へたかを心に聞いてゐる。余は余の心にそれを想ふ毎に淋しさを感じ、湧きくる愛を御身等に贈らずにはゐられない。

朝鮮の人々よ、よし余の國の識者の凡てが御身等を罵り又御身等を苦しめる事があつても、彼等の中に此一文を草した者のゐる事を知つてほしい。否、余のみならず、余の愛する凡ての余の知友は同じ愛情を御身等に感じてゐる事を

知つてほしい。かくて吾々の國が正しい人道を踏んでゐないと云ふ明かな反省が吾々の間にある事を知つてほしい。余は此短い一文によつて、少しでも御身等に對する余の情を披瀝し得るなら淺からぬ悅びである。

（一九一九、五、十一）

朝鮮の友に贈る書

大正九年六月號「改造」所載。本田增次郎氏による英譯拔萃が The Japan Advertiser June 16th 1920に投稿された。最初の部分の朝鮮譯が同月の「東亞日報」に連載された。

朝鮮の友に贈る書

私の知れる、又は見知らぬ多くの朝鮮の友に、心からの此書翰を贈る。情の日本は今かくする様にと私に命じてゐる。私は進み出てもだし難い此心を貴方がたに話し掛けよう。是等の言葉が受け容れられる事を私はひそかに信じたい。若し此書を通して二つの心が觸れ得るなら、それはどんなにか私にとつての悦びであらう。貴方がたもその淋しい沈默を私の前には破つてほしい。人はいつも心を語る友を求めてゐる。特に貴方

がたの間に於ては、人間の愛が心の底から求められてゐるのだと、私は想ふ。かく想ふ時どうして私はこの訪れを果さずにゐられよう。貴方がたも此書翰を手にして、私に答へる事を躊つては下さらぬであらう。私はそれを信じたい。

一

私は此頃殆ど朝鮮の事にのみ心を奪はれてゐる。何故かくなつたかは私には說き得ない。どこに情を說き得る充分な言葉があらう。貴方がたの心持ちや寂しさを察しる時、人知れぬ涙が私の眼ににじんでくる。私は今貴方がたの運命を

想ひ、顧みて又此世の不自然な勢ひを想ふ。あり得べからざる出來事が目前に現はれてゐる。私の心は平和ではあり得ない。心が貴方がたに向ふ時、私も共に貴方がたの苦しみを受ける。何ものか見知らぬ力が私を呼ぶ様に思ふ。私はその聲を聞かないわけにはゆかぬ。それは私の心から人間の愛を目覺ましてくれた。情愛は今私を強く貴方がたに誘ふ。私は默してはゐられない。どうして貴方がたに近づく事がいけないであらう。親しさが血に湧き上る時、心は心に話し掛けたいではないか。出來得るなら私は溫くこの手をさへさし出したい。かかることは此世に於て自然な求めだと、貴方がたも信じて彼下るだらう。

人は生れ乍らに人を戀してゐる。憎みや爭ひが人間の本旨であり得よう筈がない。様々な不純な動機の爲に國と國とは分れ、心と心とが離れてゐる。不自然さの勢ひが醜い支配に慠つてゐる。然し永續し得る不自然さが何處にあり得

よう。凡ての心は自然にと歸りたがつてゐる。凡てが自然に歸るならば、愛はもつと繁く吾々の間を通ふ筈だと私は想ふ。何事か不自然な力が吾々を二つに裂いてゐるのである。

「汝曹互に愛せよ」と敎へは云ふ。然しかゝる敎へが現はれるよりも先に、人情は生れ乍らに「互を愛したい」と求めてゐると私は想ふ。愛は聖者の敎へであるが故に深いのではない。人情に基くが故にその敎へが深いのである。人が自然な人情のまゝに活き得たら、此の世はどんなにか溫いであらう。此世に眞に貴いものは權力でもなく知識でもない。それは一片の溫い人情であるといつも想ふ。然し何が故か人情の生活は踏みにじられて、金力や武力が世を支へる柱だと考へられる。かゝる勢ひは宛ら「互を憎め」とさへ云ふ樣に見える。國と國とはいつも戰ひの用意を怠らない。然し人情に背くかゝる勢ひが、どうし

て永遠な平和や幸福の贈り手であり得よう。只かゝる不自然さが蔓るばかりに、心が心から本意なくも裂かれてゐるのである。長い間代る〲の武力や威壓の爲に、どこ迄も人情を踏みつけられた朝鮮の歴史を想ふ時、私は湧き上る涙を抑へ得ない。

朝鮮は今寂しく苦んでゐる。巴紋の旗は高く飜らず、春は來るとも李華は永へにその蕾を封じる様である。固有の文化は日に〲遠く、生れの故郷から消え去つてゆく。幾多の卓越した文明の事跡は、只過去の巻にのみ讀まれてゐる。往く人々の首はうな垂れ、苦みや怨みがその眉に現はれてゐる。話しする聲さへ今はその音が低く、民は日光を厭つて暗い陰に集る様である。如何なる勢ひが貴方がたをかくはさせたのであるか。私は貴方がたの心や身が、どんなに暗い氣持ちに蔽はれてゐるかを、察しないわけにはゆかない。貴方がたには嘸血の

涙があるであらう。人は大かたの苦しみには忍ぶ事も出來よう。然し愛と自由とを缺く處には、どうしても住む事が出來ないのである。啻に貴方がたばかりではない。此世の如何に多くの人々がかゝるものを追ひ求めて、どれだけ屢々その故郷をさへ棄てゝ、あてどもなくさすらひの旅に出たであらう。凡ての人は自由な空氣を求めてゐる。人情の溫かさを慕つてゐる。私は是を想ひ彼を想ひ、抑へ得ない同情を貴方がたに感じてゐる。嘗て何處の國に情に基く政治があつたであらう。愛による武力があつたであらう。爭ひは道德に缺け、戰ひはいつの場合にも宗敎を持たない。此事は眞理を知る民にとつては苦痛である。私は日本がいつも正しく溫い日本である事を希ふ。若し無情な行ひに慠る事があるなら、その時日本は宗敎の日本ではあり得ない。今日不幸にも國と國との關係は、まだ道德の域にすら達してゐない。況んやその間に宗敎的な愛が保た

れよう筈がない。もろ〳〵の不正や罪惡が時として國家の名によつて辯護される。いつも眞理に國家が從うのではない。國家に眞理が順應し變化されるのである。かくて屢々此世には不自然な勢ひが白晝を歩くのである。人は多くその罪を疑つてはゐない。それは避け難い不完全な世の出來事としていつも看過される。然しかゝる行ひの爲に苦む民が玆にあるなら、それは一國の恥辱であり又人類への侮辱であらう。正しい日本はかゝる行ひを改めるのに憚る事があつてはならぬ。吾々はいつも眞理に迄國家を高めたいと希ふのである。私はそれが私自身の行ひでないとは云へ、少くとも或場合日本が不正であつたと思ふ時、日本に生れた一人として、玆に私はその罪を貴方がたに謝したく思ふ。私はひそかに神に向つてその罪の許しを乞はないのではゐられない。日本が神の國に於て罪深いものとして見られる事は、私の忍び得る所ではない。私は日本の榮

譽の爲にも、吾々の故國を宗教によつて深めたい。私は目撃者ではないとは云へ、樣々な酷い事が貴方がたの間に行はれたのを耳にする時、私の心は痛んでくる。それを無言のうちに堪へ忍ばねばならぬ貴方がたの運命に對して、私は何と云ふ可きかを知らない。私は心ひそかに許しを求め乍ら、かう心に囁いてゐるのである。「若し日本が不正であるならば、いつか日本の間から貴方がたの味方として起つ者が出るにちがひない。眞の日本は決して暴虐を欲してはゐないのである。少くとも未來の日本は人道の擁護者でありたいと希つてゐるのである」と。貴方がたはかゝる聲を信じては被下らぬだらうか。

此頃日に〳〵貴方がたと私達とは離れてゆく。近づきたいと思ふ人情が、離れたいと思ふ憎みに還るとは、如何に不自然な出來事であらう。何ものかの心が茲に出て、かゝる憎みを自然な愛に戻さねばならぬ。力の日本がかゝる和合を

齎らし得ない事を私は知つてゐる。然し情の日本はそれを成し就げ得ないであらうか。力強い威壓ではない、涙もろい人情のみが此世に平和を齎らすのである。私は人間としての貴方がたが、情には心を柔らげて被下る事を信じてゐる。私は日本が如何なる道によつて吾々の爭ひを拭ひ去らうとするかを知らない。然し私は只ひとりの個人に過ぎないとは云へ、私の心に湧き上る情愛に於て、貴方がたの中に深く活き得ないであらうか。私は多くの日本の人々が未だ發言しないとは云へ、私と共に情の日本人である事を熟知してゐる。吾々は朝鮮の運命に對して冷かである事を欲しない。

此世にはどれだけ多く許し得ない矛盾が矛盾のまゝに行はれてゐるであらう。私は假りに日本人が朝鮮人の位置に立つたならばといつも想ふ。愛國の念を標榜し、忠臣を以て任じる此國民は、貴方がたよりももつと高く反逆の旗

を譏すにちがひない。吾々の道德はかねぐかゝる行爲を稱揚すべき立場にゐる。吾々は貴方がたが自國を想ふ義憤の行ひを咎める事に、矛盾を覺へないわけにはゆかぬ。眞理は普遍の眞理であつていゝ筈であるが、時として一つの行ひに二つの名が與へられ、或時は「忠節」とも或時は「不逞」とも呼ばれるのである。數へればから云ふ矛盾はどれだけ此世に多いであらう。多いにつれてどれだけ無數の人々が暗い陰に惱まねばならぬであらう。その境遇に在る貴方がたを想ひ、又かくせしめた「暗黑の力」を想ふ時、私は心に傷を受ける。時としては心が激し、時としては寂しさに沈んでくる。況んや貴方がたには胸を壓せられる苦しみがあるであらう。貴方がたは今何に慰みを求めてゐるのであらう。その運命を何と感じてゐるであらうか。夢にだに安らかな想ひは無いであらう。御身等の上に少しでも平和あれかしと私は祈つてゐる。

然し私は人間に尙も燃える希望を抱いてゐる。いつか自然は人間の裡から正しいものを目覺ますにちがひない。日本がいつか正當な人倫に立つ日本となる事を信じたい。之は何れの處を問はず、凡ての國家が懷抱する理想でなければならぬ。私はいつか眞理によつて日本が支へられる日の來るのを疑はない。私は今若い日本の人々が此理想に向つて努力してゐる事を知つてゐる。貴方がたは人間としての日本人をも拒けて披下つてはいけない。私の正しい觀察によれば、個人として朝鮮の人々に憎みの心を持つ人は殆どないのである。否、吾々は藝術を通じていつも朝鮮が卓越した國民であつた事を想ひ回してゐる。嘗て露國と戰ひを交へたその間に於てすら、吾々は露國の偉大な思想や文學を、日に深く學んでゐたのである。二つの國が裂かれるのは個人と個人との憎みによるのではない。私は情に於て吾々の同胞が隣邦の友を忘れてはゐないのを信じ

てゐる。少くとも未來の日本を形造る人々は理に疎く情に冷かでは決してないであらう。

若し日本が暴力に慠る事があるなら、いち早く日本の中から貴方がたへの味方が現はれるであらう。私は人間の本質を信じてゐる。人間としての日本人に希望を抱いてゐる。人間は不正な事に滿足し得る人間ではない。悲慘な事や淋しみに冷かな人間ではない。壓迫や爭鬪は衷心からの求めではない。今の世は不純な勢ひを醇して、心ならずも醜い生活を續けてゐる。然し打ち明ければ愛に悅び人情に潤ほう生活が、人間の心からの求めなのだと私は想ふ。此世に暗黑の時が來ようとも、それは人間の本質をも奪う事は出來ぬ。自然はいつも甦る力を固く支へてゐる。今は國と國とが隔てられ人と人とが背いてゐる。然し異邦の人と互に心を打ち明け得たら、どんなにか人類は厚い幸福に浸るであら

う。見知らぬ人との交情は、わけても親しさの想ひが濃いであらう。人間はかかる幸福を求めてゐる。吾々も亦貴方がたも、此求めに於てはいつも一つであると私は信じてゐる。

貴方がたと私達とは歴史的にも地理的にも、又は人種的にも言語的にも眞に肉身の兄弟である。私は今の狀態を自然なものとは想はない。又此不幸な關係が永續していゝものだとは思はない。不自然なものが淘汰を受けるのは此世の固い理法である。私は今二つの國の間にある不自然な關係が正される日の來ることを切に希つてゐる。正に日本にとつての兄弟である朝鮮は日本の奴隷であつてはならぬ。それは朝鮮の不名譽であるよりも、日本にとつての恥辱の恥辱である。私は私の日本がかゝる恥辱をも省みないとは思はない。否、私は未來の日本を信じてゐる。情の日本を疑はない。精神に動く若い人々は、日本を眞

理に迄高めねばならぬ任務を感じてゐる。貴方がたも私と共にそれを信じてほしい。人間そのものゝ本質を信じる事によつて、再び希望を私と共に甦らしてほしい。

こゝに或治政の方針が人間の道に背くとしたら、かゝる政治は永續しないであらう。如何なる力も神意には背くことは出來ぬ。背くならいつかその宿命として內部から死壞されるにちがひない。人間は神意によるその本質に於て凡てのものゝ捷利者とならねばならぬ。それが出來ないなら、それは個人としての又は國民としての拭ひ得ない恥辱である。こゝに不正な力に虐げられる國があるなら、必ずや人間の正義は起つて、その虐げられる國の味方となるであらう。人間の誠心にはかゝる勇氣が斷じて消えない事を私は信じてゐる。私は虐げられる人々よりも虐げる人々の方が、より死の終りに近いと思ふ。前者に對

しては人間の味方が起ち上るだらうが、後者には必ずや自然の刑罰が加へられる。「劍をとる者は劍にて亡ぶべし」とイエスは告げた。此世に永らへ得る惡の榮えはないのである。

茲に反省を乞ひたい一事がある。吾々が劍によつて貴方がたの皮膚を少しでも傷ける事が、絕對の罪惡である樣に、貴方がたも血を流す道によつて革命を起して彼下つてはいけない。殺し合うとは何事であるか。それが天命に逆らひ人倫に悖ることを明確に知る必要がある。それは啻に酷いのみならず、最も不自然な行ひである。それは決して〳〵和合に至る賢明な道とはならぬ。殺戮がどうして平和を齎らし得よう。吾々はいつも自然な人情の聲にこそ耳を傾けねばならぬ。愛し合ひたいとそれは云つてゐるではないか。どうして吾々は人情のまゝに活きる事が出來ないのであるか。自然に逆らつて迄爭ふとは如何なる

心であるか。自然の深さを知りぬいてゐた老子は「不爭の德」を鋭く說いた。

私は再び反省を貴方がたに希ひたい。爭ひの武力や憎みの政治が不純なものであるなら、朝鮮も亦その存在をかゝる力の上に建設してはいけない。私は武力や政治には少しだに信仰を持たない。それは國と國とを結びはしない。人と人とを近づけはしない。古往今來是等の道を通して內から愛し合つた國と國とがどこにあらう。政治や軍力の平和は利害の平和に過ぎない。さもなくば强制の平和に過ぎない。私は眞に朝鮮と吾が故國との間がかゝる關係に終る事を欲しない。貴方がたも貴方がた自身の武力や政治に信賴をおいてはいけない。かゝる力はどの國であらうとも人間の心を溫めはしない。一國の名譽を悠久ならしめるものは、武力でもなく政治でもない。その宗敎や藝術や哲學のみである。若し信任し得る政治があるなら、それはプラトーンや孔子が說いた如き政治で

あらねばならぬ。然し不幸にも現代はかゝる聖賢の聲を用ゐる事を恐れてゐる。然し吾々はかゝる偉大な古人の敎へが吾々を欺かない事を信じねばならぬ。私は貴方がたが朝鮮の存在を精神の上に安泰せしめられん事を切に望むのである。之は實に吾々に於ても亦固く保持せねばならぬ理想であると私は信じてゐる。

貴方がたは今の治政者に絶望を感じられたにちがひない。然し人間そのものにも絶望して被下つてはいけない。眞の愛や平和を求める心はその中に尙も溫く包まれてゐる。それは自然の意志によつて甦らねば止まぬであらう。如何に世は寒いにしても、草はいつか地の懷から萠え出るであらう。よし双の勢ひに攻められる事があつても人間そのものが朝鮮の運命を固く保護すると私は確信する。否、私はいつか朝鮮が人情に最も溫められる國の一つであるのを切に感

じてゐる。世は如何に殺伐にならうとも、人情は此世から消えないであらう。貴方がたは過去の苦しい歴史にてらして、何處の人間をも、もう信じ得ないと云はれるだらうか。然しその淋しい聲の中から、もう一度人間を呼んでみてほしい。おゝ、その時私は貴方がたの中に進み出よう。こゝに貴方がたの手を握りたい一人の人間がゐると云ひ出よう。然し私を見るや、又も僞りの日本人かと云つて私を拒けるだらうか。然し私は私の誠心が、今迄の日本人でない何ものかを私の顏に現はす迄、貴方がたの前から退くまい。私は貴方がたが眞に人間を戀してゐる方だと云ふ事を信じてゐる。私にさへ誠心があるならば、それは吾々の距離を近づけるにちがひない、若し近づき得ないなら、それは貴方がたの罪ではなく、尙も私の誠心が足りないからだ。私は再び私を淨めて出直さう。

日本は未だ人間の心に活きつてはゐない。然し若い精神的な日本がこゝに現れて、いつか刄や力の日本を征御し盡す事を信じてゐる。私はかゝる日が現はれて、朝鮮と日本との間に心からの友情が交される時の來るのを疑はない。少くとも私は此悦びに向つて不斷の努力を獻げよう、私は惡が善に捷ちおうせるとは思はない。私は人間の深さを信じ眞理の力を信じてゐる。必ずや正しい道が最後の捷利者である事を信じてゐる。又自然の美しい意志がいつか滿たされる事を疑はない。又刄よりも愛が絶大な力の所有者である事を疑はない。又は柔かい人情が平和の固い守護者である事をも信じてゐる。よし様々な汚濁の勢ひが蔓らうとも、私は宗教が眞に此宇宙を支配する力だと信じてゐる。又藝術が此世を淨め美しくする力だと信じてゐる。爭ひは本流を作りはしない。愛に飢ゑる人情が此世の家庭を作るのである。人間の心の底にはどうしても奪ひ

得ない情愛の求めがあると私は信じてゐる。

私は重ねて貴方がたに私の心を傳へたく思ふ。決して今の武力や政治を通してのみ、人間を判じて彼下つてはいけない。人間の裡に潜む深い性質はかゝるものを越えて、眞に平和や愛情を慕つてゐるのである。悲しくもまだ今の日本は自ら正義の日本であると云ひ切る事は出來ない。(何處の國がかゝる大膽な發言をなし得るであらう。)然し此國に住む人々はその本性に於て悲しい事や罪な事に冷ではないと知つてほしい。又愛や人間の道に就てその心を注ぐ事を忘れはしないと知つてほしい。又不正な事に關しては、不正であると云ふ明かな反省が吾々の間にある事をも知つてほしい。人間の正しい運命を保持しようとて、今吾々は努力してゐるのである。それ等の人々は眞に貴方がたの淋しさや苦しさに對しての味方である。之は私一人の推量ではない。私の多くの知友が私と

同じ感を抱いてゐる事を私は知りぬいてゐる。

私が先年「讀賣」紙上に「朝鮮人を想ふ」と題する一文を寄せた時、日本の見知らない多くの人々から、どんなに厚い共鳴の手紙を受けたであらう。若し貴方がたの心に交る時が來るなら、吾々はどんなにか深い自然な友情を、貴方がたに感じることであらう。朝鮮が日本を愛し、日本が朝鮮を愛するとは、如何に自然な感情であらう。私は吾々の血がいつか互に肉身の兄弟だと云ふ愛の本能を、吾々の心に甦らす事を厚く信じてゐる。貴方がたはそれを疑ふだらうか。さう信じては被下ぬだらうか。私はさう信じて被下る事を切に望んでゐる。

二

私は朝鮮に關しては殆ど何等の學識を持たない。又朝鮮の事情に就て豐かな經驗を所有する一人では決してない。然し私に是等の躊躇があるとは云へ、こゝに私をして發言せしめる資格を全く缺いてゐるのではない。私は久しい間朝鮮の藝術に對して心からの敬念と親密の情とを抱いてゐるのである。私は貴方がたの祖先の藝術程、私に心を打ち明けてくれた藝術を他に持たないのである。又そこに於て程人情に細やかな藝術を持つ場合を他に知らないのであある。私はそれを眺めてどれだけ屢々貴方がたを、まともに見る想ひがあつたであらう。それは歷史以上に心の物語りを私に話してくれた。私はいつもそこに貴方がたの自然や人生に對する觀念を讀む事が出來る。貴方がたの心の美しさや溫かさや、又は悲しさや訴へがいつもそこに包まれてゐる。想へば私が朝鮮とその民族とに抑へ得ない情愛を感じたのは、その藝術からの衝動に因るので

あつた。藝術の美はいつも國境を越える。そこは常に心と心とが逢ふ場所である。そこには人間の幸福な交りがある。いつも心おきなく話し掛ける聲が聞こえてゐる。藝術は二つの心を結ぶのである。そこは愛の會堂である。藝術に於て人は爭ひを知らないのである。互に吾れを忘れるのである。他の心に活きる吾れのみがあるのである。美は愛である、わけても朝鮮の民族藝術はかゝる情の藝術ではないか。それは私の心を招くのである。どれだけ屢々私はその傍らに座つて、それと盡きない話をかはしたであらう。

　私は朝鮮の藝術ほど愛の訪れを待つ藝術はないと思ふ。それは人情に憧がれ愛に活きたい心の藝術であつた。永い間の酷い痛ましい朝鮮の歴史は、その藝術に人知れない淋しさや悲しみを含めたのである。そこにはいつも悲しさの美しさがある。涙にあふれる淋しさがある。私はそれを眺める時、胸にむせぶ感

情を抑へ得ない。かくも悲哀な美がどこにあらう。それは人の近づきを招いてゐる。溫い心を待ちわびてゐる。

貴方がたの過去の運命や又思想は如何なるものであつたらうか。その地理や隣邦との關係から來る避け得ない環境の爲に、溫く平和な歷史は永く保ち難かつたであらう。まして東洋の靜かな血が通ひ、佛陀の敎へによつて育てられた心には地の生活が如何に無常に思へたであらう。貴方がたは靜かな森の中や、人里の稀な山深くに心の寺院を建てた。それは眞に修道に應はしい場所であつた。淋しさのみが淋しさを慰めるのである。聲なくして靜に佇む悲母の觀音は貴方がたの愛した姿であつた。高麗の陶磁器は日々人の心に親しみたい爲の器であつた。それは古代に於てのみではない。李朝の代に及んでも日常の凡ての用品にさへその心を深く滲ませた。爲すこと行ふことに、見るもの觸れるも

のに、貴方がたはその靜なもの淋しい心を反映させた。日々眼に觸れるそれ等の器具の淋しい姿は、必ずや貴方がたの心の友であつたであらう。互に慰められつ慰めつ日々を送つたにちがひない。それは情に柔らかな作品であつた。私は今それ等の作をあり〳〵と心に想ひ浮べてゐる。流れる樣に長く〳〵引くその曲線は、連々として無限に訴へる心の象徴である。云ひ難いもろ〳〵の怨みや悲みや、寂しさや憧がれが、どれだけ密にその線を傳つて流れてくるであらう。その民族は應はしくも線の密意に心の表現を托したのである。形でもなく色でもなく、線こそはその情を訴へるに足りる最も適した道であつた。人は此線の秘事を解き得ない間、朝鮮の心に入る事は出來ぬ。線にはまざ〳〵と人生に對する悲哀の想ひや、苦悶の歷史が記されてゐる。その靜な内に含む匿れた美には、朝鮮の心が今尙傳はつてゐる。私は私の机の上に在る磁器を眺める每に、

寂しい涙がその靜な釉藥の中に漂つてゐる樣に想ふ。

屢〻是等の作品は私にかう話し掛ける。「人生はいつも淋しくしめやかに見える。長い間私達の民族は苦しい歷史を續けてきた。然し誰もその悶える心を察してはくれない。又何處にも私達の心を打明け得る友を持たない。私達はせめてもの想ひに是等の器具にその情を洩らしたのである。それ等のものゝみは私達を欺かない日々の友であつた。後に生れてくる人々よ、希くは是等のものを傍ら近くに置かれよ。それは聲なくともいつも人情を戀してゐる。是等のものを愛し用ゐて、吾れ等の心を溫め給へよ、溫められようとて私達は是等の作を造つたのである」。おゝ、私はかゝる聲が器の底から絞り出る時、どうして私の手をそれに觸れずにゐられよう。

或時その淋しい姿は亡靈の如く浮び出て私にかうも告げた。「他國の人々よ、

どうしてさう酷い事を吾々の民族にしむけるのであるか。私達の虐げられた運命が貴方がたの歡樂になるのであるか」。私はかゝる叫びを聽く時、眞に斷腸の想ひがある。「なぜ〳〵私達に愛を贈らないのであるか」、或ものはかく私に尋ねてゐる。「これ程人情に飢ゑる吾々に答へる人情はないのであらうか」と詠嘆の聲が聞こえてくる。「わけても血に近い日本の人達よ、兄弟の愛に吾々を結ばうとなぜしないのであるか。吾々は同じ母の懷に眠り、同じ傳說に生ひ立つた昔を想ひ囘すことがあるではないか。嘗て私達の僧は經卷を携へ、佛躰を贈り、寺院の礎を飛鳥の都に置いたのである。宗教に榮え藝術に飾られた推古の文明は私達の心からの贈物であつた。それ等のものは今も尙昔乍らの姿を殘してゐる。それにどうして再度ならずも、吾々の文化を馬蹄に蹂躙して厚い友情を裏切らうとするのであるか。かゝる事が日本の名譽であると誰が云ひ得るのであ

るか」。私はかゝる直接な訴へに詰られる時、答へ得る言葉を持たない。私がその器を淋しく見つめる時、その姿はいつも默禱するかの樣である。「神よ、吾れ等が心を遠く／＼御身の御座に迄結びつける事を許されよ。見知らぬ空に在す御身のみは、吾れ等を慰めることを忘れ給はぬであらう。御胸にのみ吾れ等が憩ひの枕はあるのである」。たわやかな細く長く引く線は、さう祈るが如く私には思へる。是等の聲が聞こえる時、どうして私はそれ等の作品を私の傍から離し得よう。おゝ、私はそれを溫めようとて、思はずも手をそれに觸れるのである。

四年前私が朝鮮を訪ねて以來、只の一時でもそれ等の作品の何れかを私の室から離した事がない。それはいつも私に話し掛けたい樣に見える。私はそれを冷い暗い場所に長くしまうに忍び得ない。私がそれを机の上に置く時、それは

悦んでくれるかの様に思ふ。それはいつも私を待つてゐてくれる。私はそれに近づかないわけにはゆかぬ。ましてその美しい姿は私の心を引きつけてゐる。それを眺めそれに手を按く時、私には心と心とが觸れ合う想ひがある。それはいつも私の情愛の友だ。私も亦彼等の親しい友だ。それが淋しく悲しい姿に見える時、私も淋しく悲しい想ひに襲はれてくる。それが私の傍らに在つて悦ぶ様に思へる時、私も心に嬉しく思ふ。かくして二人はいつも共に悲みや悦びの世界に歩む。

それは親しさの作品である。愛に憧れる作品である。それは人の心をいつも招いてゐる。人の情を待ちわびてゐる。どうして私はそれを音づれずにゐられよう。こゝに私がゐると私はいつも心に囁くのである。その作者よ、心安かれよと私は念じてゐる。かくしてそれが私の室にある限り、私達はいつも二人で

暮してゐる。私は孤獨ではない。其作品も孤獨ではない様に思ふ。孤獨の寂しみに堪へないで、それ等のものは作られたのではないか。私はそれを孤獨にしてはならない。私は朝鮮の藝術よりも、より親しげな美しさを持つ作品を、他に知る場合がない。それは情の美しさが產んだ藝術である。「親しさ」Intimacyそのものが、その美の本質だと私は想ふ。いつもかく想ふ時、どうして私はその作者と同じ血を受けた今の朝鮮の人々に親しさを感ぜずにゐられよう。私は早く貴方がたから離れてゐる關係を破らなければならぬ。

然しかゝる「親しさ」に於てのみ、私は朝鮮の藝術を解してゐるのではない。私はその內に潜む驚く可き美に對して、全き敬念を捧げないわけにはゆかぬ。それは親しさであると共に、眞に驚ぐ可き美の示現である。悲慘な運命に虐げられた朝鮮はその藝術の美に於ては君皇の位に列してゐる。何人もその悠久な

美を犯す事は出來ぬ。生命は短く藝術は長いと詩人は歌う。然し藝術に現はれた朝鮮の生命こそは無限であり又絶對である。そこには深い美がある。美そのものゝ深さがある。靜な內へ內へと入る神秘な心がある。それは神殿を飾るに足りる藝術である。朝鮮はよし外に弱くとも、その藝術に於て內に强い朝鮮である。嚴然として自律する朝鮮である。

或者は支那の影響を除いては、朝鮮の藝術はあり得ないかの樣に云ふ。或は又支那の偉大に比べては、認め得る美の特色がないかの樣に考へてゐる。實に專門の敎養ある人々すら、時としてかゝる見解を抱く樣である。然し私はかゝる考へが眞に獨斷に過ぎなく、理解なき謬見に過ぎぬのを感じてゐる。私はそこに日本に於てと同じく支那の影響を否みはしない。然しどうして支那の感情が、そのまゝに朝鮮の感情であり得よう。特に著しい內面の經驗と美の直觀とを

持つ朝鮮が、どうして支那の作品をそのまゝに模倣し得よう。よしその外面に於て歷史に於て關係があつたにせよ、その心とその表現とに於て、まがふ事ない差違があると私は解してゐる。

朝鮮の內なる感情がその民族に於て固有であり、內なる歷史がその經驗に於て獨特であるに從つて、その藝術も亦眞に獨步である。批評的歷史家はその國是を「事大主義」であると云ふ。然し少なくとも藝術に於てはさうではない。朝鮮の藝術そのものが、それ自身の美に於て偉大である。どこに事へるべき他の大があつたであらう。今日法隆寺や夢殿に殘された百濟の觀音は、支那のどの作品に劣るであらう。又どの作品の模倣であり得よう。それ等は日本の國寶と呼ばれるが、眞に朝鮮の國寶とこそ呼ばれねばならぬ。又は玆に慶州石佛寺の彫刻を撰んだとする。それはもとより唐代の作と關係があるにちがひない。然

し他に倣ひ他に事へた痕跡のみであらうか。そこには眞に動かし得ない朝鮮固有の美があるではないか。私はその窟院を訪ねた日を忘れる事は出來ぬ。そこは朝鮮がいつも保有する深さと神秘との絶える事のない藏庫である。人々は又高麗の陶磁器を宋窯の模倣であると云ふ。然し試みにその器に流れる線を一分でも何れへか矯めてみよう。吾々は立ち所に高麗の美を見失うのである。藝術は眞に心の微妙な發現である。それはそれ自身であつて如何なる他の性質にも還元し得ない作である。高麗の美は決して宋の美ではあり得ない。兩者にはその成分に於て技巧に於て近い素質もあらう。然し現はされた美には、まがひもない差異が嚴存する。高麗の器に流れる微妙な線の美しさは、少しでも宋窯に求める事は出來ぬ。それは眞にそれ自身の線であつて、一分だにそれを變へるなら、それは既に朝鮮の心から離れるのである。李朝の作に於てもさうであ

る。明の磁器と李朝のそれとのどこに類似があらう。どこに明の「大に事へた」李朝の美があらう。そこにはそれ自らの心があり生活がある。朝鮮の美は固有であり獨特であつて、決してそれを犯す事は出來ぬ。疑ひもなく何人の模倣をも又は追隨をも許さぬ自律の美である。只朝鮮の内なる心を經由してのみあり得る美である。私は朝鮮の名譽の爲にも是等の事を明晰にしたい。

その藝術が偉大であるとは、直ちにその民族が美への驚く可く直觀の所有者であると云ふ意味である。然もそれは粗野な美にあるのでもなく、强大な特質にあるのでもない。それは實に纎細な感覺の作品である。私は朝鮮民族の、美に對する敏鋭な神經に對しては、實に疑ひ得る聊かの餘地をも持たぬ。私はその藝術を通して厚い敬念を朝鮮に捧げる心を禁じ得ない。それは如何なる人たるを問はず正に抱かねばならぬ驚嘆である。此名譽こそは永く厚く尊重されねば

ならぬ。然るに何事であるか、その藝術的素質に豊な民が、今醜い勢ひの爲にその固有の性質を放棄する事を强ひられてゐるのである。私はこの世界の損失に對して傍觀するに忍び得ない。藝術への尊敬こそ國と國とを近づけるのである。世界を美に迄揚げるのである。日本は曾て朝鮮の藝術や宗教によつて、その最初の文明を產んだのである。今日此事は感謝を以て記憶されねばならぬ。私は悠久な朝鮮の藝術的使命を畏敬する事が、日本の執らねばならぬ正當な態度であるべきを想ふ。世界の藝術に獨特な位置を保有する朝鮮の名譽は、今後も尙永續されねばならぬ。その民族が絕えない限り、かゝる藝術は再度ならず甦るであらう。一國の藝術、又は藝術を產むその心を破壞し抑壓するとは抑も罪惡中の罪惡である。

吾々の間に朝鮮の作品が賞美せられてから、長い年月は過ぎた。然も今日そ

れは甚しい市價をさへ呼んでゐる。然し專門にそれを研究する學徒に於てすら、その美の內面の意味を捕へて、その民族固有の價値を認得しようとする者は絕えてない樣である。何故朝鮮の藝術を讚える事によつて、その作者である民族をも讚えないのであるか。昔の時代は去つたとしても、民族の血の質に迄變りがあらう筈がない。よし事情の變移はあらうとも、素質を迄否む事は到底出來ぬ。今日朝鮮に藝術が現はれないのは、單に製作の餘裕が與へられないからである。それは寧ろ吾々にこそ責任があるであらう。私は朝鮮が眞に美しい藝術を再び產む事を信じたい。私は近來二三の友と知るに及んで益々その希望を强めてゐる。若しも美術館にその古藝術を保護する事が、邦人のよい仕事の一つであつたなら、それ等のものゝ未來の作者を畏敬する事を、どうして吾々の任務から取り去つたのであるか。過去の朝鮮を愛して未來の朝鮮を敬はないのは、

過去の朝鮮に對する侮辱に過ぎない。過去への全き尊敬は未來への信賴に活きねばならぬ。私は古への朝鮮が驚くべき藝術を私に示す事によつて、現代の朝鮮にも深い希望を持つ事を學ばしめたのを感謝してゐる。爲政者が朝鮮を內から理解し得ないのは、一つには全く宗敎や藝術の敎養を持たないからである。只武力や政治を通して內から結び得る國と國とはない筈である。眞の理解や平和を此世に齎らすものは、信を現はす宗敎である、美に活きる藝術である。かゝるものゝみ第一義である。第一義なものにのみ人は眞の故鄕を見出すのである。信や美の世界には憎惡がなく反逆がない。永へに吾々の間から爭ひの不幸を斷たうとするなら、吾々は吾々の間を宗敎や藝術によつて結ばねばならぬ。かゝる力のみが吾々に眞の情愛と理解との道を示すのである。人はそれを理想に止まると云ふであらうか。然し之が唯一な然も最も直接な交りの道であると

云ふ事を眞に悟らねばならぬ。正に爲されねばならぬ規範の命は、躊躇なく爲されねばならぬ。

私は朝鮮に住む日本人の、所謂親しい經驗に對しては多くの信頼を持たない。內なる朝鮮に入り得ない限り、それは只外面の經驗に過ぎぬ。かゝる經驗は少しだに理解の裏書とはならぬ。人々には宗教的信念も薄く、藝術的洞察も乏しいのである。不幸にも人々は貴方がたを朋友として信じる事を忘れてゐる。彼等は只征服者の誇りに貴方がたを卑んでゐる。若し彼等に豐な信仰や感情があるなら、必ずや貴方がたに敬念を拂う事に躊躇しなかつたであらう。若しも朝鮮代々(よゝ)の民族が、その藝術に於て何を求めてゐるかを知り得たなら、恐らく今日の態度は一變されるにちがひない。多くの外國の宣教師は自らを卓越した民だと妄想してゐる。然し同じ醜さが優秀だと信じる吾々の態度にもある事を私

は感ぜずにはゐられない。然し敬念や謙讓の德が無い處にどうして友情が保たれよう、眞の愛が交されよう。私は日本に對する朝鮮の反感を、極めて自然な結果に過ぎぬと考へてゐる。日本が自ら醉した擾亂に對しては、日本自らがその責を負はねばならぬ。爲政者は貴方がたを同化しようとする。然し不完全な吾々にどうしてかゝる權威があり得よう。之程不自然な態度はなく又之程力を缺く主張はない。同化の主張が此世に購ひ得るものは反抗の結果のみであらう。日本の或者が基敎化を笑ひ去る樣に、貴方がたも日本化を笑ひ去るにちがひない。朝鮮固有の美や心の自由は、他のものによつて犯されてはならぬ。否、永遠に犯され得るものでないのは自明である。眞の一致は同化から來るのではない。個性と個性との相互の尊敬に於てのみ結ばれる一があるのみである。

私は今度朝鮮に對する私の情を披瀝する爲に、一つの音樂會を貴方がたに献

げたく思ふ。會は五月初旬京城に於て開かれる筈である。私は之が貴方がたへの情愛と敬念とのしるしである事を希ふ。又藝術的天賦に豐な朝鮮民族への信頼のしるしでありたく思ふ。その民族が殊に音樂に對して敏鋭な感情を持つ事を私は屢々耳にしてゐる。貴方がたは私の此企を受けて被下るだらうか。私と私の妻は此會を通じて貴方がたに逢へる時の來るのを、どれだけ心待ちしてゐるであらう。若し心が心に交り得るなら、それは如何ばかり深い此世での幸ひであらう。新聞紙上に傳へる所によれば、私達の渡鮮は藝術を通じて朝鮮を教化する爲だと書かれてゐる。然し之は全くの誤傳に過ぎない。それは皮淺な眼で私達の企を解釋した報道に過ぎない。私には教化とか同化とか云ふ考へが如何に醜く如何に愚な態度に見えるであらう。私はかゝる言葉を日鮮の字引から削り去りたい。朝鮮の友よ、見知らぬ多くの友よ、私の如き者を例外だと思つて

被下てはいけない。希くは精神に活きる私の多くの知友が、正義や情愛を慕ふ心に忠實である事を信じてほしい。若い日本の人々は眞理の王國を守護する事を決して忘れはしない。それ等の人々は既に貴方がたの味方である。私達は貴方がたを近い友として理解する用意を缺かないであらう。貴方がたと私達との結合は眞に自然そのものゝ意志であると私は想ふ。未來の文化は結合された東洋に負ふ所が多いにちがひない。東洋の眞理を西洋に寄與する爲にも、又東西の結合を全くする上にも、東洋の諸國は親密な間柄であらねばならぬ。わけても血に近い朝鮮と日本とにはもつと親しさや情愛が濃い筈であらねばならぬ。吾々はかゝる友愛をいつか又支那や印度との間にも結ばねばならぬ。かゝる結合が未來の文明に對して深大な意義を持つ事を貴方がたも信じて被下るであらう。それは只の夢想ではない。深く要求せられた自然の聲そのものであると思

ふ。私は海を越えて厚い心を貴方がたに寄せる。私は貴方がたが此心を受けて被下る事を疑はない。共に吾々は自然の心に歸らねばならぬ。人情の自然さに互を活かさねばならぬ。情愛にこそ眞の平和があり幸福がある。眞理はそこに固く保たれ、美はそこに溫く活きるのである。

私は貴方がたを想ふ。その運命を想ひ、その衷情を想ふ。私は此書翰を貴方がたの手に委ねたい。之を通じて私の心が貴方がの心に觸れ得るなら、此世の悅びが一つ私の上に加はるのである。更に又私の心を貴方がたが訪ねて被下るなら、二重の幸ひが私に降るのである。此世に於てはかゝる事が眞に深い幸福を意味するのである。見知らぬ力がかく爲させ給ふ事を私は心に念じたい。私は貴方がたの上に祝福を祈りつゝ、玆に筆を擱かうと思ふ。

千九百二十年四月十日　千葉縣我孫子町にて　柳　宗　悅　認　む

彼の朝鮮行

大正九年十月號「改造」所載

彼の朝鮮行

（斷　片）

○

彼はいつも彼の傍から離さなかつた朝鮮の磁器に又も心を奪はれてゐた。彼はいつもそれ等のものと話する事が出來た。然し互に通ふその心は、いつも彼に寂しい情を誘つた。彼はその姿に現はれる美しさの寂しさを想はない時はな

かつた。彼は屢々「最も悲しい心を歌つたものが、最も美しい詩歌だ」と云ふシエレーの句を想ひ起した。靜な沈みがちな白い釉薬や、その中から音もなく浮び出てくる青い草花や、又はそれ等のものを包むたわやかな線が、彼の眼には人知れぬ情の世界を示した。彼は樣々な事を想ひ回した。そこに現はされた人情や、心の訴へや、又はそこに住む人々の運命が、彼の心を繁く往來した。そうして終りにはいつも彼の眼に涙がにじんでゐた。彼はその壺を彼の手の内に抱く事を忘れなかつた。壺も溫められて平和な憩ひを受ける樣に見えた。

彼に平かでない日が永く續いた。彼が愛し又親しさを感じるその隣國の人々が、苦しい日を送つてゐる事が、絶えず彼の耳に聞こえてゐた。彼はそれ等の人々の哀情をまともに讀む想ひがした。なぜなら彼の手近くに置かれたそれ等の磁器は、その苦しさを彼に告げない時はなかつた。彼の眼の前には樣々な幻

像が浮んだ。時としてそれは見るに耐えない力の傲りであつた。又はあり得べからざる矛盾さの勢ひであつた。彼自らはその力の奴隷ではなかつたとは云へ、彼は屢々天の見知らぬ聲によつて、詰られる想ひを嘗めた。然も地の底から絞り出る訴へに彼の胸は壓せられる樣であつた。虐げられた聲を聞く毎に彼の心は沈みがちであつた。だが彼の心からは新しい情愛が湧き上つてゐた。彼は一日見知らぬ者の聲が彼に起てよと命じるのを聞いた。彼は沈默を破るべき時が彼に來たやうに思へた。彼は家を出て彼の苦む友達を訪はねばならぬ心に滿ちた。

○

彼が東京を立つて朝鮮へ向つたのは五月の初めであつた。彼は彼一人の此旅が如何なる結果を持ち來すかを考へる暇はなかつた。それは殆ど全く彼の心の衝動による企てゞあつた。情が彼に行く事を命じたからであつた。人々は問ふかも知れない。「多くの者が朝鮮の治政に努力してゐる。彼の一人の行ひが何を持ち來し得ようか」と。だが多くの者の所置は一度だにその國の心を溫めなかつたやうである。如何なる辯明があるにせよ、今日迄治政の行ひが日本と朝鮮とを近づけ得なかつた事は事實である。それのみではない、殆ど永遠の反感がその勞力の報酬となつてきた事を誰も知つてゐる。然し彼は情の國を信じてゐた。情が淸らかであるならば交り得る心と心とがあるのを信じてゐた。彼は情に活きる心に對して憎みを持つ友のない事を信じてゐた。それを信じないにしては彼自身の內に目覺まされた情愛は餘りに強くあつた。若しも彼が朝鮮の地

に入つて憎みの刄を受けるなら、それは彼の感情がまだ不純であるからだと思へた。彼は情愛による結合が此の世に可能である事を信じた一人であつた。彼は如何なる政治にも多くの信仰を持たなかつた。此世には愛による政治があり得ない事を知らされてゐた。然し彼は他の幸な世界がある事を信じてゐた。彼が朝鮮に旅する事によつて、かゝる世がある事を彼自らに味はうと欲した。

○

朝鮮の人々は日本とだに云へば、情もない暴力の國であると思ふであらう。此評は自然な結果であると彼にも思へる。然し若い日本の人々は眞理の守護者

として努力してゐる事を彼は目擊してゐた。今日彼等の心は領土や權力の問題に注がれてゐるよりも、遙かに強く民主の思想や、神の問題や、平和の意味に注がれてゐる事を彼は知つてゐた。日本がその政治や軍隊によつて代表された日本であると思はれる事を彼は殘念に考へてゐた。彼は彼の旅行によつて異る日本を人々に傳へようとの希願があつた。此事は彼の許に屆いた幾多の人々の手紙によつて立證する事が彼には出來た。

出發のまぎはにも彼は次の樣な溫い手紙を若い一人の友から受けた。

「今度朝鮮に行かれる事を、かげで嬉しく思つてゐます。朝鮮の同胞を懷ふと、僕はあやまりたい樣な氣がします。我等の兄弟が彼等に對して犯して步いた罪を、少しでも拭つて廻りたい氣がします。そして彼等の訴へと願ひとに耳を傾けたいのです。僕は朝鮮人のよき友達の一人でありたい。僕は貴方

が朝鮮人の最もよきすぐれた友である事を信じます。貴方が、やがて朝鮮に於て若い人々と打ちとけて相語る時、僕の彼等に對する止み難き同情をも想ひ起して下さい。」

彼はかゝる手紙を受ける毎に、どんなにそれを未知の朝鮮の人々に見せたかつたであらう。彼は又京城にゐる彼の愛した一人の日本の信徒から、次の樣な便りをも受けた。

「日本人と朝鮮人とが信賴し合ふ眞の平和は、宗敎的に覺めて理解し合ふ道しか他にない事を切に思ひました。……私は始め朝鮮に來た頃、朝鮮に住むことに氣が引けて朝鮮人に濟まない氣がして、何度か國に歸ることを計畫しました。……

朝鮮に來て朝鮮人にまだ親しみを深く感じなかつた頃、淋しい心を慰めて朝

鮮人の心を語つて呉れたものは矢張朝鮮の藝術でした。

私はいつもの祈りに、私が朝鮮に居ることが何時か何かの御用に立つ様にと云ふ事を加へて淋しい心に希望を與へられてゐました。」

彼は此友達に愛と敬意とを感じてゐた。殆ど全ての日本人が憎の的である時も、此友達ばかりは彼が住む町の凡ての朝鮮の人達から、愛せられ慕はれて、その名を知らない者はなかつた。此友に逢ふ事も彼には此旅での喜びの一つであつた。

○

彼は又此旅で彼がかねぐ朝鮮に對して抱いてゐる敬愛の念を、何事かによつて披瀝したい考へがあつた。彼は此爲に音樂會を開いて、その收入の全部を朝鮮文化の仕事に獻げようと欲した。又かゝる會を企てる事が、藝術を通して互を結ばせる一つの溫い道であると彼には考へられた。音樂者であつた彼の妻は此企を喜んで、自らその會に出演する日を心待ちした。

彼と彼の妻は渡鮮の志を果す爲にその準備に急がねばならなかつた。彼等は先づ次の樣な趣意のもとに內地での會を最初に開かうと欲した。趣意書は次の樣に書かれて、種々な彼等の友に發送せられた。

「吾々は朝鮮のことに心を引かれてゐます。今そこに苦む人々の心情や運命を想ふ每に、淋しい感情に誘はれます。本來人種的に又地理的に近い血緣の間である日本と朝鮮とは、もつと心からの友であつていゝと思ふのです。今

は不本意な趨勢の爲に二つの心が互を憎み拒けてゐます。私達は政治の力がどれだけ二つの國を結びつける事に成功するかを知りません。只此世に眞の平和や友情を內側から持ち來すものは、宗教や藝術の道だと信じてゐます。どうかしてかゝる道を通して互の愛を呼び覺ましたいと思ふのです。

吾々は朝鮮の人々が藝術的感性に優れてゐる事をその歷史によつて知つてゐます。吾々は隣國の人々に對する兼々の信賴と情愛とのしるしに今度渡鮮して音樂會を開きその會を朝鮮の人々に獻げるつもりです。又日鮮人協力の文藝や學藝の雜誌を計營したいと志してゐます。かゝる仕事は二つの心が互の平和に進む意味深い最初の一歩だと信じてゐます。

私達はその計畫を遂行する爲に玆にその資金を集めたく思ひ內地の各處で最初に音樂會を開き、來て下さる方々の淨財に待たうと思ふのです。私達は

多くの方々がいつも情愛の味方である事を信じてゐます。私達は私達の日本が朝鮮に對して情の日本でありたいと希つてゐます。情愛に二つの國が固く結ばれるなら、それは未來の東洋の文化を形造る美しく大きな動因になると固く信じてゐます。

千九百二十年四月。」

各地の人々から彼は厚い返事を受けた。さうして彼等の同情と好意とによつてかゝる會が企てられる樣になつた事を彼は深く感謝した。かくて後に彼の妻は凡そ一と月の間家と小供とを離れて、北は北海道や新潟や、南は阪神や岡山迄、寧日なく音樂の旅を續けた。

又京城での音樂會は、「東亞日報」主催のもとに凡て朝鮮の人々の盡力によつて開かれる運びになつた。此事は彼の豫期し得ない最初の感謝であつた。且つ

又日本人の側に於ても、彼等の企てを喜んで三度の會が基教聯合會の好意によつて催される事になつた。幾多の好意ある手紙が京城から彼の許に屆いた。彼は既に彼の旅の事で胸が一パイであつた。

○

船が釜山に入つたその夜は朧ろ月夜であつた。埠頭から出て朝鮮の土を踏んだ時、彼も彼の妻も彼の友も、どんなにか異樣な興奮を覺えたであらう。發車のしらせに、せかれる迄、夜に歩く白衣の鮮人に眼を奪はれてゐた。

汽車での一夜が明けて、食堂の窓から異つた景色を見た時は、水原近くにも

進んでゐた。赤い土やまばらに生えた春の草や、石の多い河原が交々窓のうちに現はれてくる。只一人で牛と土を耕し乍ら、靜に煙草を薰らしてゐる姿を見ると、誰も朝鮮に入つたと云ふ心が今更にするであらう。もう京城迄は一時間である。

汽車が或停車場に止つた時、彼の室は突然態々そこ迄迎へに出てくれた三人の朝鮮の友によつて賑はされた。彼はどんな喜びを以て是等の人の手を固く握つたであらう。その一室は嬉しげな顏に溢れてきた。九時少し過ぎて汽車は南大門の驛についた。彼は友の紹介によつて早くも見知らない多くの朝鮮の人々の中に圍繞された。京城で彼を待つてゐた彼の妹をさへ彼は暫く見失つてゐた。その他彼の親しかつた友や、彼の企てを助けてくれた未知の友を、それ等の人の間に見出した時、彼は溢れる喜びを感じた。彼は迎へられて場外に出た。す

ぐ前には南大門が高い空の中に昔のまゝに佇んでゐる。

門は五百年の間如何に多くの人を迎へ又は送つたであらう。或時はその君主を、又は捷ち誇つた將士を迎へたであらう。或時は外國の使者を又は義憤の人人を通したであらう。或時は敵の爲にその扉が潰された事もあらう。この都を訪ねる凡ての人は此門の陰を過ぎたにちがひない。今は誰が此處をくゞるのであるか。朝鮮が愛する人々であるか。又は朝鮮を想ふ人々であるか。或は又寂しくうなだれた苦みの人々であるか。門は永へに默してその苦みをも喜びをも語らない。それは何の心を以て今彼の一行を迎へたであらう。

○

彼は彼が京城につくや否や、彼の朝鮮の友によつて、心を盡した歡迎の會が彼の爲に設けられてあつた事を、感謝せずにはゐられなかつた。彼は滯京二十日足らずの間、異つた團體から四度の鄭重な招きを受けた。啻に夥しい數の料理が彼の爲に設けられたのみならず、今は稀な古風の音樂さへ特に用意されてあつた。彼は實に是等の會に於て朝鮮の人々とくつろいで話し會ふ最初の機會を得た。會は凡て朝鮮の人々の情に厚い挨拶を以て始められた。彼も立つて彼が此旅を企てた心を打ち開く喜びを得た。彼は是等の會によつて、今やもれ上ろうとする文藝の運動や、要求せられた宗教的信念が深く漂つてゐる事をまともに知る事が出來た。又是等の交りによつて感情の高められた現時の風潮や、何を人々が深く求めてゐるかをも一層深く知る事が出來た。彼は時としては興奮を以て、又時としては抑へ得ない親しさを以てそれ等の人々の言葉を聞いた。

凡ての人は彼の前には包むだ心を開いてくれる様であつた。與へられた深い此好意の前に、彼の心は一層鼓舞せられ刺激せられた。彼が今朝鮮を訪ね、その人々の心に面接してゐる事を想ふ時、彼の心は更に洗練せられ又嚴肅にせられた。彼は是等の人々の運命に對して獻げねばならぬ彼の仕事の前に敬虔な心を以て跪まづいてゐた。

彼は又依賴によつて滯在の間、四度の講演を開いた。忌憚なく彼の思想を表白する自由が、今の境遇に於ては不可能であつたとは云へ、彼は彼の氣持や彼の希望を公表する幸を得た。屢々若い人々の熱心な質問によつて、彼は一層それ等の人々の要求を知る事が出來た。それ等の會によつて彼が受けた好意は、いつも彼の熱情に新な油をついだ。

彼の妻の企てた音樂會は、京城に着いた翌日から開催された。彼女の滯京十

日の間、七度の音樂會が要求された。彼は最初かゝる會が京城の樣な所では、高貴な人々の助力なくしては決して行はれないと屢々注意された。然し彼はかゝる言葉を省みず彼の企てを徹しようと欲した。それが事實であるならば尙更彼の會は一般の人々の厚意によつて、一層平民的に開かれねばならぬと考へられた。彼は又今日の情況では日本人が、朝鮮人の間で滿足な會を開く事は出來ないとも云はれた。且つ又それが可能であつても、朝鮮人の手のみでよき結果を齎し得る會は開き得ないと迄云はれてゐた。彼は是等の批評を聞く每に、正に反對な事實が可能であると云ふ事を示さうと思つた。彼はその時彼を疑ひ朝鮮の人を疑ふにしては、彼の信仰は餘りに厚くあつた。

事實朝鮮側での基督敎靑年會に於ての音樂會は、彼を信じた友や又未知の人人によつて完全に用意せられた。集つた人々は堂に溢れて遂には入場を斷る事

を餘儀なくされた。此事は更に第二回の會をさへ要求した。彼も彼の妻も彼等を心から迎へた朝鮮人の情に對して量り得ない感謝を感じた。

彼の日本の友も彼の爲に非常な勞を惜しまずにくれた。かくして彼の敬慕する基敎の信徒の好意によつて、三度の會は强いる事なく盛況に終つた。彼の妻は尙要求されて更に二回の演奏を續けた。彼は是等の會によつて人々の好意に浴し、彼も亦彼の情を贈り彼の望を果す折を與へられた事を深く厚く感謝した。

かくして彼は人々の好意の間に幸な多忙な時を過ごした。然も彼はその間屢〻博物館に彼の樂しい驚愕の時を費してゐた。半跏して想ひに沈む彌勒の像や、美しく柔かな高麗の器や、强く大きな李朝の磁器に彼は彼を忘れてゐた。又どんなにか好んで町々を彷徨ひその風俗や人情に觸れ、又は古器物を漁り歩いた

であらう。彼は彼の愛する何物かを手にしないで家に歸る事はなかつた。

彼の二十日間の滯京は彼に忘れ得ない幾多の印象を殘した。それは涙の日であり喜びの日であり、感激の日であつた。心に於ての幾多の出來事が彼の上に起つてゐた。記者はこゝにそれ等の二三を語る事が、彼の氣持ちを一層明かに傳へる道であらうかと思ふ。

○

鐘路の大通りをパゴダ公園近く迄行つて少し北に入ると、朝鮮の古本を扱ふ書肆が今も殘つてゐる。時代に激變がある爲か、昔を今の世に引き繼いでくれ

るかゝる貴重な店は、漸次に此京城から無くなる樣である。一つには古書に通じる人が絶えてくるからでもあらう。

彼が一日此古本に埋つた店に入つて、學者だと云ふその主人の奧の間に案内された時、彼はその溫突(おんどる)の小さな室の壁に、京城市街の古地圖を發見した。古風なその圖を眺めた時、彼は昔に歸る想ひがした。近時著しく形を毀された京城を、その古地圖にあてはめてみて、彼は昔の純な京城を樣々に想ひ囘した。彼は歷史家でもなく、又地理を學ぶ者でもなかつたが、彼は彼の仕事に緣遠い此地圖を、高く拂つても買はないわけにはゆかなかつた。彼は此地圖を見る事によつて、古い朝鮮に深く交る想ひがした。日々變化してゆく京城の淋しい運命に對しても、彼は此地圖を長く保存せねばならぬと考へたのである。かゝる地圖なくしては誰が二十年、五十年の後、美しかつた京城を想ひ起す事が出來

よう。人は京城を破壞しても、地圖は京城を守るであらう。彼が其地圖を抱いて店を出た時、彼は又燃え上る同情を朝鮮の人々に感じた。

地圖が示す樣に京城の市街は明かにその自然を背景として計畫された都であつた、今日も少し步いて南山に登るならば、それを一目のうちに見る事が出來る。中でも美しいのはその南山を南に控えて、連る城壁を守る崇禮門（南大門）から、大通りを過ぎて光化門に至り、勤政殿の本宮を臨んで、高く北漢山を仰ぐ秩序ある建築とその自然の背景とであらう。何人も氣づく樣に此景福宮の建立が絕えず自然を省みて、その礎を置くのに正しい場合を擇んだと云ふ事を、注意しないわけにはゆかぬ。古代の人々はいつも都を自然に守られた個所に撰んだ。然し乍ら彼等も亦、その建築によつて自然を更に飾る事を忘れはしなかつた。自然によつて都は守られ、都によつて自然は飾られたのである。此事は

特に府の廣袤僅か東西に一里、南北に二十餘町の此京城に於て、明かに示されてあつた美觀であると思ふ。

彼は地圖を見るにつけてもかゝる美が今日失はれてゆくのを悲しまないわけにはゆかなかつた。市區の改正と云ふ名目はかゝる破壞を躊躇なく選んでゐる。かくして多くの勞力と資金と美とを持つた西大門は第一に此都から奪はれて了つた。美しかつたと聞く西小門も續いて人の眼を樂ます事を許されなくなつた。李朝の建築として優秀であると讃えられる南大門は、幸にも今日保護の形に於て僅かに殘つてゐる。然し如何なる旅人がそれを眺めて、感慨なくして過ぎる事が出來よう。殘留するとは云ふが、その莊嚴な崇禮門の美に、なくてはならぬ兩側の城壁は、破壞し盡されて見る影だにない。高く厚い均等の城壁を左右の翼としてそゝり立つたその壯大な姿の前に立つて、人々は眞に「崇禮」

の念を起したであらう。史家は此門の藝術的價値を賞めるが、然し孤立する門にのみ美があると思ふなら。それは淺い見方に過ぎぬ。然しかゝる事を云はなくとも、何たる侮辱が門を廻らす保護の柵によつて示されてゐるであらう。實に古代の美と何の關はりもない醜い新な石柱と鐵柵がそれを圍んでゐる。彼の感覺には此光景がどれだけ痛ましく思へたであらう。一日彼が東大門を過ぎた時、彼はかう心に呟いてゐた。

「東大門よ、お前のみが舊時の姿を止めて此京城を守つてゐる。どうか永く立つてゐてくれ。お前は凡ての友達が倒れてゆくのを見てさぞ寂しいだらう。然し誰か出て來てお前の運命をどこ迄も守護しようと云ひはるだらう。今後それが朽ちない限り、今迄の樣に日に何千何萬の人をそこから市内へ又市外へと通はしてくれ。汝寂しげな東大門よ、又明朝日が東から出る時、それを怨んでく

れるな。きつとお前を心から愛する者がお前の門をくゞつて入つて來るだらう」。

夕ぐれ空に彼は門を見上げ乍ら、一夜の幸な眠りが此門に降る樣にと心に念じてゐた。

然し京城での彼の感情が最もひどく破れたのは、彼が景福宮を尋ねたその時であつた。古風な長屋造りの家に守られた大通りを進むと、前の攝政大院君が、文祿兵火の殘墟を昔に戾さうとして企てた宮殿へと近づいてくる。此景福宮の建築は李朝最後の大作である。前には光化門が聳えてゐる。その威力に於て君位の莊嚴を表示するのに充分であらう。實に此宮殿の美は、その宏大な扉を過ぎて、更に奥深く二重石段の上に立つ勤政殿の大建築を見る時であらう。背後には更に倚北漢山と白岳とがそれを守るが如くに立つてゐる。下に蓮花を浮べて

四十八本の大石柱に支へられるかの慶會樓も正殿にま近く佇んでゐる。是等は李朝末期の作であつて、遠く新羅や高麗の作に劣るとは云ふが、然し東洋藝術のすたれてゆく今日、實に吾々に殘された貴重な建築と云はねばならぬ。その結構の大や美に於て、是等のものが京城の都を美しく飾つてゐる事を誰が疑ひ得るであらう。よしその裝飾や、線や、形相に東洋建築の衰頽と下降との徴があるとしても、今日如何なる日本の人々が之に比敵し得る建築を造り得るであらう。

然るに何事であるか、自然を深く考慮し、その排置に周到の注意を拂ひ、民力の限りをさへ盡して築造されたその計畫が、正に滅亡の嘆きを見ようとしてゐるのである。今日光化門と勤政殿との間に實に尨大な西洋建築が總督府の手によつて建ちつゝある。然も位置はやゝ西側に片寄つて、舊時の秩序を少しでも、

省みる事がない。さしも大きな正殿も今日は門を通して見る事さへ出來ぬ。否、今日では既に勤政殿の全景を正面から見る如何なる位置もなくなつたのである。何たる無謀の計畫で之があらう。やがて之が正殿を毀し、光化門を棄てる前徴でないと誰が保證し得よう。景福宮奥深くの幾多の小建築は、今は住む人もなく顧る人もなく、風雨のまゝに晒されてある。生ひ茂つた草木をわけながら、是等のものを目の前に見るとき、異邦の人ですら涙を眼に浮べるであらう。況んや朝鮮の人々に未だ記憶さへ殘つてゐる時、此事は由々しい出來事であらう。人々は必ずや寂しさから怒りに迄移るにちがひない。何たる無益な無謀な所置であらう。強いて民族の反感を買ふ爲に、此事を行なふのかと人は聞くにちがひない。此問ひが合理的でないとどうして思ひ得よう。

人はもう二度と此都に企てられた自然と建築との調和を見る事が出來ぬ。今

は只かの古い地圖ばかりが、舊時の彿を人々の詩情に贈つてゐる。、地圖こそはかゝる所置が果して正しいか否かの審判を、未來の人々に告げるであらう。

○

彼は朝鮮の小供達の服裝が好きであつた彼は町を歩き乍ら幾度となく、ふり返つてはその可愛い姿に心を引かれた。白や水淺黄の色の中で、丁度單調を銳く破るかの樣に、赤の上衣や黑の下衣が冴える樣に見える。時としては黃や紅や黑の縞が幼兒の身を鮮かに彩つてゐる。何と云ふ美しいつゝましやかな赤であらう。その黑にさへも朝鮮の味ひがにじみ出てゐる。黑と云へば一色よりない

と想ふなら、それは大きな誤りである。小供はどこも同じである。何事も知らないで樂しさに耽つてゐる。彼は吾身を之れに比べ、雜然とした此世の現實を想ひ回したりして、小供を見る事が好きであつた。何かは知らないが、わけても朝鮮の小供が彼には可憐に見えた。

彼が一日仁川に行つた時、是等朝鮮の小供と車が同じであつた。彼等は凡て十二三の女の子であつた。五六人連れ立つて遠足にでも行くのであらう。樂そうに一時間を語りあかしてゐた。

車が着いた時是等の小供は何ものかを急に見出したのか、驅けるようにプラツトフオームに出ていつた。彼があとを續いて車から降りた時、彼の眼には突如見なれない美しい光景が映つた。一人の若い日本の女教師が、それ等の小供を抱くように撫でゝゐた。小供は先生の名を呼び續け乍らその二つの袂にすが

つてゐた。殆どもう歩く事が出來ない程に前後左右から小供の小さい手に固く着物を握られながら、おくればせに場外へと出て行くのであつた。之を見た彼の眼からは、急に涙がとめどなく落ちた。おゝ、如何に此世での美しい出來事であらう。先生も生徒も嬉しさに凡てを忘れてゐる樣であつた。彼は仁川に着いて、船を海に浮べて遊んだ時も、只此の事ばかりを想ひ起してゐた。

若しも人に母の樣な愛があつて、又人に小供の樣な至純な情があるならば、どんなにか此世が喜びの世界であらう。日鮮の多くの人達が憎みの刄を示さない日がない今日、此溫い光景を誰が想像し得るのであらう。彼には凡ての問題が此實例によつて解き得るのではないかとさへ思へた。錯雜な爭の世の中で、かゝる喜びを見る事が人には如何に恩寵であり、希望であり、又驚く可き出來事であらう。彼もその日一日小供の樣に幸ひであつた。その日を想ひ出す毎に

彼は幸ひな心持ちにならない時はなかつた。

○

之とは異る內容ではあるが、同じ樣な出來事が彼自身の上にも與へられた。之は彼が朝鮮の旅から歸つてからの事ではあるが、彼には忘れ得ない出來事であるから、茲に附け加へておかうと思ふ。

彼は或る日招かれて、朝鮮人の或會合で講演する依賴を受けた。彼はかゝる機會が來る事によつて、一層彼自身を朝鮮人の中に見出し、又正當な了解を彼等から得る事が出來るのを希つた。彼はその依賴を喜んで受け、又彼を招待す

る彼等の好宜に深い喜びを感じた。

それは雨の降る夕方であつた。彼が扉を押してホールに入つた時、既に二百人近くと思はれる人々が彼等の座席を占めてゐた。凡てかゝる會合が當局の人々にとつて危險であると思はれるのは云ふ迄もない。集る人々は數人の看守者によつて警戒せられてあつた。かゝる空氣を味つた事のない彼は何となく重たげな感じを受けた。絶えまなくかゝる監視を受ける人々を想ふにつけて、彼は更に暗い氣持ちに打たれた。

此日彼が話さうと思つた主題は、朝鮮の味方としての若い日本の人々に就てであつた。云ひ換へれば眞理や平和や又は情愛に活きようとする日本の新たな精神を傳へたい主旨があつた。それ等の精神が朝鮮の運命に對して溫い友誼を盡す日がある事を彼は信じてゐた。

彼が控へ室に待つてゐる間、ホールには讃美の音樂が響いてゐた。やがて彼は靜な祈禱の聲が重い空氣の間に漂ふのを知つた。遠く故鄕を離れた、この寂しい此異鄕の地で、彼等は神に向つて何をか訴へ、何をか祈るのであらう。彼も亦心の内で神が彼等の寂しい希ひに答へ給はん事を祈らないではゐられなかつた。

扉の開く音に彼の默想は破られて、彼が今宵の講演を始めるべき時の來たのを知つた、彼は立ち上つて人を分け乍ら響く拍手の間に演壇に近づかうとした。此時ふと彼の肩を靜におさへて彼の耳に早く囁いた朝鮮の人があつた。

「今晩は貴方がたに迄警察の監視がひどい樣です。速記者二人迄來てゐる位ですから、どうか注意して話して被下さい。貴方の御身の上に若しもの事が起つてはすみませんから。」

公衆の中で突然に彼に囁いた此言葉は、どれだけ深い感激を彼の心に起したであらう。彼は見知らぬ人からの此溫い聲を聞いた時、どう彼の氣持ちを表はしていゝかを知らなかつた。彼は夢中で演壇に立つた。

思ひつ思はれつゝある此瞬間の出來事が彼の胸には消えない記憶を殘した。彼は人情の此世にどれだけ深い喜ばしさを味つたであらう。日本の人々をして朝鮮の味方である事を希つたその時、彼は實に朝鮮の人によつて味方せられた彼であつた。

如何なる政治が兩國の問題を解決するかを人は知らない。だか情に交る時、矛盾する二つの心がない事を彼は信ぜざるを得ないのである。彼も朝鮮の人々を想ひ朝鮮の人々も今彼を想つてゐる。幸が二人の間を流れてゐる。何の故に今二つの國が爭つてゐるのであらう。世界の心は愛情をと求めてゐるのではある

まいか。單純な吾々の感情にこそ、平和の王國が潜むでゐる。凡ての錯雜な問題は茲に終りを見るであらう。何故に一切の不自然な勢を棄てゝ人情のまゝに活き得ないのであるか。彼はこの宵の短い出來事に於て、彼の信念を更に强める事が出來た。

之は一つの小さな挿話に過ぎない。然しかゝる小さな出來事に、眞に大きな眞理があると云ふ事をどうして否む事が出來よう。

○

彼は鐘路の通りが好きであつた。そこばかりは昔の面影がある。こゝにはま

だ醜い洋風の建物に蠶食されない所がある。然も小さな和風の安普請も、こゝでは見ないですむ。朝鮮の町々が日々それ等の力の侵害を受けるのは、抗し難い事であらうが、誰にもそれは淋しい氣持を起させてゐる。だが鐘路の大通りは朝鮮の都だと云ふ心を今も送つてくれる。白衣の人の悠々とした姿はここには應はしい。日本では見られない太きな牛が柴をのせ、荷を引いてその間を通つてゆく。馬がこきざみに過ぎるのを見れば、旅の歸りでもあらう。人の往き來も玆は繁く、店の飾りも賑はつてゐる。夜每々々に夜店の燈火が夥しい人を集めてゐる。(その多い集りを恐れたのであらう。昨春の出來事があつて以來當分此夜店は禁じられた程であつた。)店には七寶をちりばめたと見える髮飾りや、あの眞鍮の樣々な器の光りや、又はあの木掘りの下駄を鬻ぐ荒物の店や、又は世にも稀な素紙の老舖や、それ等のものは昔乍らの店々であらう。町を進めば高麗

の塔も目に映り、遙か先には東大門が城壁をひかえて未だに佇んでゐる。此町はなくてはならぬ朝鮮の寶である。

彼は或日いつもの散策を終へて鐘路から南大門への電車を撰んだ。車はいつになく込み合つてゐる。でも彼は彼の座席を得る事が出來た。彼の左には年老つた女が白い包みと細い杖とを抱いてゐた。彼の右には兩班とも思はれる、高貴なみなりの老人が喪を示す白帽をかぶつて、いつもの正しい姿勢で彼の席にゆるやかに座つてゐた。黄金町の乘換えで車は殆ど滿員であつた。彼の前には二人の日本人が入つてきた。車が出ると彼等は聲高らかによも山の事を話しだした。話によれば一人は長く京城に居る商人のやうである。一人は此頃玆に來たらしい。恐らく案内でもされて廻つてゐる途中と見える。彼が何心なくそれ等の人々を眞近くに見た時、ふいにその内の商人の方が、彼の右に座つてゐた立

派な老人の帽子をいきなり手につかんで、さうしてそれを他の一人に指して、から云つた。
「中々うまく出來てゐる帽子だらう。馬の毛だ。よく見ろよ、こないだ死んだ王樣の喪中だと云ふんで今は白だが、ふだんは之が黑いんだ。中々手ざはりがいゝやね。」
「妙な恰好の帽子だね、所變れば品變るか。」
之を見た彼はいきなり此商人をにらみつけた。彼は腹立しさに感情がこみあげてきた。此無禮な所置にかの老人の心が平和であるべき筈がなかつた。老人の顏には恐ろしく苦い表情が浮んだ。然しこらへる樣にして帽子の位置を正した後、眼を横にそらした。
彼は激昂した。だが無禮な態度を受けてさへ、それを忍ばねばならぬ鮮人の

心を想ふ時、彼は又暗い心に歸つた。さうして彼等に代つて謝まる樣に、老人に向つて「許してくれ」と彼は呟いた。今迄此無禮な安價な優越感がどれだけ鮮人の反感を買つたであらう。嘗て彼は「日本人が如何なる態度を朝鮮人にとるかを知らうとするなら、朝鮮服を來て町を歩いてみると分る」と友達から敎へられた。彼は今此事がまがひもない事實だと云ふ事を信ぜざるを得ないでゐる。人は之が無學な商人の例外な所置に過ぎないと云ひ得るだらうか。彼は不幸にも京城に來てかゝる態度が底深く流れてゐるのを知つた時、どんなにか苦く思つたであらう。彼が逢つた要路の人々の口から、彼は嘗て朝鮮に對する愛情の一言をすら聞いた事がなかつた。異つた風俗や習慣は彼等の弄ぶ話題であつた。若し外國の人々が同じ樣な態度を日本にとると知つたら如何なる反感が日本の間に盛れ上るであらう。試みに東京の電車の中で同じ樣な出來事があつ

たとする、その無禮な行ひに憤らない日本人がどこにあらう。反感こそ自然である。醜い優越の感に傲り乍ら、反感を豫期しないのは矛盾である。彼はかく考へて終日不快であつた。

○

彼は滯京の間種々な朝鮮の藝術を見る事によつて、幸な多くの時を過ごした。然し中でも彼の友人が蒐集したもの丶内で、一つの李朝期の大壺を見出した時、彼は今迄に經驗した事のない感情に打たれた。彼はその日の日記に次の樣な感想を書いた。（壺は高さ尺五寸の大作であつて、白地に吳州で蓮花が畫いてある。

花びらや蕾は辰砂の爲に薄紅と綠色とを呈してゐる。挿繪第十八を見よ)。

「……陶磁器の浮び出てくる其立體にも彫刻の味ひがある。屢〻その形は人體の美さをさへ暗示する。此一個はわけても柔らかである。肌の美しさはその暖さをさへ想像させる。誰れもそれに手を觸れ得たい感じを禁じ得ないであらう。その圓みや、肩にそつて流れる線に自然の呼吸をさへ聞く事が出來る。然もその肌の色が如何に美しい白さであるよ。いつも朝鮮の磁器に見られる樣に靜な靑味がヴェールの如くにかゝつてゐる。此單純な白い色にさへ吾々は民族の心を讀む事が出來る。それは女人の樣なつゝましやかな、內に匿れた穩かな色だ。吾々は外に出ようとする如何なる傲りをも玆に見出す場合がない。凡ての美は內に內にと包まれてゐる。見えない何ものかを見守る人を心待ちする樣である。

その春靄の様な白い世界に、畫き出されたのは一束の蓮華である。たわやかな莖の上に花は彼女の靜な座を占めてゐる。薄紅と萠黃の色に花びらは穩かに開かれてゐる。右には一輪のふくらやかな蕾と、左には長い莖もたわゝに一つの豐な葉が畫かれてゐる。是等のものが朝まだきの露にぬれて、淡い靄の中に浮び出てゐる。凡てが夢みる樣である。音もなく亦僅かのゆらぎすらなく、蓮華は何事かに想ひ沈む樣に見える。丁度かの女人の樣な彌勒が半跏の姿で、手に首を傾けて想ひに耽る風情がある。

如何なる陶工が此永遠の作を産んだのであらう。彼は幾百年の朝鮮が心に抱いた想ひの限りを玆に寫した樣である。心がそれに眺め入る時、凡ては淨められ靜められ、彼岸の世に往く想ひがある。何たる靜けさであらう。之こそはかの佛徒が愛した蓮華の花さく淨土であらう。しめやかな淋しさや、靜な美しさ

が見る者の心に迫つてくる。余は如何に强く余が故郷の宗敎をまともに味う想ひがしたであらう。只の器だと云つて之を忘れる罪を犯してはならぬ。どれだけ多くの宗敎の筆が、か程迄に心の秘事を畫き寫せたであらう。此一つの壺を想ふ事は、直ちに此世を想ひ心を想ひ、彼岸の世を想ふ意味があらう。詩情の豊なものは、丁度キーツが希臘の瓶に向つて永遠の言葉を綴つた樣に、此一つに對しても優れた詩人となり得るであらう。盡きる事のない冥想の美が玆には恐ろしい迄に示されてゐる。見る者の呼吸は漸次に靜まつてくる。心はいつかその蓮華の座に移されて、彼も亦夢みる樣な世に漂ふであらう。我もなく彼もなく凡ては一に流る三昧にへと歸つてくる。

之は李朝の作に於ても、永遠なものゝ一つである。かゝる宗敎の域に達し得た作を幾許か此世に持ち得るであらう。」

彼はこの様な感じを記したあとで、彼の手記に次の様な考へをも書き添えてゐる。

「眞に藝術に於て心と心とが觸れ合うのである。若しも日本の人々が單に研究と云ふ態度を棄てて、朝鮮の藝術に心からの愛を感じるなら、その態度は一變するにちがひない。藝術はいつも吾々に情愛と結合との幸を與へてくれる。如何に愛すべきかを知る時、吾々は如何に敬ふべきかをも知るのである。互の敬愛にのみ眞の友情が起るのである。敬愛の念がなくしてどうして日本が朝鮮の友となり得よう。

藝術の美に於ては國境もなく隔離もない。心と心とがぢかに逢ふのである。藝術にはいつも和合の世界がある。政治や軍刀は排他でない場合がない。地に平和を望まうとするなら、それ等の道をいつか越えて、藝術や宗敎に迄心を深め

ねばならぬ。それ等の國にのみ愛の悅びがあるのである。

わけても朝鮮の藝術は人情に溢れてゐると思ふ。若しも人がそこに近づくなら、愛さずにはゐられない世界が前に開けてくる。丁度古代の日本の朝鮮藝術に於て、その文明の一歩を始めた樣に、今の日本もそれを顧る事によつて心を養ひ得るであらう。美の心に豐な日本は此眞理を受ける事に既に用意せられてゐる筈である。此事を想ふ時、朝鮮藝術の紹介が新しい驚愕を若い日本の人々に齎らす事を余は信ぜざるを得ないでゐる。」

彼は是等のことを書いたあとで、彼が不日朝鮮藝術史を書きたい希望をも述べた。且つ彼は殘された作品の無益な散逸を惜しんで、朝鮮民族美術館を設置したい願望をも記した。彼は前から此企てを實行しようとして、彼の所持金の許す限りをその爲に費し始めた。彼の家を訪ねた者は誰れでも知るであらう。彼

が家のどの室にも朝鮮の作品を見出さない場合がない。彼はいつか是等のものを纏めて、京城に送り返す日の來る事を待つてゐる。

○

嘗て彼が朝鮮を人々々に傳へようとして、かの石佛寺の彫刻や又三國時代の佛像を雜誌によつて公表した時、それ等の作品に對して如何に多くの讃嘆の言葉が未知の友から彼の許に屆いたであらう。若い無數の日本の人々が藝術に對する憧憬に於て特に著しい特色を持つ事を彼は知つてゐる。彼はいつか日本が藝術の理解によつて朝鮮の心に近づき得る事を信じてゐる。

銳敏な感情の所有者であるなら、どこに愛し得ない朝鮮の藝術があり人情があり得よう。彼のこの信念は朝鮮を始めて訪ねた二人の藝術家からの書翰によつて、明かに裏書された。

彼の近い友であつたLは、彼と共に一週間を京城で過ごした後、日本に歸つてから次の樣な感激の手紙を京城にゐる彼に宛てた。（Lは英國の畫家であつて、彼の最も親しい友の一人であつた。十年の日本での滯在と二年の北京での生活の後、まもなく故國に歸らうとする此友に彼は强いて朝鮮に行く樣にと勸めた。朝鮮に行く事は啻にその友を異常な美に近づけるのみならず、東洋の精神を味ふ上に缺いてはならぬ旅であると彼には思へた。友も此行をどんなにか期待して、歸國の爲非常に忙しかつたに拘はらず、一週の日を割いて、彼の行に加はつたのである。此短い滯在は此友にとつて最も感銘の深い出來事であつた。

彼は永く朝鮮の土地と別れる事をどんなに惜んだであらう。手紙にもその心を讀む事が出來る。

「僕がどれだけ重い氣持ちで京城の停車場を立つたかを君は察しるだらうか。僕の心は二つに割けそうだつた。

どうしてもつと早く朝鮮に來なかつたかを自分でさへ不思議に思ふ。もう國に歸る時が迫つてゐるが、五年もしたら必ず朝鮮に歸つてきたい。自分の半身はまだそこに殘してある。別れねばならぬあとの半身は苦しさに泣いてゐる。

車が早く動くにつれて、丘は長く美しい線のうちに浮び又浮んでゆく。あの獨特な優秀な朝鮮の線は凡てに流れてゐる。それは鋭く美しく且つ悲しく人の心にもつれてくる。その線は丘にも男の帽子にも又女の髮にも、兩者の靴にも見る事が出來る。

あの朝鮮の琴の響きにもそれが聞えてゐる。眞鍮にも鐵にも銀にも又金にもその線がある。あの高麗の器こそは自分を天の驚異に迄導いてくれた。自分は生涯の間線の美を愛してきた。どうして自分は今迄朝鮮に來なかつたのだらう。」

彼が朝鮮から歸つてまもなく、彼は又彼の一人の印度の友達が朝鮮に行くのを見送る喜びを得た。此友達も藝術の朝鮮に逢ひに行くのであつた。旅先から彼は又次の樣な手紙を受けた。

「あの壯嚴な奇異な東洋の美である金剛山から出した僕の手紙は受けとつて被下つた事と思ふ。僕はまだ京城の朝鮮の旅籠に泊まつてゐる。周圍や壁や特殊な屋根や、食物や、又凡てのものに僕は愛を感じ出し敬意を感じてゐる。僕は殆どこゝを去る事が出來なくさへなつてきた。恐らく僕が死ぬ時が來たら、僕はこゝに來て是等の人々の間で死に靜な丘に埋められたく思つてゐる。

だが今は止むなく京城を立つて數日間を開城や平壤で過し、大連の方に行く事に決めた。
昨日の夕方、君の注意によつてあの驚く可き李朝の壺をA氏の處に見に出掛けた。それは眞に寂しい偉大な美しい朝鮮美術の代表作だと思ふ。吾々はその寫眞をとつた。あれは全く稀有な作だ。それは朝鮮宗敎の深さに迄自分の心を波打たせ又導いてくれた。何も之以上書けない程色々な事で自分の心は一パイになつてゐる。」
此手紙を彼によこしたSは京城を去る時、殆どLと同じ樣な感じを抱いて、手紙を又彼によこした。
「心を魅るあの京城の町を去る時、自分の胸は泣いてゐた。實際自分が朝鮮の人達を愛してゐる程、そんなに强い愛を感じた事は今迄多くはなかつた。自

分はまもなく君に逢つて朝鮮に關して盡きない話をする日を待つてゐる。」

記者は此手紙を引用する事によつて、讀者に種々な示唆を贈る事を希つてゐる。藝術を通して朝鮮に近づく者が、如何に心からの愛を朝鮮に感じるか。又かゝる眼を通して朝鮮に近づく時、如何にそれ等の心が朝鮮の人々によつて愛を受けるか。是等の手紙はその活きた例を語るであらう。

その國の藝術を知る事が、やがてその國の人情を理解し、愛を呼び覺まし、敬念を抱くに至る道ではないか。かくして人がその人情を愛する時、彼自らがその人情に愛されてゐるのを見出すのである。藝術を理解する者には、あの默する丘や靜に流れる河さへも眞に其國の心を示すであらう。一國の文化をその自然や風土から全く分け隔てる事は出來ぬ。人情も風俗も習性も、又はその工藝も建築も衣服も器具も、山も河も木も花も凡て一個の離れ得ない有機體で

あらう。それ等の密意を味ふ者はLの手紙にある様に、あの訴へる様な情に滿ちた朝鮮の線を何處にも見る事が出來るであらう。民族が嘗めた様々の悲しみや寂しさや、又は心の美しさを、彼の四圍の何處にも見出す事が出來るであらう。かゝる光景が眼に映る時、どうしてその國やその人に愛を感じないでゐられよう。愛するならどうして又愛されずに終るであらう。特に朝鮮の美は愛に充ち愛に飢える美ではないか。

人々は是等の手紙が旅行者の單な感激に過ぎないと云つてはいけない若し。も内面の洞察がないならば「多年の經驗」も何の意味があり得よう。瞬時の直觀もその内面の意味に於ては永遠な深さがある。人情は知識よりも眞理の理解者である。情愛に於て交り得ない心と心とがどこにあり得よう。今日、日鮮の間に蟠る不幸は、只々情に缺け淚を持たない行ひの結果ではあるまいか。彼の日記

には次の樣な言葉が見出されてゐる。

「朝鮮の人達よ、一度貴方がたの心に活きた者は、眞にその國を去る事に悲しみを感じてゐる。貴方がたも亦離別の悲みを眞に知つてゐるだらう。近い日に再訪の日を果す事を私も希ひ、又貴方がたも望んでほしい。」

○

二十日間の滯京の後、彼は又彼が來た南大門を去らねばならない境遇にゐた。彼を送る多くの人に彼は再三別れの言葉を殘した。獨り車の窓から又朝鮮の景色を眺め入つた時、彼は胸に迫る感情を覺えた。彼は紙につぎの樣な事を書い

た。「朝鮮の人達よ、又暫くは貴方がたに別れなければならない時が來た。然し私の心は貴方がたから別れまい。貴方がたも心に於ていつも私に交つて下さるだらう。私に寄せて下さつた貴方がたの厚い志を私は決して忘れまい、私は貴方がたの中に於て、今迄味つた事のない幸福を感じさされた。私のこの短い旅が何事かを貴方がたの心に贈つたなら、それは私にはあり餘る悦びだ。貴方がたは又目前の事に重い心持ちに沈む事があるのであらう。その折にはその事をいつも考へてゐる私を想ひ起してほしい。見えない國に於て私達は私達の王國を持つてゐる。私はそれを信じてゐる。貴方がたもそれを信じて被下るであらう。—身は遠くに隔るが、心はいつも時と處とを越える。心の王國は何人にも奪はれはしない。それは現世よりも、より眞實な世界だと私は信じてゐる。

安らかな日が吾々が愛する友の上にある事を私は希ふ。かゝる希ひが神の嘉

し給ふところとなる事を私は心ひそかに信じたい。朝鮮の人達よ、又吾々が逢ふ日の近く來る事をお互に祈らう。」

○

「改造」六月號に種々な曲折があつた後、彼の「朝鮮の友に贈る書」が發表された。之は彼が朝鮮に行く前に發表したく思つたのであるが、遂に其望は滿されずに了つた。「改造社」から彼は非常な好意を受けて卷頭にまで載せたいと通知されたに拘らず、警保局の檢閲はその發表をさへ危くした。種々な交渉の後掲載はされたが、當局の見解によつて、その本文の主要な個所は不穩當であると云

ふ名のもとに殆ど全く抹殺せられた。彼がその雜誌を開いて讀み返した時、その削除の個所が餘り多い爲、自分が書いたものゝ樣な氣さへしない位であつた。然し彼の友がその哀れな結果に就て彼に厚い手紙を寄こした時、彼は返事を書いた。

「かう云ふ樣な事柄は、此世では屢々繰り返へされた。自分は別に驚きもせず又無益な怒りにも終りたくないと思ふ。自分よりもどれだけ多く朝鮮の人達は此事で苦んでゐるか分らない。自分は寧ろ內心に於て幸福を感じてゐる。なぜなら自分は二つの理由で、自分の趣意が守護せられてゐる事を發見したからだ。一つは眞理が最後の是認を得ると云ふ內心の確信によつてゐる。當局者の許認を受けないと云ふ事は、自分の信仰に對して聊かの傷にもならない。寧ろ此事は自分の信念が未來に活きると云ふ榮譽を意味すると考へてゐる。他の一つの

理由は不完全なものであつたに不拘、非常に多くの讀者からあの一文に對して厚意と讚辭と受けた事によつて、朝鮮の友としての日本をもつと明に意識する事が出來たからだ。實際此二つの事實は自分に今幸福を與へてゐる。

報告によれば自分の書いた趣意は朝憲の紊亂を意味すると云はれてゐる。又或點からすれば安寧の破壞であるとも評せられた。然し自分は是等の見解と全く正反對な、平和と愛と秩序とを求めてあの一文を書いたのであつた。日鮮の和合を求めたものが、不穩當であると云ふ逆理は誰によつても承認されないと自分は考へてゐる。恐らく余が朝鮮に與して日本に反旗を飜へすと迄思つたのであらう。然し余は朝鮮に對して抑へ得ない愛を感じると共に、若い精神的な日本に對して最も强い信賴を持つ事を實際に述べたのである。二つの國が互に眞理に活きる時に、眞の平和が結ばれる事を自分が書いたのである。

眞理を愛する事によつて、自分が罪を受けるなら、かゝる罪は自分には名譽であらう。多量な抹殺を受けたのは余が卑しかつた爲でなく、又余が誤つてゐる爲でもない。かゝる抹殺は眞理を行ふ事を恐れてゐる者の不自然な所置に過ぎない。此所置によつて私は一層私の信仰を保持して、二つの國の心からの和合に向つて、不斷の努力を献げたいと云ふ信念を强めたばかりである。」

かゝる氣持ちは彼を一層の嚴肅にした。記者は彼の許に屆いたと云ふ多くの手紙から二三の例を茲に引用しようと思ふ。彼はそれ等の引用が、餘り彼自身の事に關するので、その發表を躊躇したが、然し記者は之によつて彼の朝鮮に對する情が日本に於て一個の例外ではないと云ふ事を示したく思ふ。次の便りは田舍にゐる一人の敬虔な友から彼に屆いたのである。

「改造六月號にお出しになつた「朝鮮の友に贈る書」を讀んで涙が出ました。

私達の愛を代表して下さつたことを心から感謝致します。
葉書などで失禮ですが。私もまた先生と同じ愛を持つてゐる一人であることを御知らせして、感謝のしるしにしたく思ひます。
朝鮮と日本との融合の爲の御運動に、若し私の出來る事がありましたらやらして下さい。出來るだけの事は致しますから。」
彼はまもなく此友から、音樂會を開いて其純益金の全部を送るから、何か朝鮮と日本との和合の爲に用ゐてくれと云ふ好意ある手紙を受けた。又他の友達から次の樣な興奮した言葉を受けた。
「兄の「朝鮮の友に贈る書」を今讀んだ。なぜ早く讀まなかつたかと思ふ。自分は涙ぐんで盡ない悅を感じてゐるのである。あの一文を朝鮮人のみでなく、支那人も印度人も讀む事によつて、内面的に相互にの世界に活き得ることを、自分も

厚く信じてゐる。自分はあれを讀んで泣いてゐる。兄の心からの情愛にまともに觸れ得た事は感謝の他ないと思ふ。悦びまでにこのハガキをお書きした。」

別信、

「略、末文ですが貴方の書かれた「朝鮮の友へ」の大きな愛に對して、涙ぐまずに讀む事が出來なかつたと云ふ事を附け加へさして被下い。私は非常に感謝して居ります。

今迄多くの雜誌を讀みましたが、あんな感激に深い文字に始めて接しました。貴方の叫びは私の腔裏の血を動搖させてゐます。全部の文字に對して(一字の除外なく)贊成の心を表します。」

彼は又思ひがけなくも女の友からの熱心な手紙をも受けた。

「私が樣々の事で苦んでゐた時、貴方の文を拜見した事はどんなに嬉しかつた

か知れません。苦い涙ばかりの私には始めて嬉しさの涙がつたひました。貴方の御考へになつてゐらつしやること、なさつて下さる事などは、此世に對する希望を内から溫めてくれる光だと思つております。後略」

彼は是等の手紙によつて若い日本の人々が、既に朝鮮の溫い味方であるのを見出し、どんなに感謝し、又鼓舞せられた事であらう。よし彼の記事が多く削除せられても、削除せられないのは是等の人の心であらう。彼はその一文によつて一層朝鮮の心に深く入つたのみならず、日本の心にも深く入つた事をどんなに幸福に感じたであらう。

その朝鮮譯は「東亞日報」に掲載せられたが、僅か二回で發表を禁止された。然し彼は六月十六日の 'The Japan Advertiser' にその一部英譯が掲載せられた事を後に知つた。彼は禁止の禍に逢つた彼の文が見知らぬ人々の好意を受けて

廣く人々に傳へられた事を心から感謝した。

○

今は秋も半になつて、彼が愛したあの北漢山が、澄みぬいた空に聳えてゐるであらう。山は今も裏切る事なく京城の都を守つてゐる。然し住む人々の心に平和が守られてゐるであらうか。彼は此事を思ひ又寂しさに襲はれてゐる。彼は家に歸り遠く離れても、いつもその國の人々を想ひ囘してゐる。彼は彼の心に於てそれ等の人々を守る事を忘れまい。彼の愛するかの北漢山が今も都を守る事を忘れてゐない樣に。（一九二〇年九月）

「朝鮮民族美術館」の設立に就て

大正十年（一九二一年）一月號「白樺」にて發表。後別册に上梓す。
A. L. Sadler 氏によつて英文に全譯され The Jagan Adver-
tiser' jan. 23, 1921 に掲載さる。

「朝鮮民族美術館」の設立に就て

讀者のうち私の家を訪ねられた方は、その殆どどの室にも朝鮮の作品を見出された事と思ふ。私は此五年の間、日々をそれ等のものと共に暮した。屢々仕事に勞れる時、私はその美しさや優しさに心を忘れる事が出來た。私が室に入る時、それ等のものも私を心待ちする樣に見えた。かくして私達は晨にも夕にも親しい心の友となつた。讀者はあの默する器や布に心が無いと云ふだらうか。さうではない。そこには民族の心の脈搏や血の溫味が今尙殘つてゐる。特に親し

さや情をこめた彼等の作品は、見る者の心に厚く交つてくる。いつも私は靜なそれ等の友と、心おきなく話する事が出來た。流れる樣な線や淋しい模樣に、私は屢々その自然や人情を讀む事が出來た。いつもそれ等のものは私に美を贈り、私は心を贈つた。かくして私がその姿に心を强く引かれる時、私はそれ等の作品を通じてその民族が何を求め何を訴へてゐるかを、親しく聞く事が出來た。私は屢々淚ぐみ、思はずもそれ等のものを私の手に抱き上げた。

一國の人情を解さうとするなら、その藝術を訪ねるのが最もいゝと私は常に考へてゐる。日鮮の關係が迫つてきた今日、私はこの事を更に意識せざるを得ないでゐる。あの想ひに沈む美しい彌勒の像や、あの淋しげな線に流れてゐる高麗の磁器を見る者は、どうして民族に冷かでゐられよう。若しよくその藝術が理解せられたら、日本はいつも溫い朝鮮の友となる事が出來るであらう。藝

術はいつも國境を越え、心の差別を越える。私は私の所有する作品を凡ての人々の所有にしたい。美に心が沒する時、爭ひの情がどこにあらう。私は今朝鮮の藝術を、もつと人々に近づけねばならぬ任務を感じてゐる。私は日本の感情が藝術に對しては、特に敏銳であるのを知りぬいてゐる。私は朝鮮の民族のあの優れた作品が、私達の心に深く交る日の來る事を少しも疑はない。そうしてその作者としての民族が、吾々の心の友となる事をも疑はない。私はこの希望と信念とを果す爲に、「朝鮮民族美術館」の設立を遂に計畫した。

私は先づこゝに民族藝術 Folk Art としての朝鮮の味ひのにじみ出た作品を蒐集しようと思ふ。如何なる意味に於ても、私はこの美術館に於て、人々に朝鮮の美を傳へたい。さうしてそこに現はれる民族の人情を目前に呼び起したい。それのみならず、私は之が消えようとする民族藝術の、消えない持續と新たな

復活との動因になる事を希ふ。數の少ない朝鮮の作品は、恐らくあと十年の後には散逸の悲みを見るであらう。今朝鮮の人々は目前の出來事の爲に、それ等のものを顧る餘裕を持たない。然し今のまゝでおけば、いつかそれ等の作品に對する悲しい追憶が來るにちがひない。私はその不幸な散逸を防止する爲にも、かゝる企てが爲されねばならぬ仕事であると思ふ。之を急がないならば啻に機は失はれるのみならず、民族の固有の美すら、遂に過去のものとして葬られるにちがひない。

私は種々考へた末その美術館を、東京ではなく京城の地に建てようと思ふ。特にその民族とその自然とに密接な關係を持つ朝鮮の作品は、永く朝鮮の人々の間に置かれねばならぬと思ふ。その地に生れ出たものは、その地に歸るのが自然であらう。それ等を朝鮮の家屋に納めたい上にも、又蒐集の便宜の上にも、

京城は選ばれた地であると思ふ。あの北漢山は都を守ると共に、その藝術をも永くその許に守りたいであらう。

扨、こゝに集めようとするものは主として李朝期の作品となるであらう。之は新羅及高麗の作が今日既に得難いと云ふ消極的理由によるのではない。忘られた李朝期の作を、價値の世界に齎らそうとする積極的理由に基いてゐる。李朝の作に美を否むが如きは、洞察に乏しい偏見に過ぎぬと私は考へてゐる。一朝の勃興は又藝術的文化に、新たな方向と刺激とを與へる。李朝期の作に於て特に吾々は別個の風韻に觸れる事が出來る。それ等のものは此五百年の間、日日その民族の生活に交つてゐたのである。吾々はそれ等日常の器具に、その民族の特質や又は溫い血の流れをぢかに感じる事が出來る。實に是等のものはどくま近く迄續いて作られ用ゐられてゐたのである。今日の朝鮮を解さうと思ふ

ならば、その近い時代の藝術に對して正當な理解を持つと云ふ事が、まちがひなく必要であらう。こゝに集められる作品によつて今後李朝の美は必ずや人々の前に是定せられるにちがひないと考へてゐる。私は李朝の作品を集める事に特殊な意義を見出してゐる。

然し私は只作品の蒐集にのみ、目的を止めるのではない。私は更にそれを研究の資料として準備する事をも忘れまい。研究者も此美術館を充分に應用する事を躊躇して下さつてはいけない。私はいつかその美術館によつて、朝鮮民族美術史の編纂が果される事を厚く望んでゐる。のみならず私は美術館の名によつて、充分精撰せられた作品の寫眞複製が發行せられる事を期待してゐる。又是等の資料や研究が、未來の製作を呼起す動因になるやう、注意を拂はねばならぬと思ふ。歐米の物質文明の移入の爲に、東洋の貴重な手藝 Handicraftは漸

次湮滅の悲運を見ようとする。私は此美術館が嘗に過去の美しい記憶を人々に贈るのみならず、新たな作品に對する刺激をその民族に呼び起す機關になる事を希つてゐる。

然も亦、私の望む所は、この美術館をあの冷かな味のない陳列館の如きものにするのではない。私は充分な顧慮によつて、その室や排置や、光や位置にも、朝鮮の美を缺かない様にしようと思ふ。人々は單にそこに見んが爲に行くのではなく、朝鮮の心に親しむが爲に行く様にしたい。それ故私はその美術館が、日鮮の人々の親しく會し、心おきなく語り合ふ場所にもしたいと思ふ。吾々は今迄殆どさう云ふ會合の場所を持たない。然し藝術と云ふ普遍な國に入るならば、吾々は必ずやよき心の友であるにちがひない。私はこの美術館がかゝる親しい交りのよい機關であるのを欲する。朝鮮の地を踏む人々は此美術館を訪ねるの

を忘れて下さつてはいけない。朝鮮の方々によつても私の此希望が悦び迎へられる事を厚く信じたい。

私はかゝる企てが、私の朝鮮に對する心からの敬念と情愛との披瀝である事を希ふ。然し之は決して私一個人の仕事ではない。時に要求せられた自然な仕事であると思ふ。のみならず私は此企てを志すに當つて、京城にゐる私の親しい二三の友に、同じ意志を見出した事が、私に最後の決心を促したのである。私はそれ等の友の朝鮮に對する深い同情と、藝術に對する厚い理解とが、此仕事を可能ならしめる悦ばしい力である事をこゝに書き添えねばならない。

扨、私は此仕事を實現する爲に、一般の人々から理解と、援助とを得たく思ふ。私を信じ、又私が信じる友達を信じる方々によつて、幾分の資金を得る事が出來るならば、私は心から感謝したい。その方法に就ては別に規定もなく又

定額もない。無理でない範圍に於て出來るだけ多く此美術館の爲に淨財を分つて下さる事をお希ひしたい。一時でなくとも數回に分けて頂いても差支へない。又所持せらるゝ朝鮮の作品を此美術館に呈供し、又は寄托して下さるならば非常な感謝である。幸ひに寄附して下さるならば、直接私宛(東京市赤坂區高樹町十二)にか、或は今度私と此仕事を共に始めた下記の友人に宛て送つて頂きたく思ふ。朝鮮、京城西大門外、阿峴。淺川巧氏宛。(その後同氏は京城府外淸涼里に移轉した。)

私は讀者の朝鮮に對する情愛に於て、その寄附を受ける幸ひを希つてゐる。且つ又讀者が此計畫を人々に紹介して、それ等の人々からも資金を募集して下さるならば、二重の感謝である。

私は讀者から私及び私の友に悦ばしい便りの着くことを心待ちする。

（一九二〇年十二月）

朝鮮民族美術展覧會に就て

大正十年（一九二一年）五月九、十日兩日「讀賣新聞」所載。ほゞ同じ主旨を述べたものを同年五月號の「白樺」にも掲載した。後者は A. L. Sadler 氏の好意によつて英譯が 'The Japan Advertiser' (May 10,1921)に寄稿された。重複を避けてその本文の後半だけを、後に添へておいた。 展覽會は五月七日から十一日迄 東京市 神田區小川町の流逸荘で開かれた。預期しなかつた多くの方々の希望によつて更に十五日迄會を延期した。

朝鮮民族美術展覽會に就て

上

多くの友に。

私は小さな、併し美しい一つの展覽會を今貴方がたの心に贈らうと思ふ。見なれない奇異な數々のものが列べられてあると只思ふかも知れない。併し少しの間その室を彷徨つて、靜かにそれ等のものを見つめる餘裕を貴方がたが持つならば、音もない器の中から隱れた者が出て、貴方がたの心に囁くにちがひな

いと私は考へてゐる。若しも貴方がたの中のどなたかゞ、その時すなほに耳を傾けるなら、それが思ひがけなくも、貴方と血を分けた兄弟の聲であるのを氣づくであらう。その時それが貴方がたにとつて悅びでなくして何ものであらう。その小さな室に於て人は國の隔りを忘れる事が出來る。美に交る時人は思ひつ思はれつゝあるのである。私は此事だけは知りぬいてゐるが故に、此會を企てる悅びを持つたのである。私は之以外に全く何の望む所はない。

切迫した日鮮の今日の關係を、私は不幸な不自然な勢であると考へてゐる。誰も爭を愛するものはないはづである。兎も角事情を幸ひと自然さとに戻さねばならぬ任務が、人々の上に負擔せられてゐると考へてゐる。何億と云ふ人々の運命が今此問題に關はつてゐる。私は默しては居られないやうに思ふ。併し此事に對する私の解答は極めて簡明である。だが單純であるからと云つて、それ

を拒けて下さつてはいけない。正しい眞理は常に平易な眞理であると私はいつも想ふ。之を難かしい眞理と解して了ふのは、恐らく吾々の心が歪められてゐるからであらう。私にとつて温く活きるとは、情に活きると云ふより他に意味がない。爭へよと人情は命じてはゐない。情の自然さに從はぬばかりに、人はどれだけ多く自らを不幸にしてゐるであらう。人情が矯められ歪められるばかりに、冷かさが心を奪つてゐる。併し古來たえず人を情の人に戻さうとして、すさむ吾々の心を覺ましてくれた二つの道がある。それは云ふまでもなく宗敎の信と藝術の美とである。實際是等の道に活きるほか、人は全き彼自身を見出す事は出來ぬであらう。私は此事を確く信奉して動かない一人だ。人間に幸福や平和を齎らし、その運命を保證するものは是等の道よりほかないと私は信じてゐる。私はこゝに企てた展覽會が此世に於けるよき意志に添ふ事を希つてゐる

る。兎も角美しさや親しさを人々に贈る事によつて私は懐しい朝鮮を此會で貴方がたに紹介しよう。

下

先日私が奈良の博物館を訪ねた時、法隆寺所藏の驚くべき古藝術を見る事が出來た。併し國寶と云はれ、御物と云はれるそれ等のものゝ殆んど大部分が、朝鮮の作であると云ふ事を否む事は出來ぬ。吾々が營む聖德太子千三百年祭は、實に朝鮮への禮讚であつた。朝鮮の民族が偉大な藝術の民族であると云ふ事は、私を刺激し私を鼓舞し抑へ得ない希望を未來に抱かしめる。藝術の國である日

本は、また藝術の國である朝鮮に親交を感じるであらう。私は此展覽會が貴方がたに朝鮮を想ふ緣となる事を希つてゐる。

西歐の藝術に親んだ吾々は、いつか自らの故鄕である東洋の藝術を省みる時が來るであらう。それが自然であるならば、わけても日本に近い朝鮮の作に親しむ時が來なければならぬ。併し不思議にも今日迄それ等のものは多く注意されることなく葬り去られてゐる。併しそれが正當に注意されるならば、人々の朝鮮に對する思想は著しい變化を受けるであらう。私はかゝる希望を捨てる事は出來ぬ。私が今度京城に「朝鮮民族美術館」を設立するのも全くかゝる信念によつたのである。私はそれを果す前に一度東京で斯る機會を作らうと思つて今度の會を試みたのである。

これは私及び私の二三の友の個人的に蒐集した作品である故、量に於てもま

た價に於ても僅かなものに過ぎない。併し集めかたに方向があるといふ意味で、また集められたものに必ず特殊な美があると云ふ意に於て、質までが小さなわけではない。私達は今まで人々から注意されずに過ぎたと思ふ李朝期の作品を主として聚集した。多くはその民族によつて日々親しまれてゐた器具や家具である。それ等はもの珍らしいものではなからうが、それだけにその民族の心がぢかに現はれてゐる。展覽される品の主要なものは僅かな新羅及高麗の作を除いて、皆李朝の陶磁器である。その他、民族美術として注意すべき繪畫、刺繍をも添えた。また驚嘆すべき金屬の工藝品やまた朝鮮に於て特に發達したと思ふ木工品の數種を列べた。

會は五月七日から十一日迄の五日間、神田小川町の流逸莊で開かれてゐる。私は多くの方々がそこを訪はれて、親しく朝鮮のものを見守る機會を得られる事

を願つてゐる。私は此展覽會によつて貴方がたの訪れを無益にする事はなからうと思ふ。(五月六日)

附、(大正十年五月號「白樺」所載、同題、後半)

(前略)私は常々その一國の民情を理解しようとするなら、その國の民族美術 Folk Art を理解する事が捷徑であると考へてゐる。何人も知る樣に今や日鮮の間柄は不幸な冷かな關係に陷つてゐる。之は恐らく日本からすれば朝鮮を、朝鮮からすれば日本を理解すべきよき道が失はれてゐるからであらう。誰も溫い平和が双互の間に結ばれる事を仰望しないものはあるまい。私達は之を希望に止めず實現する爲に、それに近づかうとする第一步の證として此展覽會を企てるのである。若しも民族の美術に心を讀む事が出來るなら、何人も新しい心情や

理解を朝鮮に持つ事が出來るにちがひない。美は愛を人の心に目覺ますであらう。私はかゝる未知の美が、一般の人々の前に此展覽會によつて呈出される事を信じたい。若しもそれ等のものに隱れた美を見出すなら、その美の作者である朝鮮民族の運命に就て冷かではゐられないであらう。示される作品は實にまる近くまで續いて作られてゐた事を記憶せねばならぬ。私は李朝期の作品を集める事に特殊な意義を見出してゐる。

吾々は西歐の作品に寧ろ親しみ過ぎてゐるとも云へよう。併し不思議にも隣邦の藝術に就て多くを知り、又知らうとする者は少い。私は此種の展覽會が日本に於ての最初の企てだと云ふ名を受ける事を自然であるとは思ひ得ない。然し私達は兎も角事情を早く自然さに戻さねばならぬ。此展覽會が人々に朝鮮を理解する最初の糸口を與へるならば、此會の希望は充分に酬ゐられてゐるので

ある。

示される作品を僅か日常の器具に過ぎないと云つて笑ひ去つてはいけない。それ等のものにこそ民族の血が通つてゐる。私達は隱れたかゝる溫かさや美しさを見ぬく迄、それを見つめてくれる人々の訪れを待つであらう。然もそれ等のものに悅びを見出して被下るなら、私達にはあり餘る感謝である。

（朝鮮民族美術館を代表して）

朝鮮の美術

大正十一年（一九二二年）正月號「新潮」所載。
同年五月訂正加筆單行本に上梓す。

朝鮮の美術

諸者よ、それが朝鮮の人であると日本の人であるとを問はず、此小さな、然し情愛を以て書かれた本から、眞理の水を汲みとつてくれ。今や國と國との間柄は餘りに涸れきつてゐる。然し藝術はいつも國境を越えて、吾々の心を潤ほしてくれる。藝術の國に於ては凡てが兄弟ではないか。その美の滴りに潤ほされて書いた此一篇から、また時と處とを越えた眞理を見出してくれ。さうして私が書き殘した眞理が更に見出せたら、私に代つてそれを書き傳へてくれ。か

くして眞理が廣まるなら、國と國との間に緇る暗い事情が、如何に光ある一面へと回轉するであらう。讀者も此著者と一緒に、平和が東洋に固く結ばれる日を仰望して下さるであらう。

一

種々な醜い出來事の中に在つて、幸にも吾々の或者は美を理解し眞を理解しようと努めてゐる。然し藝術的意識が強まつて來た今日、不思議にも一つの美の世界が、吾々の傍らにあるのを見逃してゐる。却て人情を異にし國を隔てた西歐の藝術に對しては、誰も一つの明かな槪念を持つてゐる樣に見える。だが

血を交へ氣質を同じくする隣邦の藝術に就て、明かな理解を持つ人は非常に少ない。否、そこには殆ど何ものも無いかの樣にさへ考へてゐる。

然し朝鮮が彼女の藝術によつて、卓越した位置を東洋文化の中に認められる日は、まもなく來るであらう。何故今日迄それが一般から見棄てられてゐたのであらうか。美に對しては鋭敏であると自らも思ふ吾々が、わけても吾々に近い民族の藝術に就て、殆ど何等の意識をも持たないとは如何なるわけであらうか。遠い外國の人々に朝鮮が「隱者の國」として、永く封じられてゐたのは止むを得ないであらう。然し交通の容易な吾々の間に、それが失念せられてゐるのは寧ろ奇異な出來事ではないか。

支那の藝術の前には、獨立した價値をそれが持たないと云ふ獨斷が、吾々の理解を今日迄妨げたのであらうか。叉はその民族自らが、自國の美術に對して

何等の反省をも又研究をも加へてゐないが故であらうか。又は朝鮮と云へば文化の遲れた貧しい國だと云ふ粗雜な槪念が禍ひとなつてゐるのであらうか。又、はその國の美術が種に於て量に於て甚だ乏しいからであらうか。（此量を乏しくしたと云ふ原因が、實に破壞を好んだ倭賊の罪であつた事をどうして否定し得よう）。それにしても今日その價値が確認されてゐないのは甚だ不思議である。

而も朝鮮の藝術に對して殆どその價値を意識しない吾々の心理狀態には非常な矛盾があるときさへ考へられる。日本が國寶として世界に誇り、世界の人々もその美を是認してゐる作品の多くは、抑も誰の手によつて作られたのであるか。中でも國寶の國寶と呼ばれねばならぬものゝ殆ど凡ては、實に朝鮮の民族によつて作られたのではないか。之に次で支那のものが多いのは言ふを俟たぬ。此

事は史家も實證するまぎれもない事實である。それ等は日本の國寶と呼ばれるよりも、正當に云へば朝鮮の國寶とこそ呼ばれねばならぬ。

例へば法隆寺の金堂を飾る最も優秀な佛像は、今「百濟觀音」と呼ばれてゐるではないか。(挿繪第四)。長く秘傳せられた夢殿に在る同じ觀音の立像も、その様式からしても美からしても、まぎれもない朝鮮の作ではないか。中宮寺や廣隆寺に保存せられてゐる、あの美しい想ひがちな彌勒の半跏像も、様式は支那に起因しても恐らく朝鮮から傳來せられたものであらう。(挿繪第三と比較せられよ)。日本に渡つたものゝ内で、最も美しいものゝ一つである玉蟲厨子は、朝鮮の名譽をこそ永遠に傳へるであらう。あそこに畫かれた圖の様式はごく近代迄保留せられた。厨子と云へば、橘夫人の厨子に納められた阿彌陀三尊佛の後屏はどう思へるであらう。之を朝鮮の作であると是定する事には必ずや異論

があるであらう。然しその模樣や線や天女は、あの慶州奉德寺の梵鐘の圖樣（挿繪第十六）を想はせるではないか。共に六朝の遺韻を傳へたものであらうが、そこには朝鮮の心と密な關係がある。又は今日中宮寺に秘藏せられてゐる非常に美しい天壽國曼荼羅繡帳は誰の手によつて編まれたと思ふか。今日全く同一の模樣があの平壤近くの江西の古墳から見出されてゐるではないか。

工藝品に至れば殆ど列擧するに暇がないであらう。昨春聖德太子千三百年祭の法會の折に、特に展覽せられた多くの御物、又は正倉院に傳藏せられてゐる種々なる古作品、それ等のもの丶大部分は恐らく朝鮮から傳來せられたものであらう。比較的よく古法を保存してゐる朝鮮の作品には、それ等に類似する紋樣や手法を今も尚見る事が出來る。嚴密に日本の國寶から、朝鮮の作、又はその遺風を傳へたものを除去して了ふならば、如何にそれは殘り少く寂寞とした

ものであらう。かくする事はあの卓越した推古の黄金時代を、日本史から抹殺する事ではないか。日本は朝鮮の美に飾られた日本である。若しもあの賢明な聖徳太子が、朝鮮の文化を受け容れなかつたとしたら、日本は誇るべき國寶の幾百を失つた事であらう。推古の文化を追憶する時、吾々は朝鮮の文化を欽慕しつゝあるのである。時間には推移があり國状には變化があるであらう。だが日本の文明が朝鮮の美に澁められて生れたと云ふ史實こそは不變である。人々は何故此顯著な事實をもつと意識しないのであらうか。此の意識が强まるなるならば、朝鮮に對する吾々の態度は一變化を受けるにちがひない。その卓越した藝術に對する失念が、如何に多く隣邦への理解を妨げてゐるであらう。

而も人は遠い過去の朝鮮にのみ藝術があり文化があつたと思つてはならぬ。高麗の朝はその陶磁器に於ても旣に不滅ではないか。その時代は學藝の時代で

あつた。あの精確な立派な高麗版の大藏經より、より優れた佛典の編纂は、日支兩國を通じて一つもないではないか。末期であると云つて多く省みられない李朝に於ても、私は不滅な作品を幾度も目擊した。その木工品や磁器の或ものは眞に永遠である。あの日本の茶器が、屢々南朝鮮に於て作られた日常の器の遺韻を傳へたものであるのを誰も知つてゐるであらう。

私の樣な史學を專攻としない者にでも是等のことが氣附かれてゐる。若し正當な歷史家が出て來るならば、彼は彼の「朝鮮美術史」に於て、一つの驚愕を世界に寄與する事が出來るであらう。吾々の凡てが新な慕情を以て、吾々に最も近い同胞を、再び親しげに想ふ時がいつかは來るであらう。吾々二つの國は嘗ては溫い姉妹であつた。いつから刄が吾々の間を裂き始めたのであらう。かゝる不自然な勢ひを舊に戾す事は心情の希ひではないか。民族の歷史には興亡

があらう。然し國家は弱まるとも藝術は强い。それは時を超え國を越える。如何なる刄が朝鮮の美の運命をまで傷つけ得るであらう。

二

藝術は民族の心の現はれである。如何なる民族もその藝術に於て自らをまともに語る。一國の心理を理解しようと思ふならば、藝術を理解するにしくはない。美術史家は必然に心理學者である。現はれた美に心理の閃きを讀む時、彼は眞の美術史家たり得るのである。若しも朝鮮の藝術を解し得るならば、啻に吾々はその美の特質に就て知り得るのみならず、その表現を通してその民族が何を求め何を訴へたかを聞く事が出來るであらう。私も出來得る事なら此一篇に於

て、心を洞察し得るかゝる心理學者でありたいのである。

自然と歷史とはいつも藝術の産みの母であつた。自然はその民族の藝術に取るべき方向を定め歷史は踏む可き經路を與へた。朝鮮藝術の特質をその根柢に於て捕へようとするなら、吾々はその自然に歸りその歷史に入らねばならぬ。然も特質は比較によつて一層鮮かに浮び出るであらう。極東を形造る三個の國即ち支那と日本と朝鮮とが如何なる對比をなしてゐるか。私は之を省みる事によつて、固有な朝鮮の美を訪ねようと想ふ。凡ては同じ東方の氣質に、同じ文化の流れを受けてはゐるが、その自然が異り歷史が異るにつれて、藝術もその色調を鮮かに變へた。

支那はどこ迄も大陸であり大國である。横ぎる河は茫大であり、聳える山は巨大であり、廣がる原野は無限である。地は古く石は固く、氣候は激しく暑く烈し

く寒い。そこに活きようとする者は、是等の偉大な力に應はしい强さを持つた者でなければならぬ。此大地を歩く者は、安定なる足と壯健なる體とを持たねばならぬ。そこは偉大な地の國である。支那に現はれた思想と云へば地の敎へ儒敎ではないか。民族が持つ性情は忍耐强く、如何に確に此世の實際に堪え得るかを語つてゐる。建築も巨大にして平坦である。それは正しく不動の形をとつて地に横はるが爲ではないか。(あの尖塔をもつて高く聳える中世紀の基敎建築と、如何に好乎の對比であらう。一つは地に座し、一つは天に繋がれてゐる。儒敎は現世の敎へであり、基敎は來世の敎へであつた)。支那の歷史とは此巨大な空間の上に起つた偉大な興亡である。戰は激しく、城壁は高く、畫策は遠大であつた。何れの時代も誇るに足りる特殊な文化を產出した。一世を導く者は時代を征御する不撓な意志の權化であつた。かくして幽玄な思索や宗敎が榮

え、悠大な文學や詩歌が現はれ、健實な繪畫や工藝が後を追つて續いた。凡ては刺激多く重く鋭い。自然それ自身が弱いものゝ存在を許さぬ。人は肥滿し、動物は辛抱強く、食物は油ぎり、音樂は裂ける樣だ。

僅か一日餘りの航海で吾々が日本に來る時、如何に異つた光景が視野に入るであらう。自然は尨大な大陸から可憐な島國へと移るのである。濁る河は澄み、灰色の峰は綠の丘に變る。自然に起伏する線は穩かとなり、野邊は園生の樣に花に飾られてゐる。波の音は汀に囁き、微風は松の梢に歌つてゐる。空氣は濕り、土は柔く、氣候は溫和である。國は海に守られ、自然は人情を柔らげてゐる。どうして歴史はかゝる環境の中にあつて苦痛の歴史であり得よう。民族は外寇の恐れなく、その皇統を長く續けた。恐怖なき民族にはこの孤島は一つの樂園であつた。生活は餘裕を持ち人は情趣に耽つてゐる、此國に於て程嗜好に

時間を樂んだ類例は他にないであらう。力とか重さとか幅さとか、人はかゝるものを要する機緣を持たない。美しさと樂しさと優しさとが彼等の心に溢れてゐる。激しい自然に抗する力に彼等の生命があつたのではない。柔かな靜かな自然に從ふのが彼等の生活であつた。

此明かな對比の間に、朝鮮は如何なる位置を占めたであらうか。そこは大陸でもなく島國でもない。その何れでもない半島であつた。半島であると云ふ事が、やがて此國に運命の方向を定めた。南は多島の海に圍まれて、人は生活を樂まうとし乍ら、北は大陸の重荷に壓せられて、安らかな生命を得ないでゐる。人情は何處に永へな住家を定むべきかに惑つてゐる。前に溫い光を見つめつゝ背には寒い風の音を聞かねばならぬ。心は自由を欲して大海に出ようとし乍ら、體は大陸に固く結ばれてゐる。地は彼等にとつて平安な國ではない。かゝる國

土に現はれた歴史が、樂しさを缺き强さを缺いた事は止み難い命數であつた。斷え間ない外來の壓迫によつて、一國の平和は永く續かず、民は力の前に仕へよと强ひられてゐる。外寇を殆ど知る事なく過ごした日本と、如何に異つた境遇であらう。朝鮮に於ての歴史は實に對外の歴史であつた。然も事大を餘義なくされた歴史であつた。新羅の幸な統一も束の間に過ぎた追憶であつた。人々はどんなに釋放を求め獨立を希つたであらう。その望みが地に絶える時、如何に無常の感に打たれたであらう。彼等は信じ得べき何ものをも地上に見出し得ない。凡ての四圍は彼女を虐げるやうに見える。誰も彼女を力附けようとはしない、自分さへも力なく疲れてゐる。今日は活きる、だが明日も活きると誰が保證し得よう。まして自由に快活に生命を味ひ得るとどうして望み得よう。情は内に燃えても外に焰となる勢ひを持たぬ。かくして心は動き亂れてゐる。苦み

や淋しさが身に滲み渡つてゐる。地上の望みは彼等には薄くあつた。殘る彼岸に望みを托さねばならぬ。何事かを夢み何事かに憧がれ、悶えを內に匿してゐる。動搖と不安と苦悶と悲哀とが彼等の住むだ世界であつた。

そこでは自然すらも寂しげに見える。峰は細く樹はまばらに花はあせてゐる。地は乾き、ものは潤ほされず、室は暗く、人は少ない。藝術に心を托す時、彼等は何事を訴へ得たであらう。音に强い調もなく、色に樂しい光もない。只感情に溢れ涙に充ちる心がある。現はされた美は哀傷の美である。悲みのみが悲みを慰めてくれる。悲しき美が彼等の親しげな友であつた。藝術にのみ彼等は心を打ち明ける事が出來る。民族は與へられたその宿命を、美によつて溫め、それを無限の世界へ繫がうと求めた。その樣な胸を壓する美が、他の何處にあり得よう。咏嘆の響きが何處にも行き渡つてゐる。支那の藝術は意志の藝術で

あり、日本のそれは情趣の藝術であつた。然し此間に立つてひとりの悲哀の命數を負はねばならなかつたのは朝鮮の藝術である。

然し人々はそれをか弱い者の美であると卑めてはならぬ。若しもあのシェリーの有名な句が眞であるならば、その美は美の極みである。「最も悲しい想ひを歌つたものが、最も美しい詩歌だ」と彼は云つたではないか。不安は寂寞の心を誘ひ、寂寞は憧憬の心に導く。求めるものは地に充されるのではなくして、天に於て待たれてある。悲む者は慰められるとイエスは云つたではないか。悲哀とは神の心に守られる悲哀であらう。神は慰める事を忘れはしない。悲む者に彼の心は引かれてゐる。悲みが何故美を形造るか。又悲みの美が何故かくも人を引きつけるのであるか。それは神に想はれてゐる悲みなるが故であらう。力ある者は自己に活き、樂しき者は自然に活きる。然し悲む者は神に活きる。藝

術の美が悲哀の美に於て冴えるのは、それが見知らぬ神の無限な溫味に守られてゐるからである。(人は如何に深く悲劇を愛したであらう。傑出せる戲曲の殆ど凡ては悲劇であつた)。

朝鮮の民族よ、與へられた命數を堪え忍べよ。見えない國に於て、その運命は溫められてゐるのである。

三

是等は僅かな言葉に過ぎない。然し幾分かは朝鮮の美の基礎的特質に就て、讀者に暗示を送り得たかと思ふ。然しその表現の方法に於て、その藝術が如何

なる道を選んだかを明かにしない間は、全き叙述とはならぬであらう。私は又異る一角に立つてその特質を眺めて見よう。

一つの藝術の構成は種々なる要素を招いてゐる。然しその中で基調となるものが三つある。第一は「形」であり、第二は「色」であり、第三は「線」である。もとより是等のもの丶結合によつて一つの作品が構成される。然し各々は各々の特質や使命を持つ様に見える。現はすべき美の性質によつて、その要素の一つは他に對して主たる位置を占める。抑も朝鮮は彼女の藝術を構成するに當つて、その三個の要素の何れを主に選んだであらうか。何れの道が心の表現にとつて最も應はしいと考へたであらうか。此事が明かになるなら、その藝術の特質は更に分明となるであらう。私は順序として此三つの要素の各々の性質や、それぞれの意味に就て語つてゆかねばならぬ。かゝる說明は迂遠な道だとも思はれる

であらうが、然し之によつて一層明かに朝鮮の美を描き得ると私は考へてゐる。

抑も形とは何を意味し、形の美とは如何なる心を語るのであるか。形と云へば必然に安定せられた形との意味があらう。何故なら不安定な形は、心にも不安を誘ふが故に美感を奪ふであらう。形が美の要素となる爲には安定なる形であらねばならぬ。然し安定は如何にして保たれるのであるか。それが地上に安んずる時に、最も確乎とした姿を得るのであらう。形は大地の上にある形である。かゝる形は如何なる美を示すであらうか。健全な鞏固な確乎とした嚴然とした美がそこに示されてくる。それ故美に強さとか力とかを現はさうとするなら、作品は形に最も多く訴へねばならぬ。

若し茲に強大な民族があつて、その宗教が地の宗教であるなら、その民族から産み出される藝術は必ずや形の藝術であらう。實に此適例を吾々は支那に於て

見る事が出來る。既に私が叙述した樣に、巨大な自然に圍まれ、廣大な歷史に生ひ立ち、大地の儒教に育てられた民族は、一日も地を離れない實際的な强固な民族であつた。地に横る安定な形は必然その心のシムボルである。如何に支那の藝術は莊嚴な形の美に於て卓越してゐるであらう。あの周代のものだと傳へる銅器を始めとして、凡ての建築から器物に至る迄、その形は驚く可き强さだ。樂しい日本の民族が又は寂しい朝鮮の民族が、强固な形の美にその心を托す事がなかつたのは必然な數ではないか。私はその意味を明かにする爲に、色彩が示す美の特質に筆を移してゆかう。

色とは何を意味するのであるか。形につれて安定な形との意味が想ひ出された樣に、色と云へばそれが美しき色と云ふ事を必然に意味するであらう。醜き色は美感を離れる。扨、美しき色彩とは如何なる心を告げるのであるか。それが

美しければ美しい程、樂しさとか喜ばしさとか、又は平和な心とかを語るであらう。それは地を飾り地に樂む色彩である。若々しい活々した華かな姿である。若しも樂しい感情を美に表現しようとする者があるなら、彼は自から美しい色をと求めるであらう。疑ひもなく色彩の道が、樂しい平和な心を表現する最も應はしい道たるにちがひない。

玆に美しい自然に惠まれた民族があつて、その生活が境遇に保證せられてゐるならば、そこから現はれる藝術が色彩の藝術となるのは極めて自然な結果であらう。東洋に於てその位置に當るのは、云ふ迄もなく日本である。氣候の溫和な、花の多い綠に滴る自然の中に育てられて、どうして色彩に冷かでゐられよう。然も國土は安らかであり、生活は保證せられ、人情は樂む事を許されてゐる。樂しい色彩、然も優しく喜ばしい多樣な色彩、人々が呼んで綾錦と云つた

心が、此民族の住んだ世界である。色彩は日本に於て最も豐富にせられ可憐にせられ華かにせられた。世界の何處の國に、日本に於てほど美しい色に飾られた着物を選ぶ女があらう。純粹な日本の畫家は色彩家であつたではないか。光悅とか宗達とか乾山とか、是等の畫家によつて如何に色彩が豐富に表現されたであらう。(此特質は日本に於てのみではない。樂しさとか悅ばしさとか美しさとかを愛した畫家は、凡て色彩の畫家であつた。伊太利で云ふならばベネチヤ派の畫家はさうであり、近代で云ふならばルノアールの如きは、その代表者であつた)。寂しさに活きた朝鮮は、果して日本の樣に色を愛したであらうか。私は此事を語る前に、藝術の第三の要素である線に就て筆を續けなければならぬ。

線とは何を意味し、又如何なる心を内に示すであらうか。色が必然美しい色

との念を伴ふ様に、線と云へば細き線との意味がある。太き線は形に近づく故に線の意味からは離れてくる。然も細き線とは細長き線との謂であらう。線は長き線である。長き線は如何にして作られるのであるか。直線は二點間の最短距離である。それならば線の眞意は直線を求めてはゐない。直線ではなく曲線が線の心とも云ひ得よう。細く長い線は曲線によつて代表される。線の美は實に曲線の美にあるではないか。

扨、線の內なる意味は何であらう。それは形と正反する様に見える。形とは地に横へられる姿である。形はその重さに於て方向を大地に向けてゐる。だが線は或一點から他の方向へ去らうとする線ではないか。それは地に横はるのではなく、地から離れようとするのである。歸りゆく心ではなくして別るゝ心である。憧れる先は此世ならぬものに向けられてゐる。形に強さがあるならば、

線には淋しさがあるであらう。細き線とは既にその心を語るではないか。曲線とは風に靡く姿である。他の力に強いられる不安定な動搖する心の象徴であらう。地を離れようとは、此世の無常が身に迫るからであらう。遑々として何ものかに憧れ、然も切れなんとして切れない此世の絆が、あのたわやかな線によつて最もよく暗示されるではないか。彼岸を求めて地に苦む者の姿がそこに象徴される。線は淋しさを語る線である。

力とか樂しさとかゞ許されず、悲しさや苦しさが宿命として身にまつはるなら、そこに生れる藝術は形よりも色よりも、線をと自から選ぶであらう。それより應はしい表現の道は他にないからである。藝術に於てこの線の要素を多量に含んでゐる場合を求めるなら、朝鮮の藝術こそその適切な實例であらう。その民族程曲線を愛したものは他にないではないか。心情から、自然から、建築

から、彫刻から、音樂から器物に至る迄、凡てに線が流れてゐる。その著しい例證の爲に次の一章は捧げられるであらう。

私は是等の異る民族と異る藝術との間に、如何なる攝理があるかを知らない。然し不思議にも東洋の三個の國に於て、三個の異る自然が代表せられ、三個の異る歷史が表現せられ、三個の異る藝術の要素が示現せられた。大陸と島國と半島と、一つは地に安んじ、一つは地に喜び、一つは地を離れる。第一の道は强く、第二の道は樂しく、第三の道は寂しい。强さは形を、樂しさは色を、寂しさは線を選んでゐる。强さは崇められる爲に、樂しさは味はれる爲に、寂しさは慰められる爲に與へられた。各々は異る命數を受けてはゐるが、然し神は凡てを美の國に於て結び給ふ。

朝鮮の友よ、その運命を無益に呪つてはいけない。禱りの多い、憧れに滿ち

た、彼岸を慕ふ心の寂しさに、神は涙ある心を贈つてゐる。神は慰める事を忘れはしない。否、神とは心の慰籍そのものではないか。世の凡ての人々がその民族を虐げても、只一人その民族を裏切らない者がある。彼が誰でもなく、萬能の神であると云ふ事を信じていゝ。神よりより優れた味方がどこにあると思ふか。神は民族の求めに答へる事を契つてゐる。神の契ひに誤りはない。美のその世界に於て民族を既に永遠に化してゐるではないか。その藝術がある間、その民族に死滅はない。私は朝鮮の藝術が神に愛されつゝある藝術であると云ふ事を疑ふわけにゆかぬ。

四

私は朝鮮の歷史が苦悶の歷史であり、藝術の美が悲哀の美である事を述べた。而もその民族は賢くも表現に必然な道を選んで、形でもなく色でもなく、線に最も多くその心を托した事を述べた。私は此抽象的な概說から、實際の例證に移らねばならぬ。

試みに朝鮮の主都を訪ねて、南山に登り、その市街を展望して見よう。眼にうつるのはその家屋の屋根に現はれる限りない曲線の波ではないか。若し此原則を破つて、その中に直線の屋根が見えるなら、それは日本か又は西洋の建築

だと斷言してゐゝ。東京の小高い丘に登つて市街を見下ろす時と、如何に異つた感を受けるであらう。そこには殆ど直線があるのみではないか。曲線の波は動く心の徵である。都市は大地に横ると云ふよりも、波のまに〳〵浮ぶのである。そこに眺め入る時、彼岸の渚を打つ音をかすかに聞く想ひがある。

あの法隆寺所藏の「百濟觀音」を想ひ浮べよ（挿繪第四圖）。又は夢殿に秘められた觀世音の立像を心に浮べよ。やゝうつむく頭から、肩に沿ひ靜かに體から足にへと流れる、背高きその姿を目のあたりに眺めよ。特にその側面は美しいではないか。それは一つの形であると云ふよりも、寧ろ流れる線である。垂れかゝる衣さへも共に流れてゐる。作者は何故に一般の形式を踏まずして、彼女に細き胴體と、高き丈と、想ひがちな風情と、流れる樣な姿の線とを寫し出したのであるか。私は朝鮮民族の血の中に、深く交へられた動かす事の出來ぬ特

殊な性情を想はないわけにはゆかぬ。
　新羅の都慶州から數里を隔てた吐含山上に、今有名な窟院が殘つてゐる。景德王朝にゐた金大城の作だと云ふが、釋迦を中央に大小四十個近い佛像が刻んである。見る者は誰も驚くであらう。そこには固い石も柔く浮んでゐる。特に窟内にある十一面觀音や（挿繪第六）四人の女菩薩や（挿繪第九及十）十人の弟子や（挿繪第十一より十四まで）それ等のものが如何に美しく刻まれてゐるであらう。美を飾つてゐるのは同じ樣に流れる幾條の線である。水に浮ぶ蓮花の上に、想ひに沈む姿が心を内に秘めて佇んでゐる。彼等こそ民族の親しい姉妹であり兄弟ではないか。人の稀な峯の上の、暗い窟院が、人々の順禮したき場所であつた。中央に釋迦は默座する。然し凡てを知り凡てを覩じ、慈念に溢れつゝ、凡ての者に靜安な憩ひの場所を與へてゐる。（詳しくは本書二〇九頁「石

佛寺の彫刻」及び挿繪第五より十五まで參照)。

慶州と云へば私はあの奉德寺の梵鐘を忘れる事が出來ない。それは恐らく美に於て東洋無比の鐘であらう。江原道の五臺山にある上院寺の梵鐘も美しいが、それ等のものに陽刻せられた飛天の圖を見よ(挿繪第十六)。天女は衣と雲との波を分けて流れるが如く浮んでゐるではないか。あの樣な美しい人を魅する姿は世に多くは無いであらう。それは再び形の圖であるよりも線の圖である。

時代は溯るが、あの大同江附近にある。高勾麗時代の壁畫に於ても同じである。それは恐らく支那の樣式を模したものであらうが、然し朝鮮の味ひがにぢみ出てゐる。壁に畫かれた天女の圖を見よ(挿繪第一)、又は四神、即ち玄武(北)と朱雀(南)と青龍(東)と白虎(西)とを見よ。是等死者を守護する力の神さへも、幅とか嵩とか重みとかの美によつて現はされてゐるのではない。それは線の中

にある模樣だとさへ云ひ得るであらう。細くして長い曲線が凡てを支配してゐる。それは線によつて示された圖樣の極端な事例であらう。(挿繪第二を見よ)。吾々は建築とか彫刻とか繪畫とかに於てのみ、まがひもない此特質を見得るのではない。あの朝鮮最古の天文臺である慶州の瞻星臺にすら、よき曲線が見られるではないか。一般工藝品に至るに及んで、吾々は隨處に朝鮮の線を見る事が出來る。特に著しいのはその陶磁器である。例へば一つの酒瓶をとらう。時として首は非常に長く、時として頸は非常に細い。口は屢々根元から上迄延ばされ、手は細くして且つ長い。あの有名な李王家所藏の唐子葡萄模樣辰砂入の象嵌青磁瓶はその傑出した代表作であらう。(讀者は挿繪第十七に於て又その類型的な一つを見る事が出來る)。凡ては長くして細いが故に形は不安である。然し線を求める要求は殘りなく滿たされてゐる。如何に是等の細く長い部分が

實用には破壞され易く不適當であらう。然し人々は現し世に望みを持たぬ。實際的な要求を放棄して迄、曲線への要求を充たそうとした心理を忘れてはならぬ。床に置かれ平らかな形をとる鉢に於ても、かゝる心理がひそかに働いてゐる。地につく高臺は小さく、鉢はその緣に於ていつも靜な曲線を現はしてゐる。殆ど胴體をのみ持つ幅廣い壺の如きものに於ても、人々は無意識にその要求を交へた。朝鮮の壺の代表的な形とは如何なるものであるか。支那に於ける樣に壺は圓味によつて安定されてゐるのではない。依然として丈は高く腰から足にかけて姿は非常に細い。さなきだに小さな高臺の輪を斜めに切り落す事に於て、安定の度は更に失はれてゐる。それは再び地上に置かれるが爲の形ではない。然しそれが朝鮮の姿である。どうしてかく迄に線への心理が働いてゐるのであらうか。私は民族によつて經驗せられた苦しみと悲しみとが、忍はずもこゝに

心を誘ふのであると想ふのである。（讀者は挿繪第十八、十九、二〇とに於て、朝鮮の磁器のよき類型を見得るであらう。こんな普通のものにも淋しい美しさが、人知れず匿れてゐると私は想ふ）。

寂しさは秘められた寂しさであらう。賴るべき打ち明けるべき友を持たない心であらう。內氣な默した隱れた美が、かくして生れたのではないか。あの模樣を內に匿す象嵌の手法が、朝鮮に於て榮えた事は如何に必然な事であらう。あの淡い靜な青磁の中に、ほのかに白や黑のつゝましい色で、模樣を內に沈ませた心の働きを、何と人は想ふであらう。此手法は陶磁器に於てのみではない。彼等は好んで鐵製の器に、銀を刻みこんで模樣を內に匿した。

恐らく朝鮮の陶磁器に於て最も注意すべき事は、その殆ど一切が酸化炎ではなく、還元炎によつて燒かれた事であらう。還元炎とは煙多き燻ぶる炎であ

る。彼等は好んで此道を選んだ。燃えきつた明るい強い焔は、彼等の知らない焔である。彼等は煙によつて面を内に沈ましめ、靜な涙多い心を語らうとしたのである。否、かくする事が彼等の爲し得た只一つの應はしい手法であつたであらう。美はそこに顯はれる如くにして匿れてゐる。器は淡い水色の釉藥の中に光を消し乍ら靜に佇んでゐる。何たるいぢらしさが、そこにあるであらう。好んで酸化炎に器を燒いた日本の陶工とは如何に明かな心の對比であらう。一つはほの暗い一つは明るさに過ぎた面を示してゐる。之が味はれた異る生活の狀態であつた。吾々は光の豐な殆ど凡てが窓である家を建てる。だが朝鮮の人々は光の少ない壁の厚い窓の小さな家を選んだ。

啻に陶磁器に於てのみ線の要素が勝つてゐるのではない。度々吾々の眼に觸れる高麗朝の匙の如きは、全く線の流れだとも云へよう。それが實に日常の器

具であつた。之は例外ではない。どこにも吾々は朝鮮の線を見る事が出來る。机の足にも、抽斗の環にも、扇の柄にも、小刀の鞘にも彼等の心が潛んでゐる。それ等の事を心なく見過ごしてはならぬ。あの踏まれる足袋にも、泥にまみれる靴の一端にも、同じ曲線の血が通つてゐる。よく吾々に洞察の力さへあるならば、日常の器具を通して、民族の希願や引いてはその國の歷史や自然を迄理解する事が出來るであらう。線の密意を解き得ない間、人は朝鮮の心に近づく事は出來ぬ。

五

私は徐々に朝鮮の藝術が何を語るかを明かになし得たと思ふ。然し私は尙もその特質を明かにする爲に、更に二三の著しい事實を指摘して、私の云はうと、する趣旨を述べたく想ふ。

例へば模樣に現はれた心を語つてみよう。朝鮮固有の模樣の中で、特に有名なのは「柳陰水禽」の圖と、所謂「雲鶴」とであらう。特に是等の模樣は高麗燒とは離れ難い關係がある。何故朝鮮の人は柳を好み水禽を描き、雲を愛し鶴を慕はしく思つたのであらう。誰にも自からその意味が解るであらう。此世に樹の數は多くあつても、柳の枝ほど長くして細い美しい線を持つものはないではないか。たわやかな流れる樣なその線は、無常な此世に、休らひ得ない心の暗示ではないか。模樣は柳の模樣に於て、全き朝鮮の模樣を示してゐる。その淋しげな柳の陰に遊ぶ水禽は何を語るのであらう。水は流れる水ではないか、

それも線の流れであらう。禽はその水の流れのまに〱浮ぶ禽ではないか。一時も不動な形を得ない水の流れ、一時も足を大地に踏む事のない浮ぶ水禽、之こそその半島の民族が心に背めた親しい經驗の象徴ではないか。どこにそんなに淋しい美しい模樣があらう、人は屢々汀に沿ふて、まばらに生えてゐる浮草を、その傍らに見るであらう。（挿繪第十七は此模樣のよき實例にもと思つて選んだのである）。

恐らく雲鶴の模樣に於ても、同じ心の求めが讀まれるであらう。限りない大空の中に一つ二つの切れ〲に浮ぶ淋しげな雲、又はその中をどこをあてどともなく飛びゆく二三の鶴。あの淡い沈みがちな水色のおもてに此模樣を見る時、夕ぐれ高い空に一聲二聲物哀れげな響きを殘して、何處にか消えてゆく鳥の行衞を追ふ想ひがする。鳥の類は多くあつても、丈高く足長く、細い羽に空を飛

ぶのは鶴ではないか。それは心に招かれた模樣である。かく想ふのは附會であらうか。私はそこに匿された必然の意味があると想はないわけにはゆかぬ。

私はこゝに線が朝鮮藝術の殆ど凡てを支配してゐる特質であるのを指摘した若しも形と色との要素がそこに乏しい事を更に指摘し得たら、私の見解は尚も正しい基礎を得てくるわけである。私は此事に關しても興味深い幾多の事例をとる事が出來る。然し强い形の缺亡に就ては旣に語る必要を見ないかと思ふ。なぜなら、細い曲線とか丈高い姿とかは、自ら安定な形の美とは離れるからである。美が線に支配せられてゐるとは、それが强い形を缺くと云ふ事を裏書する。私は轉じて朝鮮に於ける色彩の缺亡に就て筆を新にせねばならぬ。之が立證せられたら、何故その民族が表現の道として、線を選んだかの理由を一層はつきり知る事が出來るであらう。

支那や又特に日本であの様に色彩の多様な衣服が發達してゐるのに、なぜその隣國の朝鮮に殆ど此事を見ないのであるか。用ゐられる衣服の色は、何ものの色をも持たない白色ではないか。さもなくば最も色を少なく持つ淡い水色ではないか。年老いた者も若い者も、男も女も小供も一様な白い着物を着るとは如何なるわけであらう。此世に國は多く民族は多いが、この様な奇異な現象は何處にも見る事は出來ぬ。史家でない私は、かゝる衣服の制度がいつの時代に起つたかを斷定する根據を持たない。然し白い衣はいつも喪服であつた。淋しい愼み深い心の象徵であつた。民は白衣を纏ふ事によつて、永遠に喪に服してゐる。その民族が嘗めた苦痛の多い頼り少ない歷史的經驗は、かゝる衣服を纏ふ事を寧ろ應はしくして了つたではないか。色に乏しいのは生活に樂しさを缺く、まがひもない證據ではないか。試みに朝鮮の人々が白衣の通則を破つて、

色に飾られる衣を選ぶ稀な場合を考へてみよう。只樂しさが許されてゐる時のみ、人々は彩られた着物を着るのである。その民族に許されたかゝる場合が三つある。只此三つの場合にのみ、衣は多様な色に飾られてゐる。三つの異例とは何何であるか。第一は、王皇とか貴族とか力あり富ある者によつて、屢々色に美しい衣が用ゐられる。理由は自明である。かゝる人々は安定な幸福な生活を樂み得るからである。第二には、祝ひとか祭りとか、人々が喜び合ふ時に、朝鮮の人ははでやかな着物を着る。婚禮の衣裳は何處に於ても美しい。あの正月とか端午の節句とかに於て、凡ての若い者は喪服をぬぎすてゝゐる。一年中に於ての許された賑はしい幸な樂しい時だからである。第三は、あの無邪氣な世の苦痛を知らない凡ての小供である。小供ばかりは屢々白い衣の中に在つて、色様々な姿をする。實に朝鮮に於て、色彩あるものを見る場合は、大概この小供

らしい無邪氣な色を示してゐる。樂しさは色に飾られ、淋しさは色を離れるのである。只此樂しさを許された三つの場合にのみ、朝鮮の人々は色を身に纏つてゐる。それは如何に必然な理由であらう。かゝる樂しさを持たない時、凡ての者は再び喪服に歸る。否、常にはかゝる樂しさを持たないが故に、白衣が選び得る常服である。この色彩を離れた世界が、人々の住まねばならぬ現し世であつた。形でもなく色でもなく、どこに彼等の心を托すべき表現の道があるであらう。殘る線が彼等に迎へられ愛せられた必然な理由に、人々は厚い理解を持たねばならぬ。

朝鮮の人々が色彩を樂む餘裕を缺いた例を、磁器に於ても見る事が出來る。磁器に於て色彩が最も發達したのは明の時代であつた。所謂「上繪」に於て、色は絢爛な美を競つたのである。支那から日本に傳へられるに及んで、色彩は一

層賑はしくせられた。九谷にしろ鍋島にしろ赤繪はその生命であつた。共に支那に於て日本に於て、かく迄に發達した上繪の手法が、あの磁器の時代であつた李朝に於て、少しも採用せられなかつたのは何故であるか。全く人々が色を樂む心の餘裕を持たなかつたからであらう。李朝には眞に永遠な磁器がある。だが用ゐられた顏料は、藍と鐵砂と、僅かばかりの辰砂とである。それも凡ては愼ましい色調であつて、華かな冴えたものを見る場合は少ない。私は屢々それ等のものに見とれて、作者の心に働いてゐる淋しい感情を想はないわけにはゆかぬ。

朝鮮の生活が一般に樂しさを缺いてゐたと云ふ實例をもう一つ添えておかう。それは子供が弄ぶ玩具の極めて少ない事實である。玩具とか人形とかその種類の豐富な事に於て、支那も日本も共に世界に知られてゐる。それなのに此二つ

の國の間にある朝鮮に於て、それを見る場合が極めて少ないのは何故であるか。此事も亦、今迄私が云はうとした事柄を裏書してゐるではないか。

同じ事が陶磁器に於ても云へる。世界の何處に於ても燒物の最も多い用途の一つは花瓶である。然るにあの陶磁器の國と云はれる朝鮮に、花瓶が殆どないのは何故であるか。人はあの色に美しい花を樂む心を持ち得なかつたからであらう。

音樂に至るなら、尙一層此特質を認め得るであらう。私は室に於て又路傍に於て屢々朝鮮の音樂を聞く事が出來た。然しそれを聞く毎に淋しい賴りない物哀れな感情に胸を壓せられてくる。連々として沈むが如く失せるが如き長き音律、音にも同じ朝鮮の線が流れてゐると私はいつも想ふ。それはどこ迄も哀傷の音樂である。あの張り裂ける樣な支那の常音の强さと如何に著しい對比であらう。

六

私は語るべき事を語り、遂に終りに達した。現はされた美が何を示してゐるかを再び一瞥する事によつて、此篇を閉ぢようと思ふ。

凡ての背景である自然は、朝鮮が踏むべき運命の方向を定めた。大陸の恐るべき北風は、不可抗な力を以て民族を背後に壓した。歴史は苦難の歴史である事を餘義なくされた。民族が長い間忍ばねばならなかつた境遇は、苦しみと悲しみとに滿たされてあつた。彼等の活きた世界は、自由でもなく强さでもなく樂しさでもなかつた。運命は此地上に悦べよと彼等に告げてはゐない。斷え間な

い壓迫に、平和は奪はれ幸福は失はれ、生命は憩ふべき枕を得ないでゐる。心はたえず動搖し不安は重なり、僅かな希望を彼岸に繫いでゐる。凡ての友は彼女を裏切り、賴るべき心を何處にも見出し得ない。無常な此世の空に咏嘆の響きが空しく歸つてくる。民は人情に飢ゑ愛に憧がれてゐる。

かゝる心情の泉から溢れた藝術は如何なる方向を選んだであらう。凡ての美は悲哀の美であつた。彼等は彼等の寂しさを打ちあける友を美の世界に求めた。彼等は之が爲に彼等に應はしい道をと選ばねばならぬ。形の强さや、色の美しさは彼等の知らない世界である。必然にもその民族は表現の第三の道に於て、進むべき方向を見出した。線は實に要求せられた線であつた。賴りない寂しげな心を傳へるのに、あの淚ぐましい線よりも、より應はしい道はないであらう。線には彼等にとつて盡きない密意があつた。民族は一切のものを線によつて美

化した。

それは情に溢れた線ではないか。涙に充ちる線ではないか。地に悩む者が、永へなものを彼岸に追ふ心の徴ではないか。誰かその姿を顧みて、共に涙に誘はれないものがあらう。「人々よ、吾れ等を温めよ」と、もの言ふ様にさへ見える。悲哀の美は心を歷する美ではないか、その美ほど人を魅するものは少ないであらう。美しいその姿は「近づいて吻けせよ」とばかりに云ふではないか。一度彼女に近づく者は二度彼女から離れ得ないであらう。人は思はずもそれ等のものに手を觸れる。悲みに於て心は心に逢ひ得るのである。誰がそれに冷かでゐられやう。たとへ朝鮮はその歷史に於て凡ての友を失つたとしても、藝術に於ては凡ての友を得るであらう。國家は短くとも、藝術は永い。

朝鮮の友よ、貴方がたは民族の獨立を、いつかは變化する政治に求める。然し

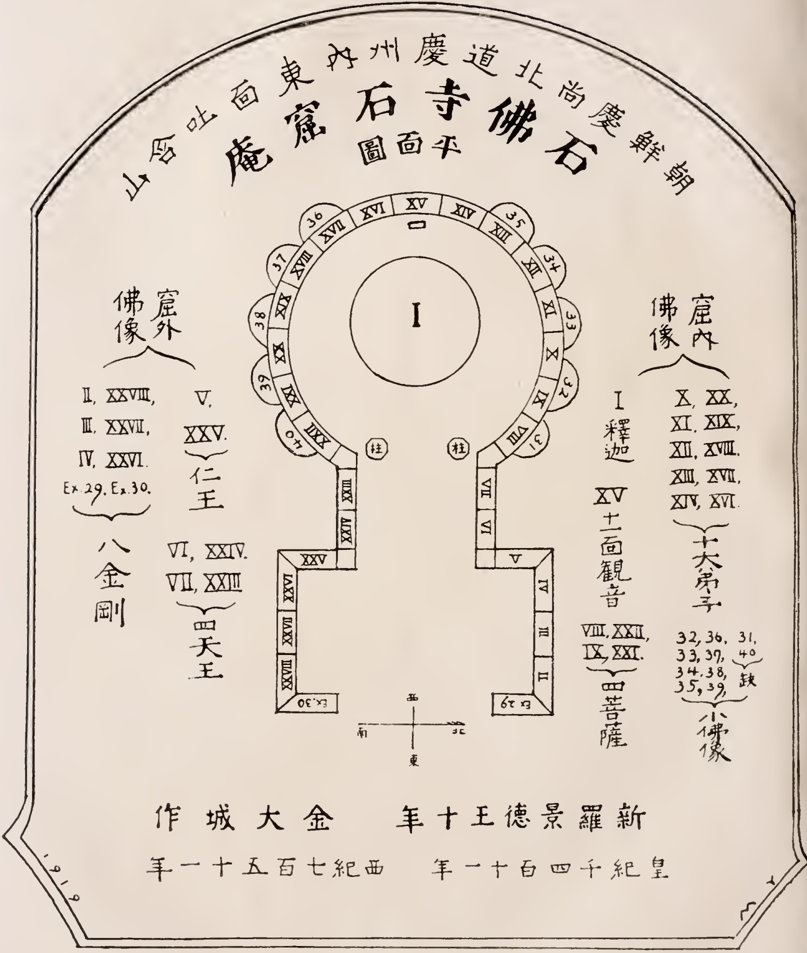
朝鮮の不變な獨立が、その藝術に於て果されてゐると思はないのか。今は永遠なものに心を注ぐべき大切な時ではないか。何故尙も與へられた美の血液を更に溫めようとしないのであるか。試みに想へよ、アクロポリスの柱は倒れてゐる。國はもうそれを樹て直す氣力を持たない。然し倒れてゐるその柱の一片が、ルーブルに不滅な運命を得てゐるのをどう感じるであらう。

朝鮮の友よ、音もない灰の中には、まだ燻ぶる火が殘つてゐる。希くはそれを以て心情の燈火をとぼせよ。さうして嘗て古人がなした如く、その民族の藝術に歸れよ。祖國の運命を悠久ならしめる力が藝術にあると信じ切れよ。亡びざる力が美にあると切に感ぜよ。劍は弱く美は强い。此普遍な原理にこそ、凡ての民族は信仰深くあらねばならぬ。

石佛寺の彫刻に就て

京城での半月の思ひ出に、此一篇を
淺川伯教、同巧兩兄に贈る。

大正八年（一九一九年）六月號「藝術」所載。


朝鮮慶尚北道慶州內東面吐含山
石佛寺石窟庵
平面圖
窟外佛像
II, XXVIII,
III, XXVII,
IV, XXVI.
Ex.29. Ex.30.
八金剛
V.
XXV.
仁王
VI, XXIV.
VII, XXIII
四天王
窟內佛像
I
釋迦
XV
十一面觀音
VIII, XXII,
IX, XXI.
四菩薩
X, XX,
XI, XIX,
XII, XVIII.
XIII, XVII,
XIV, XVI.
十大弟子
32, 36, 33, 37, 34, 38, 35, 39,
31, 40 缺
小佛像
柱
西
南
北
東
新羅景德王十年 金大城作
皇紀千四百十一年 西紀七百五十一年
1919

石佛寺の彫刻に就て

一

今から三年前――千九百十六年九月第一日午前六時半、うらゝかな太陽の光が海を越えて、窟院の佛陀の顔に觸れた時、余は彼の側に佇んだのである。それは今も忘れ難い幸福な瞬間の追憶である。彼及彼を圍繞する諸々の佛像が、その驚くべき晨の光によつて、鮮な影と流れる樣な線とを示したのもその刹那であつた。窟院の奥深くに佇む觀音の彫像が、世にも稀な美しさに微笑んだのも

その瞬間であつた。只この晨の光によつてのみ見られる彼女の横顔は實に今も余の呼吸を奪ふのである。

余が語る窟院の位置は、鷄林の南端、右には遥かに蔚山を、左には近く迎日灣を、前には白帆の浮ぶ海を隔てゝ、遠く「日の出づる國」に對するのである。新羅の舊都、慶州からは四里半である。窟は海拔一千三百尺の吐含山の東面に建立する。此至寶は今を去る千百六十八年前の作である。近くは人々によつて石窟庵と云はれ、古記錄によれば、明かに石佛寺と云はれた窟院である。

余は短い旅行の間三たびそこに順禮の足を續けた。その折の回顧は余にはいつも幸福な回顧である。余の此一文はその謝恩の貧しいしるしである。若しも余の筆が永遠な古藝術に現はれた隣邦の榮譽を語り、今は寂しく苦む人々の心に余の慕情を贈り、更に讀者の足をその窟院に引きつけて、新しい驚愕と理解と

の道を相互の間に開くなら、余には心に餘る悦びである。
余が今語らうとする此永遠の傑作は、東洋の文化がその高潮に漂つた時に、その靈氣に活きた新羅の人によつて始創されたのである。
第六世紀から凡そ第九世紀に及ぶ四百年は、東洋文明の黄金時代であつた。支那には隋唐の盛代があり、日本には推古、天平の文化があり、朝鮮には新羅の統一があつた。特に宗敎に於て、藝術に於て、今日殘る最大な作品の殆ど凡てはそれ等の時代に生れた。世は時に佛敎の時代であり藝術の時代であつた。
禪門初祖達摩が西來して、かの廣州の土を踏んだ頃、新羅は佛法の新羅たる經歷を始めた。それは第二十三法興王の初年である。眞興、眞智、眞平の三代を經て善德女王に至る頃、新羅はかの芬篁寺を持ち、かの瞻星臺を築くの文明を起した。之よりやゝ先、日本は推古の時代である。四天王寺、法興寺、次いで

はかの法隆寺が建設せられ、小野妹子が隋に使した時代である。その時こそ民は上宮太子の賢明な治政に世の幸福を樂み、生命の深さを味つたのである。

程なく支那は大唐の世に續くのである。百般の文化が欝然として隆起した時代である。彼には禪門の慧能があり、天台の智者があり、三論の嘉祥があり、華嚴の法藏があり、法相の玄奘があり、念佛の善導があつた。實に佛教各宗の宗祖は悉くそれ等の時代に生れた。

時に新羅には武烈王、文武王の英傑が相次で、百濟及高勾麗を平定し、三國を統一してその凱歌がかの扶餘の大塔に記された頃である。暗黑な寂寞とした朝鮮史上に、唯一の輝いた光明の時代が此日に次で現はれたのである。神文王、孝昭王聖德王を經て、第三十五景德王朝に至る頃は、唐との往來も繁く正に新羅盛代の極みであつた。それ等の年に佛國寺、四天王寺、皇龍寺、柏栗寺、奉德寺、掘

佛寺、興輪寺、引いては海印寺、通度寺、梵魚寺等數へるに餘る大伽藍が休む事なく建てられたのである。當時の大都慶州の繁榮は思ひやるべきである。三國遺事は記して云ふ、「新羅全盛の時、京中十七萬八千九百三十六戸、一千三百六十坊五十五里、三十五金入宅（之は大宅を云ふのである）」と。又同じ記に「第四十九憲康大王の代、城中に一草屋なし、角を接し墻を連ね、歌吹は路に滿ち、晝夜絶えず」と歌はれてある。奈良の都を今は盛りの櫻にたとへたものも同じ時代の吾が豐有を語るのである。

その頃である。支那には呉道子があり李白があつた。日本は諸國に國分寺を建て、東大寺に大佛を鑄、最澄が入唐し、引いて延暦寺、東寺の建設を見たのである。實に東洋の全土を貫いて、治政は固定し、學術は隆盛し、宗敎は勃興し、藝術は卓越し、民族は繁榮し、類ひない文化が此世に來たのである。

かゝる異常な輝く歷史のさ中に於て、余が語る石佛寺は、新羅慶州の東、東海に面する山崖にその礎を置いたのである。此窟院こそ啻に一國の製作ではなく實に隋唐の佛敎の結晶であり、引いては東洋の宗敎並びに藝術の歸結であつた。人は此窟院に入つて昔如何なる宗敎的經驗が人々の心に活き、如何なる藝術的衝動が人々の血脈に流れたかをまともに見る想ひがある。それは誠に佛寺でもなく、建築でもない。佛陀が活きる所であり、もろ〳〵の彼の弟子が住む場所である。この窟院こそその時代の活きた宗敎そのまゝである。恐らく此窟院の理解は東洋の宗敎そのものゝ理解に對して最も鋭い暗示を與へるのであらう。

二

石佛寺が何人の建立にかゝり、如何なる年代に出來、如何なる緣起によつて出來たかは、幸ひ今日殘された貴重な記錄によつて知る事が出來る。此古記錄の筆者は、かの「三國遺事」の著者僧一然である。

（註、石佛寺の事蹟はその他權近の著「東京雜記卷二」、一然の著「三國遺事」、及び「慶尙道江左大都護府慶州東嶺吐含山大華嚴宗佛國寺古今歷代諸賢繼刱記」等に載せられてゐるが、最も詳細であり且つ正確であると思はれるのは余が撰んだ次の記錄である。何れも佛國寺の事蹟と共に記されてある。）

「新羅國東吐含山華嚴宗佛國寺事蹟」——直接石佛寺及その建立者の記事は此古記錄の後半に次の樣に記されてある。

（前半略）「第三十一神文王の卽位辛巳は、唐の高宗開曜元年なり。「國に孝兒あり、金大城と云ふ。牟梁里（今の浮雲村なり）の貧女慶祖の女なり。卽位（神文王）二年壬午に生る（西暦六百八十二年）。頭大にして頂平なること城の如し。因て大城と名づく。生來家貧にして、福安の家に傭債して、田數畝を得、以て衣食の資に備ふ。時に開士（僧なり）漸開なるものあり。六輪廻を興輪寺（眞興王朝建立）に設けんと欲し、勸化して福安の家に至り、布五十疋を得たり。開士祝願して曰く、「檀越好布施、天神常護持、施一得萬倍、安樂壽命長」、と。城兒之を聞いて跳踉して入り、その母に謂つて曰く、余僧の誦偈を聞くに、眞に理あるべし。我等定めて宿善なく、今亦是の如し。今にして又施さずんば、何をか後報を望まんや。我

が傭田を法會に施し、以て後榮を圖るは如何と。母曰く善いかな誠に汝の言の如しと。乃ち田を開士に施す。未だ幾もなくして城(大城)物故す。(時に十八歳である。即ち牟梁里の金大城は神文王二年に生れ、後に記されし如く、その物故せしは孝昭王九年である。)「是日の夜、その國宰金文亮の家に天唱ありて曰く、牟梁里の大城兒を今汝の家に托すと。亮驚き怪み人を遣つて之を詰らせしに、城果して亡ぜしこと、天唱と日時を同うす。乃ち第三十二孝昭王の卽位九年庚子二月十五日なり。(即ち唐の中宗嗣聖十七年、西紀七百年)。「佛國寺古今歷代諸賢繼捌記」に右の出來事を「新羅孝成王間」と云へるは明かに孝昭王間の誤である。孝成王の在位は西曆七三七―四〇年に渡る故、此時迄牟梁里の大城が活きたとすれば、少くとも齡五十五歳となり、城兒と云へるに合せず。即ち城兒は此記事の如く既に孝昭王九年二月十五日に物故したのである。その日)「娠ありて兒を生む。左手握つて開かず、七日にして拳を開くに大城の二字を彫するあり、因て以て名づく。(即ち此兒を亦大城と名づ

けたのである。即ち前の大城は牟梁里の貧兒、後の大城は金文亮の子である）。城その前母（即ち牟梁里の貧女慶祖）をも第中に迎へ、兼ねて之を養ふ。長ずる及んで孝行廉明を以て獨り世に鳴る。第三十三聖德王の朝に摠官となり、貞明を以て移らず。三十四孝成王を暦て三十五景德王の朝に至り、超え薦んで大匡補國崇錄大夫と爲る。時に年四十九歲なり。（景德王即位八年）。

「一日吐含山頂（慶州內東面にあり）に遊獵して一熊を捕得し、因て山下の村に宿す。熊變じて鬼となり夢に現はれて曰く、汝何ぞ我を殺すや、我還汝を啖はんと。城怖れ據つて罪を容赦せんことを請ふ。鬼曰く、我が爲に寺を創らん乎と。城諾す。既にして覺めて汗流れて蓐を被ふ。即ち寺をその熊を捕へしの地に立つ。因て熊壽寺と名づく。（「古今歷代諸賢繼撰記」には、「原野を禁じ、爲めに熊壽寺、長壽寺をその地に搬む、因て情感ずるところあるを以てなり」と書かれてゐる。今日不幸にして熊壽、長壽の兩寺は荒廢

してそのあとがない。古地圖によつて案ずれば今の佛國寺から東北にあたる程遠くない山下にあつたのであらう)。奇なるかな態變じて鬼となる、豈異物ならんや。東岳の仙靈、禪刹を建て重ねて佛法を興さんことを欲し、故に身を變じて鬼となり、而して故に死するのみ。又大城をして宿因を開悟せしめ、惡業を造らず、勝を得易からしむるなり。果して若し然らずんば、彼れ異類を以て、豈佛法を興さんと欲するの意あらんや。これに跡つてこれを觀れば、眞に佛法に付して以て伽藍の神を擁護せん爲なるや必せり。

「因て悲願を發し、景德王卽位十年辛卯(西紀七百五十一年)、大城五十一歳の時)、現世の父母の爲に、佛國寺を重創し、多寶、無影の兩塔を鱗次敬造し、而して一つは無影塔を以て、釋迦如來常住說法の寶所と爲し、(故に今日無影塔は釋迦塔とも呼ばれてゐる。)無影塔の名の由來は、寺記によれば次の如くである。「傳ふ、寺を創る時、匠工に唐より來れる人あ

り。一妹あり阿斯女と名づく。要あり訪ねて輙ち到る。來を通ぜしに、則ち大功未だ完からず、陋身を以て許納すべからず、明旦坤方十里ばかり、天然の澤より彼を臨めば則ち庶くは見るべしと、斯女依て從つて往いて見る。則ち果して鑑るに塔影なし、故に之を名づけて「無影塔」と曰ふ」と。今日もその澤が殘つて影池と呼ばれてゐる。傳說によれば、後にその斯女は兄に逢へず、池に映る彼の姿も塔も見ないで歸るのを悲むで、そこで死んだと云はれてゐる。工が終つて兄が此事を始めて聞いて妹の爲に一像を刻んでその池の傍に立てた。今尙それは殘されてゐるが風雨の爲磨滅して明でない)。一つは多寶塔を以て、多寶如來常住證明の刹幢となし、又青雲白雲の兩梯を設け、諸佛菩薩遊履の階位となし、蓮花、七寶の兩橋を連ね、極樂導師阿彌陀佛菩薩昇降の階漸となし、その餘の四聖沙彌般若菩薩六道等の十三橋は、四聖(聲聞、緣覺、菩薩、佛)六凡(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上)が聽法往來の階差たり。則ち宛ら昔日の來會靈山修談妙法の儀軌に同じく、亦西方無量壽國分序九品の道場に似たり。これ本寺の名を爲すの大義に非ずや、是を第三重創となす也。(佛國寺の始創は訥祇王卽位三年己未、

西暦四一九年、我道の建立にかゝり、第二重創は法興王十四年丁未、西暦五二七年、第三重創は即ち此金大城の重創であつて、景徳王十年辛卯、西暦七五一年である)。偉なる哉、大城の人と爲りや。昔釋迦佛の時に在つて同じく善根を種ゑ、久しく淨業を修め、而して後五百歲、生を南閻浮提に受け、一手を以て國家の危急に奉じ、一手を以て佛法の傾覆を擎け、發願して而して來る者なり。如來人を使はし、佛法を重興せしむと謂ひつ可き也。(以上金大城の生涯とその仕事とを述べ、古記錄は以下石佛寺の始創に就て次の樣に筆を續けてゐる)。

「亦前世爺孃の爲に(即ち牟梁里の父母の爲に)石佛寺を始創し、而して土木を假らず、全く鍊石を以て石龕を織造す。而して一大石を精鍊し蓋と爲す。既にして忽然として三裂す、憤恚して假寢せしに夜中天神來降し覆ひ畢つて而して空に還る。唱へて云く、大信大城憂へざれ、天感じて降り覆ふと。城方に寢て而して起き、

走つて南嶺を跋み、香木を爇いて而して天神に供ふ。故に其峰を名づけて香嶺となす。その窟内に石佛を鍊邀し、高さ大さ窟と齊等なり。（此記錄は今日石佛寺を訪ふ者には深い興味を起すであらう。窟院の蓋は今尙三裂せられたまゝ殘つてゐる）。

「此兩寺（卽ち佛國、石佛の兩寺）石物彫畫鏤像嚴飾欄楯粲然として觀るべく、壯麗東都の諸刹も未だ如くあらざるなり。此れ豈大城の獨力ならんや。天神國朝、大城の誠に欽降して力を宣ぶるか。且つ一身を以て二世の父母に孝たる、古も亦罕に聞く。蓋し善施の驗、こゝに於て信ずべし。因て神林、表訓の二大聖師に請ふて、適ひに相住持し魔を降し、安鎭し以て君王の大祚を樹て、亦諸佛の付囑に報ず。（之によつて見れば表訓は、石佛寺最初の住持であつた樣に思へる。佛國寺古今歷代諸賢繼刱記も此事を載せてゐるが、併し同じ記によれば表訓は文武十年から同二十年の間に佛國寺で講經をし、且つ勅によつて其寺に住み又常に天宮に往來した事が記されてゐる。又今日金剛山にある表訓寺も文武王十年の開基だと云はれてゐる。然し文武王十年から石佛寺の出來た景德王十年迄は八十一年を經過してゐる。

よし彼が二十歳の時に佛國寺で講經したとしても、石佛寺に住む頃彼は百一歳の高齢になる。此「繼掓記」は遙か後代の撰であつて、（少くとも西紀一六七四年以前ではない）且つ年代等に誤りが多いのであるから、若し石佛寺に表訓が住持したと云ふ記事が正確であるなら、彼が文武王朝の時代に既に名僧であつたと云ふのも何かの誤傳であらうかと思ふ）。

「惜いかな、天叙賦する所の壽夭逆らひ難く、三十六惠恭大王卽位十年甲寅十二月二日に至つて大城卒す。卽ち大歴九年なり。（西紀七七四年、時に大城七十四歳）。

「如上諸公の鉅功千萬歳に於て讃するも能く盡くること無し。都て日月を付し風爾を請ふこと是の如し。撰する所寔(まこと)に臆解に非ず、乃ち古に稽ふところ有るなり。後の觀る者定意詳愼し己が見を以て東を喚んで西と作し、鹿を指して馬と爲すなく、指歸の跡なからしめよ、宜い哉」。

此記錄の奥書によれば

「慶曆六年丙戌二月日（卽ち西紀一〇四六年）國尊曹溪宗圓鏡冲照大禪師一然撰

「康熙四十七年戊子八月日(即ち西紀一七〇八年)改刊繼天謹書」とある。(如上の記錄は余が往年慶州を訪れた時、知人の寫本から重寫したのである。注意して校訂したつもりであるが、尙多少の誤寫と誤讀とがあるかも知れぬ。一然の筆になつた活々した原漢文を和譯してみて、語調を汚した樣な個所もあるが、讀み易い便宜を思つて、疏註を加へ乍ら右の樣な形で紹介したのである)。

三

右の記錄が語る樣に石佛寺は、新羅第三十五、景德王即位十年(唐の玄宗天寶十年、日本孝謙女帝天平勝寶三年辛卯、西紀七百五十一年、今を去る千百六十八年)、佛國寺第三重創と共に、時の丞相金大城によつて始創せられた事が明かである。

彼は第三十二孝昭王即位九年二月十五日（西紀七百年）に生れ、第三十六惠恭王十二月二日（西紀七百七十四年）に沒した。彼の一生に就てどれだけ詳しく歴史が吾々に語るかを余は知らない。然し彼が異常な一代の巨人であつたと云ふ事を想見するに難くはない。よし玆に引用した記錄による彼の生誕が後世の修飾であるとしても、かゝる事を記錄せしめた金大城の性質が宗敎的であつたと云ふ事を否むわけにはゆかぬ。夢にさへ佛寺の始創を契つたのは、彼が佛門に歸依す心の厚かつたしるしであらう。彼の時代は新羅の朝の頂きであり、引いては佛敎の時代の頂きであつた。佛敎が國敎であつたその時には、王が先づ篤い信徒であつた。時の丞相金大城が亦新羅の宗敎を支へた大きな柱であつたと云ふ事は否定し得ないであらう。佛寺を始創し、又は繼搬する事は彼の自覺した使命であつたに違ひない。賢明な彼は實にプラートンが畫いた樣な、國宰であり信徒

であり、又藝術家であつた。

彼には孝養の念が篤かつたと見える。佛國寺の重創は現世父母の爲に、石佛寺の始創は前世父母の爲に彼の孝心が献げた愛のしるしであつた。是等の兩寺を創めた時彼は五十一歳であつた。信仰に於ても思想に於ても彼の最も成熟したその時期であつた。何人もその窟院を訪ふ時、作品の底に流れる宗教的經驗の偉大であるのを感じるであらう。實に宗敎と藝術と冥想とを一身に兼ねた者のみかゝる作品を產み得るのである。余は佛國、石佛兩寺に見られる樣々な作品に流れる統一を感じる時、凡てが一つの心の發現であると云ふ事を疑ふ譯にはゆかぬ。よし彼自らが鑿を執つて石を刻まなかつたにしても、彼の激勵のもとに彼の創意のもとに一切が企てられ果されたと云ふ事を疑ふ事は出來ぬ。

當時唐から匠工が來たと云ふ事は無影塔の傳說によつても知る事が出來る。

之は正に事實であつたであらう。かの奉德寺の有名な鐘も（今は慶州の古蹟保存會館內に移されてゐる）唐工の助けになつた樣である。然しその鐘が、その藝術的內容に於て純然たる朝鮮の美を示してゐる樣に、此石佛寺の彫刻も朝鮮の心を通してのみあり得る美の表現である。余は直接金大城の精神がそれらの中に示現されてゐる事を疑ふ事は出來ぬ。恐らく彼自ら匠工の間に在つてその完成を努めたであらう。かの石龜の蓋が三裂して彼が落膽し憤恚した記事はいき〳〵とその昔を語る樣である。石材は殆ど附近から集めたのであらう。今尙殘された破片、又は不完成に了つた仁王の身像等が谿に横つたまゝである。けはしい山崖にそれ等の尨大な然も同大の多くの石材を集めた苦心は想ひやられるのである。事實によれば此石佛寺及佛國寺の重創が完結されるには尙長い年月を要した樣である。始業は景德王十年であるが、「繼捌記」によれば「將に五百千聖寶殿を營ま

んとし、不幸にして惠恭王大歴九年甲寅十二月二日大城卒す。國家卽ち之を畢成す」とある。之によれば竣成二十有餘年を要し、大城の歿後に迄及んだのであらう。此石佛寺の始創と佛國寺の重創とは實に金大城が此世に贈つた最後の仕事であつた。

今日窟院の附近から「石佛寺」と捺印された瓦が出る事を想へば、恐らく今の窟院の下に木造の建築が後やゝおくれて建てられたのであらう。最初は記錄が語る樣に土木を假らず、全く鍊石を以て織造せられた石龕のみであつたのである。窟からやゝ下におりて左に折れ、半町程ある所の丘の上に、小さな二個の重ねられた圓臺の上に立つ三重の石塔がある。明かに新羅時代の樣式であつて之も窟院と共に造られたのであらう。

（今窟院の下に一つの僧庵があるが、之はもとより、李朝期の建築である。余は「壽光殿」と云ふ

類がそこにあると聞いたが、見る事を失念した。然し何れにしても地形上よりしてその地に大きな建物を許さなかつた事は明かである。

金大城の遺業として今日回顧されるのは、熊壽、長壽の二寺(「繼搬記」に東山……山下に夢成寺あり、金大城の創むる所也」とあるが、之は夢によつて造る事を契つた熊壽寺を指したものではあるまいか。)及び佛國 石佛の兩寺である。前二寺は今日見るの喜びを得ない。後の二寺。即ち大城の創意に成つたと思はれる作品の殆ど凡ては、今日も尙保留して千餘年前の美をそのまゝに示してゐる。余がこゝに語らうとする石佛寺の彫刻を始めとして、その窟院のま近くにある三重の石塔、並びに佛國寺に今も偉大な美を添へてゐる多寶、釋迦の兩塔、及び記錄が語る如き靑雲白雲の兩梯、蓮華、七寶の兩橋、又恐らくは同寺泛影樓の基柱の如き、凡て金大城の名を永遠に語る作品である。

是等の資料は凡て石材である爲、幸にも風雨火災の禍と倭寇の難とをのがれて今日迄保留されたのである。今朝鮮の古美術を訪ねる時、不幸にも建築――古代の人々が信仰と技能とを捧げたその羅朝の建築は一つとして見るべきものが殘つてゐない。之は殆ど怖る可き吾々の祖先の罪であつたのであらう。屢々史家が怨みの筆を重ねた樣に、文祿壬辰の役は朝鮮の藝術に對して吾々の恥づべき無意味な迫害であつた、兵火と掠奪と破壞とは幾多の傑作に向つてどんなに苦しい致命の傷となつたであらう。今日僅かに殘されたものは、よくその兵嵐に抗し得た重量と不燃性とを有する金石のみである。(特に石材の作品に於て吾々は優秀な新羅を想起する事が出來る。慶州にある瞻星臺(善德王朝)又は石氷庫の如きは必然石佛寺と共に聯想に登る建築であらう。その他新羅の名譽を今尚さゝへる幾多の石塔、多寶釋迦の兩塔を別として例へば芬皇寺の九層塔、玉山

の十三石塔、南山寺の石塔、海印寺五重塔、扶餘の平百濟塔等幾多のかゝる石塔、又は石陵、石亭、石碑、石燈の類は、如何に新羅の人々が、石材を自由に取扱ひ得たかのしるしである。)

記錄によれば大明萬曆二十一年、李朝宣祖二十六年癸巳五月(我が文祿二年)秀吉の兵は佛國寺を燒いた。「大雄殿、極樂殿、紫霞門、外二千餘間、盡付暴燹」と記されてゐる。兵は實に石佛寺にも眞近くゐたのである。位置は佛國寺から僅か二十町許りの山上にある。然し幸にも山に包まれて彼等の視線に觸れなかつたのであらう。倭寇の災禍が此窟院に迄及ばなかつたのは感謝の至りである。今日朝鮮の古刹に於て、此石佛寺の窟院程完全に近く昔のまゝ殘されたものはないであらう。然も玆は新羅藝術の精華を集めた堂宇である。吾々は朝鮮最優秀の藝術が最も完全に保留せられた攝理を感謝せずにはゐられない。恐らくそ

の建てられた位置が此藝術に强固な保護を與へたのであらう。窟院は今慶尙北道慶州內東面吐含山の頂に近い東側にある。「繼𨻶記」はその位置を次の樣に書いた。「山脈は白頭を鼻祖とし蛇蜒して而て來り、州南鵄述嶺に至り、東面に還轉し迤邐して而て陟り聖祖山に止り、一脈は南去して鳳棲山となり、一肢は北來して吐含山となる。高峙萬仭、庚癸より入り西坐卯向、卽ち石佛寺にして甲卯より落ちて壬坐丙向するもの是れ佛國寺也」。

それ自身が石築であり、慶州の平原からは望み得ない山間につゝまれて、四方に嶮しい山崖を持つた事は、此窟院に安定な運命を與へた樣である。然も此の寺は明かに古代の記錄に殘り乍ら訪ふ人も稀にこの數百年を過ごした樣である高麗を經て李朝に及んで佛敎が虐げられた時、益々此山に順禮の足を運ぶ者は絕えたのであらう。何處をも犯した倭寇さへ此窟院を知らずに過ぎたのである。

（明治四十一年關野博士が親しく慶州や、特に佛國寺に就て詳しい調査を重ね、かの「繼叔記」をさへ讀んで石佛寺の名を知り乍ら、然も佛國寺から僅か二十町許りのこの窟院を知らずして歸つたのは、それが全く人々の記憶から埋沒されてゐたからであらう。此石佛寺が始めて吾々の注意を引いたのは今からまだ十年にもならないのである。恐らく明治四十四年であつたであらうか、慶州の郵便局員の偶然な發見によると云はれてゐる。今は佛國寺から道路が修理されて何人も容易に行かれるのであるが、十年の昔には殆ど道も無かつたのである。）

右にも左にも或は遠く或は近くもろ〳〵の丘陵を眺めて、佛國寺に近づく慶州からの四里餘りの道は、旅する者には深い感興を起すであらう、丁度奈良の都の自然の樣に、史的背景に包まれた土地は人の心を自ら詩情に誘ふのである。遠くから佛國寺の瓦を樹の間に眺める時、人は新羅の昔に歸るのである。哀れに落ちかゝる白雲、青雲の階梯を渡つて、紫霞門をくぐる時、前には大雄殿、右には技巧を盡した多寶塔を、左には力に溢れた無影塔を見上げるのである。

然し今は誰もこゝから踵を返すものはない。吾々は多寶塔に指を觸れて、梢をくぐる路から吐含山へと足を運ぶのである。登るにつれて道は早くも急である。登り終つて頂きを歩く時露出せられた廣大な花崗岩が吾々を迎へてゐる。所々に人が汗にぬれて石に休む時、既に佛國寺の屋根は遠く宛ら模形の様である。加へた龜裂が苔に昔を語り乍ら今尚殘つてゐる。之こそは昔金大城が佛像を造る爲に、石材を「錬邀」したその跡である。吾々は鑿の音を今に聞く想ひがある。散らばる石は窟院が既に近い事を知らせてゐる。頂きを廻つて左に折れ、やゝ坂を下る時、吾々は訪ね求めるその所に來るのである。

作者は驚くべき注意を以て石佛寺の位置を定めた様である。何人もその建築とそれを圍繞する自然との關係を想ひ當らない者はないであらう。窟は東面して建てられてある。前は實に一物のさへぎるものもなく、洋々とした海を望む

のである。縫ふが如き山脈が左と右とへ静に下つてゐる。一切がその頂きに支配され、佛陀はその中央に安在して、寂然として默座するのである。恐らく中秋の時晝夜正しく相半する時、日本海上を破り出る曙の光は、窟院深く入つて最初の光を佛陀に手向けるであらう。玆を訪ねる人は優秀な作品と自然とに接し、更に又彼等を擇んだ古人の心に觸れるのである。

四

窟院の起原は遠い昔に歸るのであらう。アジャンタやエロラを持つ印度がその泉である。支那に於ての有名な洛陽の龍門や大同雲岡の石佛はその流を示す

のである。もとより窟院である石佛寺もその背後にそれ等の歴史を包むのである。只多くの窟院が天然の岩に刻まれてゐるのに對して、之は全然山腹の地形を應用して計畫された石造の人工建築である。

(今日慶州半月城の近くに殘された「石氷庫」がある。その石築の構造に於て石佛寺と共に反省さるべき遺作であらう。鷄林の近くに立つ「瞻星臺」も共に忘れ得ぬ建築である。然し是等は比較であるが、同じ金大城が殘した作品、特に多寶塔、及び青雲白雲の兩橋の建築は窟院と共に必ず考察されねばならぬ作品である。建築學上より見て如何なる作品であるかと云ふ事に就て、余は玆に語り得る何の知識をも持たぬ。只科學なき古代の人がかゝるものを建設し得た經驗と技能と理解とに對して、余が拂ふ敬念に、聊かの誇張もないと余は信じてゐる。)

窟は何等尨大な構造を持たない。余が挿入した平面圖が示す様に、窟の平面は圓形である。直徑は凡そ三間五尺である。凡て花崗岩を以て築造され、天蓋は穹窿狀であつて、その外部は凡て土を以て覆はれてある。天蓋から地床迄凡

そ四間五尺餘りである。周壁は十個の臺石の上に建てられた十五個の石壁からなつて、各々浮彫の像が刻んである。臺石の高さ、凡そ三尺弱、巾六尺、石壁の高さ九尺、巾四尺である。石壁の上には圖が示す樣に左右各々五個の小龕を穿つて、その中に各々一個の小座像が安置せられてある。佛陀は窟の中央よりもやゝ奥深くに彼の位置を占める。高さ五尺直徑二間の蓮臺に安座し、その座より頭の頂迄一丈一尺である。光背は佛の身につけられたのではなく、彼の頭背の石壁に刻まれてある。天蓋は圓形の一大石を以て掩はれ、之に蓮瓣が刻んである。古記錄が示す樣に今見られる天蓋の三條の龜裂は昔のまゝである。窟の入口は左右二個の八角柱(一邊八寸)に支へられる。その距離は凡そ一間半である。今日殘る構造からすれば、自ら此柱によつて窟內と窟外とに二分される。

窟外は圖の示す樣な石壁によつて護られてゐる。凡そ長さ二間の扉道を經て、

凡そ巾四間、奥行二間半の廣場に出る。その原形に於ては是等は共に低い弓形の天井に被はれてゐたのであらう。今は失はれてゐるがそれを支へた跟跡が殘されてある。こゝを形造る十四枚の石壁は窟內と同じ樣に各々一個の浮彫である。

窟內に在る佛陀（平面圖中番號1）を別として今その排列を擧げるなら次の如くである。先づ窟外左右八個（圖II. III. IV. XXVI. XXVII. XXVIII. 及びEX. 29 EX. 30）は皆金剛神である。此篇の始めに挿入した石佛寺平面圖に記入せし番號を參照されよ（圖、EX. 29及EX. 30）は近時總督府で修理の際追加した番外のものであつて、恐らく窟の附近から發掘したものであらう。然し之が果して原意に適ふ追加であるかは保證する事は出來ぬ。「朝鮮古蹟圖譜」（卷五）には八部衆と題されてゐるが、恐らくは誤りであらう）。

金剛を過ぎて東面して立つ左右のものは仁王（圖、V. XXV.）である。更に窟に

入らうとする道の左右四個の浮彫は四天王(圖、VI, VII. XXIII. XXIV.)である。かくて窟外は番外と共に凡てゞ十四個の浮彫から成立する。

窟內は先づ最初左右四個(圖、VIII. IX. XXI. XXII.)が四人の女菩薩である。次に續く左右各々五個、總じて十個(圖、X. XI. XII. XIII. XIV, XVI. XVII. XVIII. XIX. XX.)は佛の十大弟子を刻んだのである。中央最も奧深くある一枚の石壁(圖、XV)は十一面觀音である。小龕の內にある座像は一々何を示すのであるか不明であるが、恐らく地藏、帝釋天等もその中にあらう。

(今存するのは圖中 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39 の八個であつて、31 及 40 は缺である。然も 36 は未成品である上、他のものとは構圖も甚だ異るのであつて、最初からこの場所におかれたものでは無いであらう。從つてもとあつた 31. 40 及 36 は何人かの盜奪、又は毀損紛失に逢つたのである。)

合計窟內の佛像は釋迦と八個の小像とを加へて二十四體である。故に內外總

計現存するもの三十八個の佛體である。

（此他、釋迦像の前に一個の卓石が今置かれてあるが、之は遙か後代の作である。又目撃者の懐述によれば、十一面觀音の前に小さな優秀な五重塔が一個安置してあつたと云ふ。之は後に曾禰統監が持つて行かれたのだと云はれてゐるが眞僞のほどは不明である。）

かくの如く石佛寺は、今日朝鮮で見られる新羅朝の殆ど唯一な完全な寺院として吾々の前に殘つてゐる。少くとも仁王及四天王と窟內の凡ては始創當時の面影のまゝであらう。よし二三の缺品はあつても、重要な彫刻は一つとして著しい毀損もなく昔の姿のまゝである。窟外の諸々の金剛はいつの時代か蓋も失はれて風雨にやゝいたんでゐる。今日數へ得る四十體(內二つは缺 31. 40)が果して原數であつたかは知る由がない。然し窟外に多少の異動があつた事は想像するに難くはない。特に窟の入口には計畫せられた構造があつたのであらう。

千百餘年後の今日迄何回の修理があつたかは定かでない。然し聞く處によれ

ば、「慶州郡先生案」なる記錄によつて少くとも今から百五十年程前張府尹なるものが石佛寺を修復したと云はれてゐる。

(今日、圖III 金剛像の下に金在田以下五人の名が刻されてゐるが、是等の人々も供養の爲に此窟院に何事かを盡した人々であらう。)

十年前發見の當時には、天蓋の一部が落ちて釋迦の蓮臺の一部を傷け、又散亂する石塊と土とによつて蓮臺は深く埋められてゐた樣である。(挿繪第五「釋迦」參照)又各石壁と石壁との位置もくづれて處々に間隙と曲歪とを來たしたのである。古くは石像の凡てを色彩によつて塗抹したものと見えるが、今は僅かにその痕跡が殘されてゐる。

(今日々佛像に石と金銅とを問はず、色彩をほどこす事が朝鮮では行はれてゐる。然し趣味も感覺も衰頽した今日、それ等の色彩は非常に見苦しく少しも素地の美さを見る事が出來ぬ。然し古い時代にはその色彩や手法に特殊な美があつたであらう。)

近年かゝる狀態の石佛寺を修復したのは總督府の仕事であつた。此重修は大正二年十月に始り同四年八月竣成したのである。出來得る限り解體工事を行つて位置を正し石材を補充し外面はコンクリートによつて永久の保存を期したのである。此案には關野博士等も親しく關與され、主として飯島技師監督の下に工事を行つたのである。此重修に於て、追加されたものは圖中の番外 EX.29E X.30 の兩金剛であつて、西面して建てられたのである。然し之よりも一層大膽な追加はこの窟外の周圍の石垣である。

（余は之を見た時その沒趣味な行ひに一驚を喫したのである。何の理解あつて殆ど隧道の入口ともまちがへられるかゝるものを建設したのであるか、余は之が窟院の修理ではなく新な毀損であるとより考へられないのである。技師はよし科學的な修理をなし得たとしても、何等の藝術的修理をも知らなかつた樣である。窟内の諸像と、追加された石垣と對比する時、その間に何の藝術的統一があらうか。余は特にかゝる傑作の修理には藝術的手法を根本とすべきだと考へるのである。出來得る事ならあの石垣を破壞してその重修を朝鮮人自らにさせたいものである。余は朝鮮

に於てそれ等の彫刻程余を喜ばせたものもなく、又その石垣程余を不愉快にさせたものもない。藝術の美と科學の醜とが相並んでゐる。古代の人は何の科學をすら持たなかつたが、石佛寺の如き建築に於て、自然の理法を驚くべき美に結びつけたのである。窟院は幸にも倭寇の難を逃れた。然し今日新な侮辱を修理と云ふ名のもとに得たのである。余は凡てに統一あるあの窟院が、その醜い重修によつて新な不純を追加された事を嘆かないわけにはゆかないのである。若しあの修理が單に天蓋を被ひ、各石壁の位置を正しくしたに止まつたなら、どれだけ美はしかつたであらう。余は破損せられたまゝの當時の寫眞と修理後の寫眞とを見て、藝術を知らぬ罪の深い科學の行ひを憎まざるを得ないのである。)

五

凡ての石佛は周密な用意を以て排置された様である。何人も氣づく様に、そ

の排置上に見られるのは殆んど整然とした均齊（Symmetry）の美である。

先づ窟院は内外の二つに分れ、二個の柱がその間に嚴立する。中央にはひとり釋迦(圖 I)挿繪第五が彼の位置を占める。之れ對してはその背後に十一面觀音が(圖XV挿繪第六)刻まれてある。之は同じく石壁の最も深い中央に佇んでゐる。一つは嚴そかな男性の美、一つは靜な女性の美である。彼等は二にして然も一つである。對立であり乍ら然も共に中央に在る。

光背は佛の後にあり、天蓋は佛の上にある。前者には復線單瓣の、後者には單線復瓣の蓮華模樣が刻まれてある。

窟に入る兩側には各々四人の執金剛神が相對するのである。次に來るのは左右の仁王尊である。右は「不可越」、左は「相向」。一は口を閉ぢ一は口を開く「呵吽」の姿である。次に續く扉道の兩側にあるのは四天王である。案ずるに先づ

右なるは（圖VI）「西方廣目」、之に對するものは（圖XXIV）「南方增長」、次に右なるは（圖VII）「北方多聞」、之に對する左は（圖XXIII）「東方持國」であらう。四天王共に劍を把り惡鬼を脚下に踏むのである。

扨、窟内に入るに及んで、先づ左右各々二枚、都合四枚の石壁には菩薩が刻んである。構圖よりしても明かに圖（VIII）は圖（XXII）に對し、右なるは拂子及金剛杵を、左なるは拂子及び甘露瓶を持ち、共に圓臺のに上に立ち、頭背には等しく楕圓輪が刻まれてある。圖（IX）は明かに圖（XXI）に對し共に蓮臺に立つて光背を頂いてゐる。四體共に女人の美の極みである。之に對比して續くのは左右各々五體、都合十體（圖X. XI. XII. XIII. XIV. XVI. XVII. XVIII. XIX. XX）の佛の十大弟子である。男性の深みと强みとは凡て是等のうちに集められる、十大弟子とは、一に舍利佛、知慧第一。二に目犍連、神通第一。三に摩訶迦葉、頭陀第一。四に

阿那律、天眼第一。五に須菩提、解空第一。六に富樓那、說法第一。七に迦旃延、論義第一。八に優婆離、持律第一。九に羅睺羅、密行第一。十に阿難陀。多聞第一である。（余は是等の十大弟子が何れの彫刻に該當するかを調べたが、多く不明であつて何等の斷定も玆に與へ得ないのを殘念に思ふ）。構圖より見て明かに、（X）と（XX）とは對であり。（XI）と（XIX）とは相對し、（XII）と（XVIII）と、（XIII）と（XVII）、（XIV）と（XVI）とは各々對である。その他上方の小龕中にある左右十個の座像も凡ては正しい對立によつて安置されたのであらう。今は缺けたものもあり、未完成のものもあり、恐らく現今の排置とは多少の差異があつたであらう。

殆ど嚴密に均齊を守つてあるその統一の上から見れば、二個の番外即ち圖 EX.29 と EX.30 とは不滿足な追加である樣である。單に構圖、手法、衣裝等の上からすればEX.29はXXVIII に甚だ近い。然し石像の丈が他のものとの均等を缺く事より見て、それ等のものと共に並置せられてあつたかは疑ひである。然し作は殆ど完全に殘されてあつて等しく執金剛神である事は明晰である

只之をEX.30に對比せしめて追加したのは大きな誤謬である。EX.30は他のものと全く異る半裸像であつて然も二體である。破損甚しく半頭部と足と手とを缺き、作としても他に劣つてゐる。余は之が果して金剛の一つとして他のものと共に排置されてあつたかを疑ふのである。恐らく之は最初の試みの一つであつたであらう。後に不滿足なものとして除外された一つではあるまいかとも角此番外の二つが、對作でない事は自明である。余は何の根據によつてかゝる位置にかゝる追加を敢てしたかを知るに苦むのである)。

（同じ金大城の作であると云はれる佛國寺の建築にも窟院に見出される様な均齊(Symmetry)が著しく感じられる。多寶塔は釋迦塔に對し、靑雲、白雲の兩梯は更に蓮華、七寶の兩橋に對し、又恐らく紫霞門は安養門に對し、左經樓(缺)は今の泛影樓に對し、大雄殿は無說殿に對して創られたであらう。かゝる事實からしても、石佛寺と佛國寺とが、同じ金大城の統一せられた計畫になつた事を疑ふ餘地はないのである)。

實に窟院は明かに一つの心によつて統一せられた計畫の表現である。アジャンタや又は龍門の樣な、一定の計畫された統一をもち得ない歷代の製作の幾多の集りではない。一つの心を至る處に見出し得る整然とした構成である。互は互を活かす、分ち得ない一個の有機的製作である。外形的にも心理的にも驚くべき注意に用意された完全な統體である。

（今日窟外の構造が昔のまゝの姿を缺いてゐるのは非常に心殘りである）。

人は實に各部分を切り離してその價を見る事は出來ぬ。吾々はその統一せられた構造に於て石佛寺なる一個の彫刻を見る想ひがある。

扨、窟外にあるものは凡て守護神である。堅固なこと尙金剛に等しい彼等の心は、今佛土の擁護の爲に、劒をつらねて並び立つのである。何人も彼等を犯して佛土を汚す事は出來ぬ。仁王は左右に立つて正しきに激怒する者の如き威

嚴をおびる。正に壁を離れて吾々に迫るが如き姿である。「呵、吽」の相は二にして不二になる佛智のシムボルである。玆を過ぎて進めば、旣に劍を納め、惡鬼を從へる四方の護世天がある。彼等の顏には永遠の捷利と、邪惡に對する嘲りの笑ひとさへある。彼等は東を西を南を北を征御し終つて、正に諸人の善惡の作業、又それ等の檢校を佛に報じようとするのである。人は彼等の審判なくしては窟內に入る事は出來ぬ。是等もろ〳〵の守護神は凡て力と意志との表現である。外なる統御の示現である。邪惡への戰ひである。勢ひと威力との暗示である。正しきもの、平和なるものへの永遠の加護である。宗敎への無限な保證である。

步を窟外から窟內に進める時、心も亦內なる世界に入るのである。偉大な佛陀は寂然として彼が不動の姿を蓮臺の上に占める。仰ぎ見る者はその相貌の莊

嚴と美とに打たれざるを得ぬ。玆は全く內なる靈の世界である。彼は前に四人の女菩薩を、後に十一面の觀世音を、左右には彼が愛する十人の弟子を從へて永遠の限りない榮光を告げるのである。小龕にある諸々の佛は凡てその法悅を讃えるかの樣である。玆は外なる威力の世界ではない。內なる深さの世界である。美と平和との示現である。然も莊嚴と寂幽との雰氣である。如何に鮮かな對比が窟の內外に示されてゐるであらう。玆には靈の歷史がある。凡ては外より內へ歸るのである。力より深さへ入るのである。動より靜に活きるのである。宗敎の意味は此窟院に盡きる樣である。佛寺とは眞に堂宇ではなく一つの宗敎であらねばならぬ。玆に宗敎と藝術とを分ける事は出來ぬ。美と眞とを二に數へる事は出來ぬ。玆に人は淨められ甦り、一切の泉である「一」に歸るのである。若しも新羅の宗敎を知らんとなれば、人は此窟院に佇まねばならぬ。聲なくし

て默するもろ〳〵の佛像は、凡てを豊かに語るであらう。人は彼等に不言の言を聞くのである。

是等の正確な統一が必ずや一つの心の發現であつた事を疑ふ事は出來ぬ。余は正しく金大城が石佛寺の作者として、充全な信仰と感情との人格であつた事を信じようとするのである。かくの如き統一は只偉大な宗敎心のみが生み得る力である。余は如何なる石工が彼を補助して此大業を果したかを知らぬ。その中には既に熟練された唐工も又新羅の匠工もあつたであらう。今日見られる興味深い事實は、窟院を外より内に進むにつれてその技巧と内容とが漸次に進んでいつた發展の足跡である。

余は偶々ミケランジエロのシステイン壁畫が丁度同じ徑路を示したのを想ひ起したのである。彼が最初に畫いたノアの諸圖から、最後に畫いた天地創造の

圖に來る時、時間の經過と共に、彼が手法に著しい發展を見るのである。彼は此間に五年の時日を費したが、石佛寺の完成は尙多くの年を要した樣である。（冬期は寒冷の爲全く仕事を休んだであらう）。從つてその長い間匠工の技能も亦求めようとする宗教的表現も漸次に深さを增して來た樣である。余はその作品より見て現存する佛像はその位置が示すのと殆ど並行して、即ち最初は金剛神を造り、次には四天王を、次には菩薩、十大弟子と順を追つて作られたのであると信ずるのである。技巧の點より見てこれ等を貫く連絡は殆ど疑ふ餘地が無い樣である。或人は窟外の諸像、少くとも今ある八つの金剛神と、窟内の諸佛とは全く別人の作であると云ふかも知れぬ。之に就て何等の記錄もない限り、之を肯定し又は否定する事は共に不可能であるが、然し各々の手法の連絡より見て、余は凡てを一つの心の發展であると觀ずるのである。又かく觀ずる事によつて、

始めて窟院に含まれる統一せられた美を理解し得、外より内に入らうとする心の跡を認得し得ると信ずるのである。窟の内外は決して連絡なき心の別個の製作ではない。余は石佛寺を一個の統一せられた藝術と見る事の正當であるのを確信する。それは單な多くの作の集合でもなく又追加でもない。凡ては一つの宗教心の微妙な表現である。

窟外の兩側に並ぶ執金剛神は風雨の爲に多少は摩滅されて陰影がやゝ朧ろげである。深い奥行を持たない浮彫にとつて之は少なからぬ損失であらう。(そのうち特には顏面及上體に摩滅を受けて不明である)然しかゝる事を讓歩しても、全體として窟内の諸像に比べて劣る作品であるのは事實である。殆ど凡ては正面して吾々の前に立ち、姿勢は直立し、從つてその勢ひに運動を示したものは少く、且つ又朝鮮の固有の美である曲線を多く見る事が出來ない。前に吾々は直立する堅

固な番衞を見るが、金剛の力は寧ろ靜止に現はれて動律に活きるのではない。此典型を最も正しく現はししたのは圖第IIであらう。然し作品として最も美しいのは圖第XXIVの位置におかれた一つである。挿繪第七を見よ茲に始めて姿勢がやゝ自由にくづれ、衣服に曲線の美が起り始めるのである。此一つは金剛神から四天王の技巧に移る最も著しい連絡を示すのである。

然し吾々はその間に仁王を語らねばならぬ。この左右の二つは半裸像である。右なる「不可越」はその規約に從つて、左手を開いて頭邊に擧げ、右手は頭指を立てゝ前に置くのである。（今不幸にも左手はその先を全く失つてゐる）。左なる「相向」は右手を拳つて高く擧げ物を打つの勢をなしてゐる。（挿繪第七參照）一つは智德の男性であつて口を閉ぢ、一つは理德の女性であつて口を開くのである。共に佛土を守護して激する者の形である。他の金剛に比しては力を増し、石壁を出て

迫る相がある。然し手法に於て表現に於て尙單純であり質朴であつて、次に續く四天王の如き複雜な相を含むのではない。然し作は優品である。特に內部の諸像との關係に於て、この單純な技巧は却て外に現はれる力の表示として賢明な道であつたであらう。

現在の仁王が少くとも二度目の作であると云ふ事は、窟院の附近から見出された同じ仁王の破片によつて知る事が出來る。今その頭と手とが慶州の博物館に陳列されてある。此他今尙大きな胸部破片が窟院に近い谷間に橫つたまゝである)。

四天王は何れも窟外中の傑作である。こゝには手法も旣に單純を離れて複雜な表現に移されてゐる。特にその面貌に於て作者は一段の進歩を加へたのである。

(惜い哉その內第XXIVは顏面の摩滅がやゝ甚しく、第VIは之に次ぎ、第VIIは上部左端の破壞の爲右手頭を失ひ、殘るXIIIの首は不幸にしてとれて、止むなく人工的に之をつけたのである)。

是等四つのうち最も傑出したのは第XIIIである。（挿繪第八參照）。作者は驚く可き美を長く續く曲線に含めたのである。吾々は茲に始めて純な朝鮮の藝術に逢ふ想ひをする。惡鬼を踏むで立つその高い姿には並ならぬ美しさがある。特に目に立つのはその嘲る樣な顏である。腰から足へかけての線である。彼の右手の形である。然し此四天王に於て尚一つ作者が示した非凡な手腕はその脚下に踏まれた惡鬼である。是等のグロテスクは實に隱れた部分の傑作である。吾々は是等の四つに工匠が果した線の美と、醜の美との出發を見るのである。此二つの異常な美の要素は實に窟内の諸像に於てその極致に達するのである。

不動の相を嚴そかに示す二つの支柱をくゞつて窟内に足を進める時、實に吾々は新羅藝術の驚くべき作品に圍繞されるのである。石壁には五つの女性と十

の佛僧とが刻んである。云ふ迄もなく美の溫みと、力の深さとの鋭い對比である。美はしいのは四人の菩薩である。線は肩より降りて足に流れる。薄絹を通して柔く現はれる彼女等の肉附、その細くしなやかな腕を經て、形樣々な科に休む五つの指、眉も眼も鼻も口も、凡ては淨い賢さと美との表現である。（挿繪九と十參照。）圖VIII. IX浮彫に與へられる僅かの奥行に於て、如何に巧みに立體の空間がこゝに支配さてゐるであらう。作者は特に陰影に就て休む事なく彼の心を傾けた樣である。彼は石壁の圓面を利用して一方から與へられる過度の影を他方の面によりて柔らげた樣である。衣服に伴ふもろ〳〵の靜な線は外輪の鮮な影の中を縫ふが如くに流れるのである。此光と陰との調音のさ中に菩薩の姿は浮ぶが如く吾々の前に佇むでゐる。

然し是等の姿よりも尙深く余の心を奪つたのは實に兩側にならぶ佛の十大弟

子である。余は實に之程の內なる深さと神秘とを示し得た佛敎の藝術を他に知る場合がない。かゝるものを創り得た作者の宗敎的經驗に對して余は限りない敬畏の情を禁じ得ないのである。嘗て是程の僅かな線と單一な形とに於て、是程の複雜な美の深さを示し得たものが何處にあらうか。十人の弟子は悉く剃髮の僧である。纒ふものは一つの肩から他の腕の下に垂れる素朴な一枚の布である。彼等の持つものは大きな頭蓋、射るが如き眼、高く曲れる鼻、長き顎、又は垂れる耳である。如何に驚く可きグロテスクであるよ、だが玆にこそ醜と美との結合がある。計り得ない神秘の深さのそのまゝな示現がある。或者は內に激して祈るのである。或ものは不言の敎を說くのである。或者は靜慮に耽るのである。抗し難い動律と、動かし得ない寂靜とが玆には二にして不二である。靜けさの深さである、强さである。然も是等の宗敎の力は悉く朝鮮固有の美を

通して、殘りなく示されてある。再びそれ等の姿を美に流れしめるのは、彼等のみ所有する長く引く線の内なる神秘である。實に彼等こそは朝鮮がその心に畫き得た佛の十大弟子である。弟子は實に印度にのみ在つたのではない、新羅の朝にも活きてゐたのである。よしその國家は亡び歷史は移るとも、是等の彫刻に於て、朝鮮は永遠なる宗敎の國に活きるのである。何人もその前に佇む時、悚然として慄きを覺えるであらう。さうして今や靈の異常な瞬間が現に吾々の前に閃きよぎるのを身に感じるであらう。（挿繪）十一より十四まで。圖X, XVII, XVIII, XIX參照。

余は類似する作が支那にあるべきかを思つて長く尋ねた。余の知る範圍では Golonbew 氏の蒐集にかゝる彫刻の中にやゝ之に近いものを得た。今 Coomaraswamy 著「佛陀と佛陀の福音」第二五二頁の挿畫になつてゐる。「比丘」と題され、八世紀作「龍門」の作風と解されてゐる。（又最近に出た F. Perzynski: Von Chinas Göttern. Tafel 34 に載せられた龍門の佛像はその起原を明かに語つてゐると思ふ。一九二二、八月追加）

かくて又窟院深く觀音の前に近づく時、人は暫く心を淨められて愛の世に甦るのである。如何に用意深く作者は人の心に備へるのであらう。嚴そかな深く重い十個の彫刻の中央に、この一人の女性が靜に佇むのである。誰か彼女の慈念をその顏に讀まない者があるであらう。作者は此一像を刻むのに如何に淨い悅びを感じたであらう。よしその形式に新な要素を見ないにしても、作は永遠な心の證である。（挿繪第六圖XV參照）。

余は今殘る一つ――此窟院の中央を占める佛陀の座像に就て語るべき順次に來たのである。然し何人かよく此彫刻に現はれた彼の意味を語り得るであらう。語り得ない事實にこそ此彫像の美は在るのである。人は玆に錯雜した何等の手法をも見ない。彼を被ふ衣の線も、只僅かに數へ得るばかりである。座禪する彼は胸を正しくし、顏を前に向け、一手は折つて胸下に置き一手は只垂れて前

に在るのである。只之が作者の加へた外なる形である。彼は何等の誇張をも複雜をも外に裝ふのではない。然し實に何ものもない至純のその中から作者は佛陀としての至高と威嚴とを確に捕へ確に表現し得たのである。凡ての意味はその端然たる容貌に集る。彼は寂然として默し口は閉ぢ眼は休む如くである。彼は幽暗な靜寂な此窟院の中に座つて正に深い禪定に沒しつゝあるのである。それは全てを語る沈默の瞬間である。凡てが動く靜慮の刹那である。一切を含む無の境である。何の眞か何の美か此刹那を越えるであらう。彼の顏は異常な美さと深さとに輝くではないか。余は多くの佛陀の座像を見た。然し之こそは神秘にゆらぐ永遠の一つであらう。余は此一座像に於て朝鮮が嘗て味ひ得た佛敎の深大であるべきを信じるのである。かゝる作に於ては宗敎も藝術も一つである。人は美に眞を味ひ、眞に美を樂むのである。（挿繪第五圖Ｉ參照。）

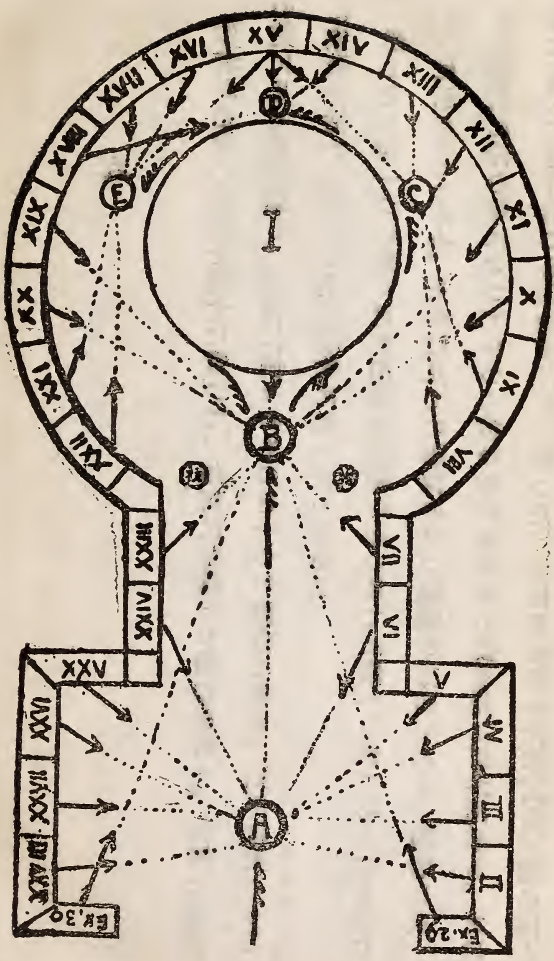
吾々は日本に於て之に比すべき大佛を見ない。鎌倉の大佛は古來美貌を以て知られてゐるが、美に於ても威嚴に於ても遠く此一つには及ばないのである。

殘る龕中の小像は實に此窟を飾るが爲の作であつたであらう。作者は特に愛を含めて是等を刻んだ樣である。あるものは實に美しさに餘る程である。可憐なその表情は何人の心をもとかすであらう。此幽暗な窟に於て彼等は高く樂しく淨土の歌をうたふかの樣である。三十幾個の大作を刻み刻んだ長い年月の終りに、是等の小像を刻んで窟を飾る事は、作者の如何に悅ばしい仕事であつたであらう。自ら悅びと幸ひとの情がその小さな胸にこぼれる樣である。技巧は實にその極みを示すのである。固い石も茲には蓮華の如く優しく又肉附きのそのまゝに柔かである。（挿繪第一五圖33參照）

六

作者が是等の藝術を殘すに當つて、如何に自然との調和を考へ、如何に均齊の美に凡てを準備し、如何に個々のものを一つの綜合に導き、如何に美のうちに宗教を活かしたかを余は順次に說いたのである。

然し更に尙一つの驚く可き用意が是等の作の凡てに備へられてあるのを余はこゝに示さうと思ふ。それは凡ての彫像の持つ視線の方向である。觀者は或一定の場所に佇む事によつていつも彼の前に進み來る姿を見る事が出來る。之は實に驚くべき作者の心理的な注意であつた。余は興味深い此事實を、玆に挿ん


I
A
B
C
D
E

だ圖をかりて漸次に敍述しようと思ふ。

（圖は別紙の石佛寺の平面圖と同じであつて、數字も同じく右より左に數へた彫刻の番號である。A.B.C.D.E.は觀者の立つべき位置、卽ちその位置より見られる彫刻の視線が集る所である。╟╟╟印は歩むべき方向を指し、↑印はその彫刻が持つ視線の大體の方向を示してある。云ひ換へれば作者はその彫像の顏をその示す方向に刻んだのである。……線はその方向が觀者の立つ位置に集る事を示してある）。

何人も此窟院に足を入れる時、彼の視野に入るのは、云ふ迄もなく中央に安置された釋迦(一)である。思ふに之は先づ凡ての觀者に彼が神聖な寺院にあるの意識を求めるのである。佛は彼の眞近くにあるのではない、窟内の中央よりも向やゝ奥に、靜な暗い光を受けて安座するのである。此位置は彼の威嚴の表現に

對して重要な關係にある。云ふ迄もなく佛は凡ての者よりも高座にあつて且つその躰軀は偉大である。彼は入り來る者に逢はんとて正しく前面して靜座する。扨、佛を彫刻家が求めた正しい位置に於て見ようとするなら、少くとも圖Aの場所より先に進んではならぬ。何となれば彼の光背が窟壁に刻まれて一定の位置を保つ故に、觀者は正しく前面のやゝ離れた位置に立つて、光背を頂く佛を見ねばならぬ。觀者が近づく時光背は漸次後にかくれ、凡ての姿勢がくづれるのである。（挿繪第五はかく見て正當な寫し方とは云へぬ）。

扨Aの場所に立つて次に視線に入るのはその前面の左右にある仁王（V. XXV）である。かくて仁王も亦觀者に應へるが爲に、左右共にその視線をAの位置に注ぐのである。

前面するもの、即ち佛と左右の仁王とを見終る時、必然觀者が眼を注ぐのは

その兩側に立つ六つの金剛神である。(II. III. IV. XXVI. XXVII. XXVIII.) Aとの距離も近い故に凡ての金剛は殆ど正面して刻まれてある。何れも觀者に對して恰も佛土を加護するが如くである。若し是等のものが側面して刻まれ、その横顏を見るのであつたら、如何に此窟院の構造上不都合が來るであらう。窟外の石壁は直線であり、且つ鍵形であるが故に、側面する彼等を見る自然な位置を何處にも持たないのである。窟內の石壁は圓形である。從つて一つの意味のある例外(XV)を除いては、凡ての顏は側面し、正面するものは一つとしてないのである。余は斯くの如き事に作者の周密な注意を感じるのである。

今Aに立つて佛と、仁王と金剛とを見終つた時、彼の視野に殘るものは只四天王のうちの VI と XXIV との二つだけである。もとより窟內のものはAから は見る事は出來ぬ。更に又四天王のうちの VII と XXIII とは距離遠く且つ兩側

に縱に立つ故に充分に見る事は出來ぬ。扨作者は此場合殘る二つ卽ち VI と XXIV とを如何なる方向に刻んだであらうか、見得ない VII と XXIII とが窟內に向いて刻まれてゐるのに反して、A の位置から見える VI と XXIV との顏は實にAに向いて刻まれてゐるのである。

かく凡ての彫刻の視線の方向が一定の自然な法則を守つて作られてゐる事實は、窟內に入るに及んで一層に微妙である。

何人も窟內に入る時、先づ佛陀の前に置かれた卓石に彼が參禮の香をたくであらう。かくて彼はその位置に止つて先づ彼の周圍を見るにちがひない。扨、此位置卽ちBからして彼が見得る彫刻は何であるか。仰ぎ見る佛を別にして實に第 XXI 及 XIX. XX の四つである。それよりも近い VIII と(IX) と XXII と XXI とは不思議にも見る事は出來ぬ。一つは光に乏しい陰にある事と、一つはBの

位置よりしては殆ど壁を縦に見る故にそれ等の近い四つは目に入らないのである。之を知る彫刻家は巧みにもその四つ即ち四菩薩の視線をBに向けずしてCに向けてゐるのである。之に反してBから見得るX.XI.XX.XIXの四つの彫刻は實にBに向つて親しく彼等の視線を注ぐのである。窟内に入つて先づ見るものは柔かな女性ではなくしてそれ等の力強い佛弟子である。彼は全く驚くべき靈の刺戟をまともに受けるのである。

特にXとXIとはその深い表情に於て觀者の心を奪ふであらう。彼は彼を見つめる者Xに心を引かれて歩をBの位置から右に進めるであらう。此時に再び彼を見つめる二つの像がある。それは次に續くXIIとXIIIとである。彼は打ち續く藝術の宗教に暫くは言葉もなくそれ等を見つめるであらう。やがて彼の目が窟内の暗さに慣れて漸く彼の左右を顧る時、彼が立つCの位置に於て、右には

VIII と IX との二菩薩を、左には浮きでる如き觀音 XV の立像を見るのである。VIII と IX との女菩薩は顧る彼を待つてゐたかの如くである。彼等は共にCに立つ觀者に向つて彼等の最初の挨拶を贈るのである。觀る者は此時恐ろしい佛弟子の深みから、始めて女性の美しい世界に入るのである。彼の心を柔らげる者は啻に此二菩薩のみではない。彼は彼の左に世にも稀な觀音の佇むのを見るのである。此場合實に微妙な心理が起る。恐らく人は XV の觀音を見る前に XIV の佛弟子が目に入るべきだと云ふであらう。然しさうではない。Cの位置に於て今觀者の心を柔らげてゐるのは、佛弟子であるよりも、菩薩であり觀音である。特に左方から新しい光を受ける觀音の立像は彼の視線を強く引きつけるのである。觀者は此場合 XIV を忘れて XV に自ら進むであらう。彼が必然に立つのはDの位置である。扨一見すれば右側の佛弟子の四つが X. XI XII. XIII

何れも左を向くのに對して XIV 一つのみが、やゝ右を向くのは異例に見える。然し此異例は作者の誤謬又は偶然ではなくして、實に觀者の心理を讀みぬいた作者の用意深い理解であつた。觀者は XV に心を引かれて、XIV を忘れDの位置に自ら來る故に、XIV は實にCに立つ觀者をみつめるのではなくしてDに立つ觀者を見る樣に刻んである。彼は靜に右手を擧げて過ぎ行く者を止める如き風情をさへしてゐる。人はDに於て觀音を見、招く XIV を始めて見るのである。

前に觀音 XV を見、右に XIV 番の佛弟子を見終つた時、觀者は果して左に何の像を見るであらうか。余はこの場所に於て、實に此窟院の作者が偉大な心理の觀察者であつたと云ふ事を佝も感ぜざるを得ないのである。Dの位置から正にEの位置に進まうとする場合、彼の視線に觸れる最も光線の強い部分は第十八

番の壁である。實に作者は此事を明確に知りぬいてゐた。必然彼はその一枚の壁を刻むに當つて再びEにではなく敢てDの位置にむけて佛弟子の顔をほつたのである。實に左側の五人の弟子の内に左方を向く異例を敢てしたのは此一枚だけであつて、他の四枚 XVI. XVII. XIX. XX は悉く右方をむくのである。然も作者は此効果を強める爲に、驚く可く深い表情を此一枚 XVIII に含めた。（挿繪第十三參照）之は十大弟子の内最も劇的な姿勢である。實に今Dに立つ觀者に向つて彼は佛心の秘密を彼の印契に説かうとするのである。彼は觀者を深く見つめて正に口を開かうとする。誰か此驚く可き瞬間に於て彼に心を奪はれない者があるであらう。觀者は此異常な傑作の一枚に引かれて自らその前に進むであらう。彼が進むのではなく、此像が彼を進ませるのである。

人は再び XVI と XVII との壁の前を早く過ぎて、その XVIII の前に來るので

ある。彼は此時自らEの位置に移るのである。扨、此時Eに向つて靜に眼を注ぐのは卽ち、今前を過ぎた XVI と XVII との佛弟子である。如何に深く作者は是等の必然な心理を理解してゐるであらう。人は此位置に於て彼が愛する觀音に最後の一瞥を贈り、彼女も亦彼に別れの心を贈るのである。彼が踵を返して前を見る時、彼の眼にうつるのは再び美にゆらぐ XXI. XXII の二人の女菩薩である。彼女は彼を迎へるが如く彼に向つて進むであらう。人は此靜な窟内に於て靈の動律に活きるのである。何事の音もない此靜穩のさ中で嘗て經驗し得ない心の多忙を極めるのである。

彼は再び佛前に立つて感謝の一禮を獻げねばならぬ。かくて彼がその位置を去らうとする時、彼の眼に入るのは何であらうか、再び靈の永遠な捷利を語る左右の四天王である。右なるは XXIII 惡鬼を脚下に踏むで勝つ者の誇りを語る

樣である。左なるは VII 手を高く揭げて永遠に佛土を支へ、一手を開いて凡てを司配する如き風情である。實に人は是等の勝利を最後に信じ乍ら窟を靜に出るのである。

余は玆に尙一つ手法上の事に就て作者の並ならぬ注意を反省しようと思ふ。中央の佛陀を除いては他の凡ての彫像は石壁に刻まれてある故に凡て浮彫である。然し此內の三つ卽ち左右の仁王(V. XXV)及最も奧の十一面觀音(XV)のみは特に丸彫に近い程、彫像を前部に浮き出させてある。余は之が再び作者の用意なる注意の結果であるのを信じる。余が挿入した圖に於ても明な如く、凡ての彫像の視線は特に或一方に向けられてゐるが、觀音は三個所の位置卽ちC. D. E. 三ケ所から見られねばならぬ。かゝる結果その彫像を正面併びに左右の側面からも見得る如くに彫らねばならぬ。特に此一つが奧行の深い手法を要したのは注

意深い用意の結果であつた。次の二つの仁王は觀音を除いては唯一の東面する壁に刻まれてある。之を特に浮き出させたのは、一つにはその力を强める爲に、一つには只前面より見得られるのみならず、扉道を過ぎる時必然に側面からもそれを見る機會が來るからである。是等は隱れた作者の深い用意であると余は考へるのである。小龕中佛像の光背を圓形ではなくやゝ丈長く作つた事も匿れたゆかしい作者の注意であると思ふ。(挿繪第十五參照)

***

嘗て古代の人々は彼等の信仰に於て、是等の藝術を產み得たのである。かくて是等の藝術にこそ、彼等は活きた宗敎を味ひ得たのである。もろ〳〵の人は此窟院を訪ねて活きた佛陀の顏を仰ぎ、彼に伴ふ多くの佛弟子の聲をそのまゝ

に聞いたのである。之は正に只の窟院ではない。玆には彼等が求めた深い靈の國土があり、淸い淨土があつた。彼等は此ほの暗い窟院に於いて、靜慮と沈思との三昧に耽つたのである。

千百餘年後の今日窟院は昔のまゝにその眞と美とを內に含めて、吾々の前に殘されてある。然しそれは只歷史の數葉を示す爲に今尙立つのであらうか。或は只學術への資料としてのみ人はそれを見るであらうか。否、それ等の藝術の凡ての使命は永遠な宗敎の示現にある。今や信仰は沈むで、佛敎は正に鷄林の地から消えようとしてゐる。然し心ある者があるなら、此埋れた窟院から、尙古代の人々が活きた宗敎の水を汲んだ樣に、永遠の宗敎を甦らす事が出來るであらう。石佛寺は彼を省る歷史家よりも考古學者よりも、人類の靈を守る信仰の人々の訪れを待ちわびてゐる。それは只立つのではない。宗敎の榮光を語

るが爲に造られ刻まれたのである。そこには實に不滅の力がある。不朽の美がある。此石佛寺に於て、朝鮮は永遠の榮譽を示し、更に尙人間の底知れない深さを現じつゝあるのである。(一九一九、五、一五—二四、我孫子にて)

***

附記——余は考古學にも通ぜず、又美術史を專攻にした者でもなく、又特に佛教藝術に對して深い素養を持つものでもない。從つて如上の叙述には硏究としては不備も多く、又多少の誤謬があるべきを思ふ。然し余は久しい間朝鮮の藝術に對して厚い欽慕の情を抱いてゐるのである。それ等を理解する事によつて、余は余の思想をあたゝめたのみならず、隣邦の人々の心をも少からず理解し得る喜を得たのである。特に此石佛寺の彫刻は余の旅行中余を刺激した忘れ得ぬ作品であつた。余は此世界の傑作が、まだ一般に知れ渡つてゐないのを心惜しく感じて、廣く之を紹介する最初の一人に敢てなつたのである。紹介者の任務として、余は先づ客觀的な事實の叙述に筆を起さねばならぬ。余は出來得る限り此責任を果したつもりであるが、未知のまゝに殘した問題も

甚だ多い。幸ひに此讀者のうち余の叙述に對して誤謬を訂正し、新しい事實を附加し余に報ぜられるならば余の悦は此上ないのである。

余は此紹介を客觀的ならしめる爲に、甚だ味なき筆に終らせたのを心苦しく感じてゐる。かゝる藝術の叙述は只の學術的批評家がなし得るものではない、眞に藝術家のみその美を直觀し、之を內面から味ひ得るのである。余は余の筆が不充分であるのを知りぬいてゐる。然し之によつて多少余は余の愛を傳へ得たつもりである。又余が味ひ得た理解の或者は必ず正當であるのを信じる。

余は殆ど何人の助けもなく此一文を草したのである。余の知る範圍では慶州附近の遺跡に就て最も正確な著述は小さい本ではあるが木村靜雄氏著「慶州誌」である。（大正元年十月發行）。關野博士の編纂になる「朝鮮古蹟圖譜」第五卷に多くの挿繪が入つてゐる。西洋人の書いたものではゴルドン夫人の紹介があると云ふが、まだその本を見ない。然し恐らく古記錄によつたものではないであらう。その他例のスタール博士（お札博士）が去年「朝鮮佛教」と云ふ小さな本を出して、その中に石佛寺の彫刻の寫眞二葉とその說明が載つてゐる。（同書九——十一頁）然し誰から聞いたのか誠に出鱈目な事が書いてある。西紀四百二十四年（之も四五七年の誤）黑胡子が新羅に佛法を始めて紹介したが、彼は又時の王に勸めて支那から匠工を呼び、四十年間かゝつてその窟院を

作らし、それが今尙殘つてゐる等と書いてゐる。之は黑胡子が洞に住んでゐたと云ふ傳說からの推量だと思ふが、誠に何の根柢もない斷定で、「此驚くべき窟院に就ては別に一册の本を書く」樣な調子さへ見へるのは大膽な話である。總督府で重修した折の報告書が發表せられたら、樣々な興味深い事實も紹介される事と思ふが、まだ纏まつた研究と紹介とは一つもない樣である。遲々庵主人編纂「新羅古蹟慶州案内」(大正三年九月發行)の中に多少「石窟庵」の記事があるが、甚だ杜選である。近時奧田悌氏著「慶州案内」が出る筈であるが、その中には「石窟菴」に就ての數頁が必ずあると思ふ。(之は後大正九年一月に發行された)。單獨に書かれた此一文は只最初の多少まとまつた紹介であると云ふ事實を與へるのみであつて、何等充全を裝ふのではない。只一個人の忘れ難い記憶の追懷であると云ふ迄である。

失はれんとする一朝鮮建築の爲に

大正十一年（一九二二年）九月號「改造」所載

失はれんとする一朝鮮建築の爲に

此一篇を公開すべき時期が私に熟してきた樣に思ふ。將に行はれようとしてゐる東洋古建築の無益な破壞に對して、私は今胸を絞られる想ひを感じてゐる。朝鮮の主府京城に景福宮を訪ねられた事のない方々には、その王宮の正門であるあの莊大な光化門が取り毀される事に就て、恐らく何等の神經をも動かす事がないかもしれぬ。然し私は凡ての讀者が東洋を愛し藝術を愛する心の所有者である事を信じたい。たとへ朝鮮と云

ふ事が直接の注意を讀者に促さないとしても、漸次煙滅してゆく東洋の古藝術の爲に此一篇を讀まれる事を希ふのである。之は失はれてならぬ一つの藝術の、失はれんとする運命に對する追惜の文字である。さうして特にその作者である民族が、目前にその破壞を餘義なくされてゐる事に對する余の淋しい感情の披瀝である。

併し尚此題目が活々と讀者に形ある姿を想ひ浮ばす事が出來ないなら、どうか次の樣に想像して頂かう。假りに今朝鮮が勃興し日本が衰頽し、遂に朝鮮に併合せられ、宮城が廢墟となり、代つてその位置に尨大な洋風な日本總督府の建築が建てられ、あの碧の堀を越えて遙かに仰がれた白壁の江戸城が毀されるその光景を想像して下さい。否、もう鑿の音を聞く日が迫つてきたと強く想像してみて下さい。私はあの江戸を紀念

すべき日本固有の建築の死を悼まずにはをられない。それをもう無用なものだと思つて下さるな。實際美に於てより優れたものを今日の人は建てる事が出來ないではないか。(あゝ、私は亡びてゆく國の苦痛に就てこゝに新しく語る必要はないであらう。)必ずや日本の凡ての者は此無謀な所置に憤りを感じるにちがひない。然し同じ事が現に今京城に於て、强いられてゐる沈默の中に起らうとしてゐるのである。

光化門よ、光化門よ、お前の命がもう旦夕に迫らうとしてゐる。お前が嘗て此世にゐたと云ふ記憶が、冷たい忘却の中に葬り去られようとしてゐる。どうしたらいゝのであるか。私は想ひ惑つてゐる。酷い鑿や無情な槌がお前の體を少しづゝ破壞し始める日はもう遠くはないのだ。此事を考へて胸を痛めてゐ

る人は多いにちがひない。だけれども誰もお前を救ける事は出來ないのだ。不幸にも救け得る人はお前の事を悲しんでゐる人ではないのだ。

まだ世は矛盾時代だ。門の前に佇んで仰ぎ見る時、誰もその威力ある美を否み得るものはないのだ。併し今お前を死から救はうとする者は反逆の罪に問はれるのだ。お前を熟知してゐる者は發言の自由を得ないのだ。併しお前を産んだ民族の間に於ては、不幸を伴はぬ發言はないと云つてもいゝのだ。此事で今そこにゐる凡ての者が暗い月日を送つてゐる。人々は必ずやお前を愛してゐるのだ。今後年月が經ると共にその愛慕がいや募つてゆくのを私は知つてゐる。併しかゝる愛すらも自由には現はし得ない此世だ。否、かゝる愛を殺せよと強いられてゐるのだ。苦しさが胸に迫つてくる。併しどうする事も出來ないのだ。

誰もが言葉を躊躇してゐる。併じ沈默の中にお前を埋めて了ふのは私には

餘りに悲慘だ。それ故云ひ得ない人々に代つて、お前の死に際しもう一度お前の存在を此世に意識させる爲に、私は此一篇を書きつらねるのだ。

然しお前のゐる場所から、遠く〳〵千哩以上も離れてゐる私が、只獨り沈默を破つて聲を擧げたとても、暗い力强い勢ひから、お前を救ひ起すと云ふ事は恐らくは不可能であらう。然しそうだからと云つて、私の是等の言葉を意味のないものだと思つてくれるな。是を書く事それ自身が私には一つの使命だと思へるのだ。誰もお前の運命を今取り戻す事を保證し得るものはない。だがお前に對する尊敬や情愛が此世にもう無いのだと思つてくれるな。お前の美や力や運命を理解してゐる者は少くはないのだ。よし僅かだとしてもお前はそれ等の人の情愛を受けてくれるだらう。少くとも一人お前の死を想つて涙ぐんでゐる者があるのを知つてくれ。

私は此現し世に於て落ちかゝるお前の短い運命を、持ち直させるだけの力を許されてはゐない。だけれども靈の世界に於て私はお前を不滅にさせねばおかない。實際お前を死から救ひ起す自由は私に與へられてゐない。然し此文字の中にお前を不滅にする自由は私に與へられてゐるのだ。おゝ、私はこゝにお前の名と姿と靈とを決して消える事のない深さで鏤刻しよう。丁度お前を産んだ民族が好んであの固い花崗岩に深く鑿をあてゝ、紀念すべき永遠の彫刻を刻んだ樣に。

光化門よ、お前の存在はまもなく奪はれるのだ。然し奪はれてはならぬ存在の爲に私は之を書いてゐるのだ。さうして私は特に濃い鮮かな墨を以てそれを書く事を怠るまい。地上に於ける視野からお前の姿が見失はれても、私の此文字は少くとも地上の何處かに傳播されるであらう。私は根強くお前を紀念する

爲に、此追悼の文を公衆の前に送り出すのだ。光化門よ、愛する友よ、道ならぬ死に迫られてさぞ無念に思ふであらう。おれはお前の嘗めねばならぬ苦みや寂しさを考へてゐる。おゝ汝が靈よ、行く處がなかつたらおれの所に來てくれ。おれが死んだら此文字の中に住んでくれ。誰かきつと是を讀んでくれる者があるだらう。さうしてお前の存在がもう一度それ等の讀者の溫い意識の中に慕はしく記憶される日が來るであらう。おゝ、多くの者はお前に對して沈默を守る事を餘義なくされてゐるのだ。それ故私がそれ等の人々に代つて、發言の自由を今撰ぼうとするのだ。

おゝ、光化門よ、光化門よ、雄大なる哉汝の姿。今から凡そ五十有餘年の昔、汝が王國の力强い攝政大院君が、彼の躊躇を許さぬ意志によつて、王宮を守れ

よとて、南面する素敵な場所に汝の礎を動くなと固めたのである。此處に朝鮮があるとばかりにもの云ふ諸々の建築が前面の左右に連ねられ、廣大な都大路を直線に、漢城を守る崇禮門と遙かに呼應し、北は白岳に飾られ南は南山に對し、皇門はその威嚴ある位置を泰然と占めてゐるのである。かくて三個からなる闕門を中に穿ち、巨大な堅固な花崗岩を高く築造し、その上によく傳統を守つた廣大な重層の建物を聳えさせた。云ふ迄もなく門は左右に均等の高壁を延ばして、盡きる所に角樓が美しい姿勢を保つてゐる。仰ぎ見る者は誰でもその自若とした威嚴の美に打たれない者はないであらう。それは一國の最大な王宮を守るに足りる正門の姿勢である。讀者よ、それを李朝末期の作に過ぎぬと云つて卑んではならぬ。又はそこに婉麗な優雅な精緻な美を認め得ないと云つて、冷かに見てはならぬ。否、末期に於てすら是程のものを造り得たと云ふ事を感嘆せ

ねばならぬ。單純な端嚴なその姿には實に意志の美が表現せられてゐるではないか。佛敎の高麗朝は遠く去つて、今は儒敎の李朝である。地の敎へに育つものは地に橫はる安泰な鞏固な美を持たねばならぬ。光化門に於て人は李朝の美の權化を目前に仰ぐのである。如何に單純に泰然としてそれが地に橫つてゐるであらう。門を過ぎるものは皆その權威に打たれるのである。實に一つの王朝の威嚴を示さうとして建てられた好乎の紀念碑である。

人々は嘗てあの門前の廣場に處せまく積み上げられた無數の巨大な材料が火炎に包まれて、景福宮再建の企圖が空しくならうとした事を覺えてゐるであらう。非常な勞苦と莫大な費用とが空しく灰燼に歸して、民が禍ひに志を弱めた時、それ等の出來事を殆ど一顧にだにせず、立ち所にその遂行を迫つた大院君の意志を覺えてゐるであらう。實に今日の光化門はその不撓な精神の大膽な拔

瀝であつた。

彼は彼の歿後僅か二十數年餘りで、彼の意志が造り上げた此强固な門が、早くも瓦壞せられようとはゆめ想はなかつたであらう。私も亦藝術的意識ある吾々の同胞によつて此事が白晝なされようとは想ひたくないのである。幸ひに之は私の誤聞であらうか。然し時間はまもなく私に恐るべき光景を示さうとしてゐる。此の暗い勢ひを止める力はもう何處にも無いのであらうか。同胞よ、東洋の純粹な建築を敬愛せよ。それ等に比敵し得るものを今の吾々は建て得ないではないか。今日の生活に不用であると云つて惜みなく棄てゝはならぬ。藝術は功利の關係を超えるのである。美があるものは厚く保存せよ。特に純東洋のものを吾々の榮譽の爲に熱愛せよ。あらゆる事情に於てそれ等のものを守護する事は、祖先への追慕であり藝術への理解であると信じ切れよ。あの光化

門の如きは近代の作であるとは云つても、東洋中にさう澤山はない建築である。朝鮮に於て五個の優秀な門を撰ぶなら、必ずやその中に入るべき作である。作品の量に乏しく數に少ない朝鮮に於ては特に貴重な建築の一つではないか。況んやあの門が主都の美を飾つてゐる無くてはならぬ一要素であるのを誰も知りぬいてゐるであらう。その正門が奪はれる時、景福宮に何の力が出てこよう。然も景福宮を失ふ時人は漢城の中心を失ふのと同じなのである。あの王宮より、より正確な形式とより偉大な規模とを持つものを朝鮮の何處にも見出す事は出來ぬ。それは李朝建築の代表であり模範であり精神ではないか。

政治は藝術に對して迄無遠慮であつてはならぬ。藝術を侵害するが如き力を愼めよ。進んで藝術を擁護するのが偉大な政治の爲すべき行ひではないか。友邦の爲に、藝術の爲に、歷史の爲に、都市の爲に、就中その民族の爲にあの景

禍宮を救ひ起せよ。それが吾々の友誼がなすべき正當な行爲ではないだらうか。

特に朝鮮を想はせる諸官衙を左右にひかへ、聳える北漢山を背景として遥か大通を向ふに光化門を仰ぐその光景は、忘れ難いものではないか。自然との配置を深く考察して計劃せられたその建築には二重の美しさがある。自然は建築を守り、建築は自然を飾つてゐるではないか。人は猥りにその間にある有機的關係を破つてはならぬ。然るに何事であらう、今や天然と人工とのよき調和が、理解なき者の爲に破れようとしてゐる。夢に過ぎないならば幸ひである。だけれどもそれが恐るべき現實であるのを如何にしよう。

試みに十餘年の昔を想へよ、偉大な光景に心を引かれて門に近づく時、人は

思はずもその莊嚴な美を仰いで心を奪はれるのである。かくて中門を入り錦川橋を渡れば、前には壯大な勤政殿が聳え、背後には康寧殿や慶會樓の瓦が波うつ如く重つてゐる。禁苑奥深く入れば或は緑に或は赤に身を飾つた幾十個の建物、或ものは蓮花を下に泛べ或ものは松の梢を高くかざして各々が美しき場所をと選んでゐる。東には建春門、西には迎秋門、北には神武門、さうして南面の正門をこそ人は名づけて光化門と題したのでである。

然し此整然とした組織ある光景は、もう二度と此世では見得ないのである。李朝の代表的建築である康寧殿と交泰殿とは既に他に移轉せられ變形せられ、今は只溫突の煙出しのみが小山に添ふて淋しく佇んでゐる。主要にして最大な建築である勤政殿を門を通して仰ぎ見る日はもう二度と歸つてこないのである。そのすぐ前にそれ等東洋の建築と何等の關はりもあらぬ尨大な洋風の建築、

卽ち來るべき總督府の建物がその竣成を今や急いでゐる。あゝ嘗ては自然の背景を考察し、建物と建物との配置を熟慮し、凡てに均等の美を含ましめ、純東洋の藝術を保留しようとした努力は、今や全然破壞せられ、放棄せられ、無視せられ、之に代るのに何等の創造的美を含まぬ洋風の建築が突如として此神聖な地を犯したのである。之が爲に光化門に續く興禮門は既にあとかたもあらぬ。あの美しい錦川橋と、流れを下に睥睨してゐたあの驚くべき石彫の怪物とは、今や無殘にも取り拂はれて只叢の中に散らばつてゐるばかりである。あの偉大な慶會樓は今後も殘るであらうが、それは遊宴の用に供し得るからに過ぎぬ。かくして殘る光化門がその位置に立つべき意義は酷くも奪はれてきたのである。嘗て門はなくてはならぬ位置に建設せられた。然し今は住む者が異つた爲に在つてはならぬものとして考へられる。誰かよくあの洋風の建築が光化門の

存在を無視して設計せられたのである事を否定する事が出來るであらう。

現代の東洋、特に走馬燈の樣に凡てが激變してゆく現代の朝鮮に於て、あの光化門こそは貴重な遺作品ではないか。その破壞は無益であるのみならず、吾々の無知の匿し得ぬ證據とさへなるであらう。然も尙現はれようとしてゐる事實は一層奇怪ではないか。あの門が取り去られて、その代り何が建てられるであらう。吾々は偉大なものを無益な勞力によつて破壞し、矮小な門をそれに代へしめる日を待ちつゝあるのである。人は狂つてゐるのであらうか。如何なる技術が光化門より、より莊嚴なより巨大なより美しい門を代つて建て得るであらう。二つの門を心に想ひ並べよ。何れが優れてゐるかを撰擇するのに一瞬の時間も必要とならないであらう。然し乍ら今はあり得べからざる事が恐れなくして行はれようとしてゐるのだ。

人々から決して消えぬ一つの記憶が、消えよと强いられてゐる日が刻々に近づいてゐるのだ。然し更に尚消えない記憶が之によつていや强まると氣附かないのであらうか。どうしてあの光化門を破壞する樣な考へに迄吾々を導かなければならないのであるか。おゝ、どうしてそれを取り除く事を餘義なくする樣なはめに自らを陷れたのであるか。吾々には此處置を辯護すべき辯護らしい辯護があり得るだらうか。かゝる事は吾々の爲していゝ友誼であらうか。又は之が建築に對する正しい理解であらうか。吾々はその破壞を是認すべき積極的理由をどこに見出したらいゝのであるか。おゝ、吾々は答へ能はぬ答へを望んではならぬ。然し世は答へる事を必要とすらせずして行はんとする所を行ふのである。時間は躊躇する事なく光化門の死期を吾々に近づけてゐる。

門は再興せられてからまだ五十餘年の星霜を經たばかりである。それがどう

して造られ、誰が造り、如何にして完成せられたかは、今尚新しい追憶ではないか。それ等の事を親しく目擊してゐる人々の目前で、もう一つ誰が之を毀すかの記憶を追加するのは、餘りに無謀な餘りに無情な行爲ではないだらうか。

私は嘗て是等の事を氣附いてゐる者が、破壞を避けて移轉を試みようとしてゐる事を傳聞した。あゝ、然し此慈悲らしい處置によつて、如何なる運命を門が受けるであらう。幸ひに死は之によつて免れるとしても、門が持つ存在の意義は半ば殺されて了ふのである。光化門は景福宮の門であつて何處の門でもあらぬ。あの位置とあの背景と、あの左右の壁とを除いて、門にどれだけの生命があるであらう。形體は殘つても。それは抽象せられた生命なき形骸ではないか。特に自然と建築との調和を慮つた古人の注意を無視して、それが如何なる意義を保つであらう。もう彼を死から救ふ事は出來ないであらうか。彼の存在の

價値を是認し保護しようとする人はないであらうか。彼はまだ若いのだ。肉體は完全に健康であり、精神は依然として鞏固ではないか。時ならぬ死を彼に迫る罪は、誰が負ふべきものであらう。

おゝ、光化門よ、如何にお前は寂しく思ふであらう。お前の友達の多くはお前よりも先に殺されて了つた。都の西方を飾つてゐた敦義(西大)昭義(西小)の兩門はもう市民の目には入らないのである。先年私は惠化門(東小)を訪ねたが保護する者がない爲に、その可憐な姿はもう風雨に堪へない樣に見えた。お前の尊ぶべき兄弟である崇禮門(南大)は城壁から孤立され、緣のない柵によつて僅かに守られてゐる。愛してくれる主人のないお前達は如何にその短い運命を淋しく想ふであらう。死なずにすむ筈のお前達が死なねばならぬ此世を、如何に

不自然に私は感じるであらう。

あゝ、門前に安置せられた二個の大なる石獅よ、よくお前達は永い間王宮の正門を守つてくれた。寒い時も暑い時も少しもその姿を亂さずに、近づく者の心に權威を以て臨んだ。そうして門に應はしい威嚴と確實とを以て宮殿にいや強い美を添へてくれた。お前達は今も默々として前面を睨んでゐるが、お前達の主人の身の上に降りかゝつてゐる運命を氣づいてゐるか。知らないだらうがもうそれは臨終の床に橫つてゐるのだ。おゝ、お前達すらも動かじと思ふその場所から動かされる日が近いのを知つてゐるか。お前達はどこに取り去られてゆくだらう。私もそれを知らないのだ。否、取り去る人すらもどこに持つてゆくかを其日まで知らないだらう。許してくれ、おれは罪ある者の凡てに代つてあやまりたい。おれはその證(しるし)にもと思つて今筆を取つてゐるのだ。

或は眞夏の暑い時に、又は空が吹きくる雪に泣いてゐる時、又夕ぐれ半月の鎌が青白く樓上にかゝつてゐる時、幾度か私は樣々な想ひにかられて門を仰ぎ見た事であらう。今もその巨大な姿がありありと目前に浮んでゐる。それが此地上から奪はれる日が近いとどうして想ひ得よう。然しそれは苦しい現實の出來事なのだ。誰もそれを取り毀す方がいゝと云つてはゐない筈だ。然るに如何なる事情がかゝる破綻に迄お前を導いたのであらう。

私は耶蘇が十字架につけられた時云つた言葉を想ひ起してゐる。人々は「何をなしてゐるかを知らないのだ」。若し何を爲してゐるかを知つてゐたら、爲す可からざる事を爲す、その愚かな罪に陷らずにすんだであらう。

光化門よ、長命なるべきお前の運命が短命に終らうとしてゐる。お前は苦しくさぞ淋しいであらう。私はお前がまだ健全である間、もう一度海を渡つてお前

に逢ひに行かう。お前も私を待つてゐてくれ。然しその前に私は時間を見出して此一篇を書いておきたい。お前を産んだお前の親しい民族は今言葉を愼む事を命ぜられてゐるのだ。それ故にそれ等の人々に代つて、お前を愛し惜むでゐる者が此世にあると云ふ事を、生前のお前に知らせたいのだ。さうしたいばかりに私は是等の言葉を記して公衆の前に送り出すのだ。之によつてお前の存在がもう一度意識深く人々に反省せられるならどんなに私は喜ぶだらう。さうして私が記す文字によつてその意識を永續さす事が出來るならば、お前もそれを喜んでくれるだらう。その事が又私の悅びでなくして何であらう。

（一九二二、七、四、東京にて）

李朝陶磁器の特質

大正十一年（一九二二年）九月號「白樺」所載

李朝陶磁器の特質

李成桂の力に遮られて、高麗の歴史がその頁を閉ぢたのは、明の太祖洪武廿四年である。あの善竹橋に鄭夢周が消えない血の跡を殘してから、五百年の新しい王朝は開始せられた。それは眞に朝鮮と名づけられる特別な一時代の始創であつた。半島が大陸に對する命數からして、尙も政治は大明に仕事する事を餘義なくしたであらう。然し此時代に藝術に於て習慣に於て又文字に於て朝鮮は最も多く彼の個性に活きる事が出來た。必然窯藝に於ても李朝の作は他に何

等の類似を持たぬ獨立した一時期を劃してゐると私は想ふ。如何なる基礎がかゝる獨立を可能ならしめたのであるか。それが前代の作と如何なる對比にあるか、又隣邦の作と如何なる關係にあるか。又藝術として何故それが名譽ある是認を受くべきであるか。私は此小篇で是等の事を明かに論定したいと思ふ。末期の藝術として屢々卑下せられ又冷視せられた在來の不運な命數を、之によつて幾分なり改める事が出來るなら幸ひである。

一

丁度中世紀に於て歐州の全土がゴシックの精神に統一せられてあつたのと同

じ様に、嘗て東洋は唐宋の文化に於て結合せられた東洋であつた。中心は云ふ迄もなく唐土である。幾つかの隣邦は强い求心力によつてその一點に結合せられた。地に續いた新羅の半島はもとより、海を越えた推古天平の日本も、その宗敎に於て藝術に於て唐とは肉身の兄弟であつた。その時政治は國境を分けても、文化にはかゝるものを認める事が出來ぬ。表現せられた美に於て、又追求せられた眞理に於て、分れてゆく二つの方向はなかつた。時代は佛敎の時代であつた。民族の名目は異つても皆國を擧げて一佛陀への禮讃の爲に共通な學藝に自らを勵んだ。凡ては宗敎の王國に於ける兄弟であり姉妹であつた。吾々は此時代を佛敎に於て統一せられた東洋の一時期と劃する事が出來る。

佛敎各宗の偉大な宗祖は殆ど皆此時代に生れた。そうして次に續いた王朝、支那では宋に、日本では藤原から鎌倉に、朝鮮では高麗にその文化を力强く續

けた。東洋の凡ての思想は是等の兩代に於て綜合せられ大成せられ徹底せられた。儒敎に於てもその中興は全く宋學の功績であると云はねばならぬ。

かゝる統一の時代に如何に「一」と云ふ思想が厚く且つ豐に人々によつて意識されたであらう。「中觀」とか「圓融」とか「相卽」とか「不二」とかの思想は、此時深く且つ鋭く理解せられ體驗せられた。宗徒は好んで自らの宗派を中宗であるとか圓敎であるとか名づけた。儒敎に於ける「中庸」の敎理が同じ心の發現であるのは言ふを俟たない。

之は敎理に於てのみではない、心の直接な表現である藝術に於ても同じ理想が具象化された。例へばあの强い一面の美を現はした漢代の作と比べるならば、如何に圓滿具足の美が此時代に現はされたであらう。そこには決して一面はなく常に兩面は相卽した。不二の美が何處にも現はれてゐる。窯藝に於ても此事

はまがひもない事實であつた。それは陶器の時代でもなく磁器の時代でもあらぬ。陶磁の二に器を分つにしては餘りに一への美が味はれてあつた。彼等は好んで石と土とを交へ用ゐたではないか。窯藝に於ての最高の時代がかゝる基礎の上にあつた事を意味深く思はないだらうか。實に唐宋に於ける窯藝の美は不二の美にあるのである。柔かさと强さとは綜合せられた。美は匿れる如くにして顯はれてゐるではないか。内と外との交りがある。要せられた熱度も實に中庸が撰ばれてあつた。面は燒き盡さず然も燒き殘らずにゐるではないか。用ゐられた筆の跡も明の筆とは如何によき對比であらう。凡てに圓やかなふくらみがあるではないか。傾く一極は何處にもあらぬ。統一せられた時代に於ける不二の美の體驗の著しい表現ではないか。此美を味はうと思ふならば、特に宋窯を、又は彼女の妹であつた高麗燒を訪ねゝばならぬ。

二

併し東洋に於ての此黄金時代が過ぎ去つた時、やがて分離の時代が之に續いた。吾々はもはや佛教の精神に於て統一せられた東洋を見る事が出來ぬ。丁度あの佛蘭西を中心としたゴシックの時代藝術が去つた時、個人藝術がその位置を占めたのと同じである。宗教藝術はかくして民衆の溫い所有から去つて了つた。支那に於ては宋の代に、日本に於ては鎌倉の期に、朝鮮に於ては高麗の朝に、佛教は最後の力强い光を納めた。

かくして極東には明かに三個の國が分れ、各々のものは統一から離れて各自

の文化を求めた。續く時代は大陸では明であり、島國では足利から德川にかけ、半島では私が今語らうとする李王の時代である。さうして佛敎に代つてその場所を奪つたのは儒敎である。私達はもはやそれ等の時代を一つとして觀ずる事が出來ぬ。李朝の藝術をその本質に於て知らうとするものは、時代の激しい推移と、儒敎の背景とをよく了解せねばならぬ。此事が知られたら、李朝に於ける窯藝の美が如何なる方向にその運命を委ねたかを預知する事が出來るであらう。

如何に地の相對を脫れて、凡ての民が淨土に結合すべきかを佛敎は敎へた。それは己れを忘れ自他を越える敎へであつた。然し如何にして自らの國を愛し、安らかに地に活くべきかを儒敎は敎へる。彼岸を說く佛敎は去つて、地上の敎へ儒敎が勢ひを得たのである。之が爲に國家と國家とは遂に對立し、小にして

は一家の存在が深く意識せられた。かくして藝術は國々に於て異つた方向を取り始めた。かゝる激變によつて現はされた美に一變化が伴つた事を誰も氣づくであらう。此時代に於て極東の藝術は明かに統一の時代を離れ、各々は各々の道を進まうと求めた。少くとも窯藝に於て此事は著しい事實である。相違はあつても吾々は宋窯と高麗燒とを一つの室に陳べる事が出來る。然しあの宣德や成化や萬曆のものと、汾院のものと、伊萬里のものとを同一の棚に交へる事はどうしても出來ぬ。そこには既に國界の線が鮮かに引かれてゐる。陶磁器に於て李朝は獨立した李朝であると私は思ふ。如何なる特質がかゝる獨立を明かにしてゐるのであるか。私は細論に入らねばならぬ。

三

高麗の沒落は佛敎の沒落であつた。新しい王朝に於て一切に新しい出發を與へる爲に儒敎は厚く要求せられた。儒敎は地上の敎へである。從つて地に安泰な基礎を得ないものは李朝の美となる事は出來ぬ。窯藝にかゝる美を含ませようとするなら、第一に地に着く安泰な形をと求めねばならぬ。李朝に於て受けた陶磁器の第一の變化は形であつたと私は想ふ。

あの高麗期に見られた纖細な優美な、感情に銳い形や線はこゝに著しい變化を受けた。外形は單純化せられ形量は擴大せられ、感情よりも寧ろ意志の美が

その中心をなした。新しい王朝の勃興につれて自ら氣風は擧り、强さとか大きさとかが要求せられた。吾々はこゝに錯雜な起伏の多い形を見る事が出來ぬ。かくして高麗朝には甚だ少い壺が李朝に於ては主要な製作となつた。吾々は皿よりも鉢よりも瓶よりも、壺に於て量と巾と强さとを得る事が出來る。(挿畫第十八、二〇、二一、二二、參照)又始ど前代に於て見る事の出來ない垂直の面を巾廣くその胴體に沿ふてけづつた(挿繪第廿一を見よ)。如何に此單純な手法が石材の如き効果を器に加へたであらう。元來直線は朝鮮の線ではあらぬ。只儒敎が深く入るにつれて此要素が漸次加へられた。曲線のうちに直線を交へたのは、地の美を求め力の美を欲した結果である。俄然として變化を受けた李朝の形は、儒敎の背景なくしては考へる事が出來ぬ。朝鮮はこの時代の窯藝に於て嘗てない威嚴の美を求めた。高麗の作に女性の美があるならば、李朝の作には男性の美がある。

感情よりも意志が美を支配した力だと見做す事が出來る。人々は新な道德によつて如何にして此地上に確乎たる生活を送るべきかを敎へられつゝあつた。朝鮮は多くの歴史的苦悶の中に、もう一度地上に安定された王朝を樂まうと求めた。器にさへも此事が要求せられてきたと私は想ふ。それはあの悠々迫らない形によく飜譯された。あの彼岸を求めた佛敎の藝術と如何に著しい對比であらう。

かくして形の變化は次に模樣の變化を伴つたではないか。吾々は再び此時代に於て纎細な優雅な高麗の模樣を持たぬ。高麗の風を最も受け繼いだ所謂「三島手」に於ても、如何に明かに此事が云はれるであらう。彫三島にしろ、刷毛三島にしろ、如何にその手法や模樣が單純化されてゐるであらう。(今迄屢々「三島手」は高麗朝のものであると考へられた。然しその大部分は恐らく李朝初期

のものであらう)。純李朝期の作に來るならば此事は一層顯著である。あの强さを示す龍であるとか、あの大きな牡丹であるとか、是等のものが荒い筆によつて畫き出された。(挿繪第二〇及二二を見よ)。そこには未だ嘗て複雜な模樣があらぬ。若しあれば著しく支那風であつて、純李朝のものではあらぬ。是等の至純な模樣をあの至純な形から離して考へてはならぬ。こゝにも新な一時代の高揚せられた氣品が自ら示現せられてゐると私は想ふ。

李朝は就中磁器の李朝である。分離せられた時代は、もはや土と石とを交へる事を求めぬ。かくして固い强い磁器が彼等に最も多く要求せられた。高麗の作と如何に判然とした區別があるであらう。丁度支那に於て宋窯の圓相が去つた時、鋭い明の磁器がその位置を占めたのと同じである。明と殆ど時を共にして起つた李朝はいち早く明の手法を移入して、彼女自身の磁器を產んだ。それ

は新しい一時代を示す爲の新しい製作であつたにちがひない。固い石とより高い熱度とが彼等の新に求めた所であつた。朝鮮に於て大きさのあるものや强さのあるものを求めようと思ふなら李朝の磁器に來ねばならぬ。

四

併しあの偉大な明の磁器に比べて、その價値を危ぶむ人もあるであらう。又は粗雜にもそれが支那の作の追隨に過ぎないと思ふ者もあるであらう。もとより偉大な支那の前には、朝鮮のみならず世界の何處の國も、自らの作を捷ち誇る事は出來ぬ。それ程支那の窯藝は、美に於て深さに於て、種に於て量に於て

殆ど無比であると云ふ事が出來る。然しそれが爲に吾々は他のものが持つ特色ある美とその價値とを否定してはならぬ。慠る牡丹は强くもあり美くもあらう。然しそれは可憐な水蓮の美を棄てる理由にはならぬ。大陸は半島とは異るのである。異るにつれて自然は變り風物は違つてくる。さうして歴史が違ひ人情が變つて來る。藝術が心の直寫であるなら、朝鮮に於てそのまゝに追隨し得る支那の作風はないのである。私達は最も多く李朝の作に獨立した朝鮮の美を見出す事が出來る。

美を形に求め大きさに求め嵩に求めたと云つても、支那に於ける强さと同一に見てはならぬ。自然は背後の威壓から免れる事は出來ぬ。對外の歴史は苦悶を脫する事が出來ぬ。人情は外にあらはな樂みを持つのではない。强さは求められた强さであつて、味はれた强さではあらぬ。地に安んずる敎へも安泰な一

國の運命を暗示するのではあらぬ。限られた國の限られた一家に適應せられた敎へである。人々は他の國の存在を忘れたいのである。朝鮮は閉された朝鮮であつた。屢々それは「隱者の國」と名づけられた。境遇はその周圍に厚い籬を建てた。そうして迫る力强い風雨を避けようと求めた。外に出る事に民族の悦びがあつたのではない。內に閉ざす事に生活があつたのである。その王朝は外に對する大なる王朝ではあらぬ。朝鮮自らに於ける五百年の王朝であつた。朝鮮は支那から離れようとした朝鮮である。かゝる人情から支那と同一なものが生れ得るとどうして豫期し得よう。あの强大それ自身の支那の作と、如何なる差違があるかは、ほゞ察知する事が出來るではないか。その影響は多かつたにちがひない。否、その凡てから脫れるにしては支那は地理的に餘りに近く且つ强かつたと云はねばならぬ。然し一度朝鮮に入るに及んで支那の手法は咀嚼せら

れ變化せられ、美は全く異る方向へと轉じた。

形に於てさうである。地に安んじようと求めて、地に安じ得ない心をあの李朝の特色ある壺に於て見る事が出來る。（例へば挿繪一八、二〇を見よ）。人はその肩に於て巾廣い形を見る事が出來る。之ほどの大膽な大きさを高麗の代に見る事は少い。然しかゝる巾さが地につく頃、如何にそれは狹められて來るであらう。概して之が爲に丈は高く高臺は甚だ小さい。それは傲る風情ではなく、淋しい姿である。恐らく李朝獨特の點は、その高臺の邊（へり）を更に斜めに切りおとした手法にあるであらう。（挿繪第二〇）。下部にかゝる細さを持たない圓い安定な壺を選んでも同じである。高臺は比較的小さく口は屢々非常に高い。かゝる形を支那に見る場合は殆ど稀だと云つて誤りはない。

次には釉薬である。之も獨歩である。同じ白さに於ても、あの冴える様な鋭い

純白を示す明の磁器と如何に異つてゐるであらう。それは常に淡い水色を示すか、若しくは粉白につゝまれ、又は沈みがちな灰白を呈してゐる。そこには内に沈まうとする心の現れがあるではないか。この釉藥と密接の關係があるのはもとより燒方である。明の磁器の偉大なものは殆ど酸化炎によつて燒き盡された。然も熱度は烈しく素地は固く、色は冴えに冴えてゐる。屢々寒い切れる程の鋭さである。然るに李朝の磁器は之に比して如何に穩かであらう。熱度も明の高さを求めてはをらぬ。それは好んで還元炎を以て燒かれた。又かゝる炎に適した窯の構造を陶工は選んだ。各々に例外がないとは云へない。然し煙にくすぶり面を内に沈ませる手法は作者の心に應はしいものであつた。吾々は此著しい區別を見誤つてはならぬ。

次に誰にも氣づかれるのは模様である。そのうちの或ものが支那からの轉化

であるのは言ふを俟たない。然し朝鮮は自らの描き方によつてそれを自己の模樣に變へた。龍蛇にしろ鳳凰にしろ如何に單純化へと推移していつたであらう（挿繪二〇、二二）屢々鐵砂の壺に見られる樣に遂にそれは原形をさへ止めなくなつた。民族は彼の四圍にある花や鳥や、又は、特色ある自然を屢々題材に撰んだ。よく見られる山水の模樣、遠くに尖つた山の數々が雲の間に現はれ、前には二三の舟を浮べた河を畫き、兩側に大きな岩を畫いた構圖は恐らく漢江のほとりにある汾院から、遠く北漢山あたりを眺めた景色ではないだらうか。然し構圖のあるものは寧ろ少ない。多くは一枚の花とか一羽の鳥とか單純なものを大まかな筆で畫いた。それは決して支那のものでもなく日本のものでもあらぬ。（挿繪一八より二二まで參照）。

更に注意して筆觸を見るなら、如何ばかり明の筆と異つてゐるであらう。後

者に於て線は針の如く細く鋭く冴えてゐる。然し前者に於ては筆跡は遙かに太く靜に且つ無邪氣である。支那はどこ迄も刺激の强い支那である。然し朝鮮の作は吾々を强いる事を決してしない。屢々それは小供が畫いたもの丶樣に奔放な自由な味ひを示してゐる。

用ゐられた色彩に來るならば一層特色を知り得るであらう。樂む事が許されなかつた民族にとつて、樂しき色は匿されてあつた。あれ程明時代に發達し續いて日本でその美を競つた赤繪は一つとしてこ丶に見る事が出來ぬ。つ丶ましやかなほの暗い吳州が殆ど選ばれた色の凡てゞある。まゝ辰砂が採用せられて器を飾つた。然しそれもあの冴えた支那の辰砂とは緣を持たぬ。凡ては沈みがちな暗い赤であつた。此外にあるのは黒の鐵砂ばかりである。此事は異常な出來事ではないか。特に陶磁器に於て發達した朝鮮にとつて不可思議な出來事で

はないか。紫とか緑とか黄とか紅とか金とかは遂に顧みられずに了つた色であつた。私は之を考へる每に朝鮮はなすべき應はしい道を守つたといつも想ふ。

私は是等の短い叙述によつて、李朝の美が占める獨特な位置をほゞ示し得たと思ふ。他への模倣に終らず、又他からの追隨を許さぬ獨歩の世界がそこに現はれてゐる。私達は正しくその陶磁器を見る事によつて、その民族の生活や希願や又は宗敎や自然を洞察する事が出來る。さうしてかゝる器の美が如何なる特色と如何なる價値とを持つかを明瞭に知る事が出來るであらう。

五

然し多くのものはそれが末期の作であると云つて卑む様に見える。此理論は東洋の藝術を概觀する時眞實である様に見える。支那に例をとらう。現代のものよりも清のものは尙よく、清よりも明は遙かに優れ、明よりも宋は更に高く、宋よりも唐は一層完全であり、唐よりも六朝は尙深さがあらう。或ものは更に漢を訪ね周にさへ溯つて高い美を求めるであらう。之は大部分正しい見解であると云つて間違ひではない。それ故に此法則に從へば李朝は墮落した末期の位置を占めるに過ぎぬ。實際或點に於て此批評が眞實であるのは否み得ない事であらう。然し例外なくさうであると云ふならばそれは錯誤である。少くとも陶磁器に於て此法則が破られてゐる個所を見出す事が出來る。私は最後に此事を指摘して李朝藝術への新しい辯護を世に贈らうと思ふ。

一般の趨勢を見ると、時代が下降すると共に技巧が複雑の度を增してゐる。

それは東西を問はず避け難い結果であつた。云ひ換えれば、人は自然を離れて作爲に藝術を托さうとしたのである。自然へ無心な信仰がその作を産むのではなく、自個の技巧への意識が主要な力である。併し此趨勢は自然への反逆である。自然への反逆は美への反逆である。時代の下降と共に藝術が墮落する主要な原因は實に此事にあると云はねばならぬ。例へば希臘のものに對する羅馬のものは此適例を告げる。例へば十二三世紀の基督藝術と十六世紀のそれとを比べるならば如何に著しい對比であらう。例へば六朝の佛像と淸朝のそれとを比べるならば、驚くべき差違ではないか。例へば師宣、淸長あたりの上代の作と近代の浮世繪とを並べるならば、如何に複雜な技巧が美を殺すかを知る事が出來よう。近世の偉大な歐洲の藝術家の運動は單純への復歸であつたではないか。凡て末期の作が價値に乏しいのは、此不幸な趨勢が支配するからである。

清朝の作が明代のそれに劣るのも全く同じである。あの偉大な明の磁器でも宋の作の前には、尙技巧に傷ついた所が多いではないか。近代の製作の驚くべき墮落は無益な技巧の錯雜が産んだ罪に歸する事が出來よう。自然を離れた作爲は美の抹殺に過ぎぬ。

かゝる一般の傾向によれば、下降した末期の陶磁器に於ても此缺點が見られねばならぬ。然るに吾々は實に興味深い藝術史上の異例を李朝の窯藝に於て見る事が出來る。既に叙述した樣にその美は單純化への復歸であつた。形はより至純にせられ、簡單にせられ、模樣は殆ど五六の筆致によつて描き出されてゐるではないか。複雜な奇異な形はそこにはあらぬ。精緻な絢爛な色彩は知らない世界である。人々は綿密な錯雜した模樣を試みる心を持たぬ。否、進むにつれて一つの定まつた畫をすら描かぬ。只二三の奔放な筆致によつて驚くべき模樣

を描き出した（挿繪第一九參照）。丹念な技巧は實に彼等の知らない手法であつた。如何に陶工は無心に自然に一つの器を造つたであらう。彼等には傑作に對するする意識さへ無かつたであらう。器は生れたのであつて造られたのではあらぬ。偉大な藝術の法則、即ち自然への歸依がそこに果されてゐるではないか。自らの作爲を愛するなら、どうしてあの樣な走りが筆觸にあらう。どうしてあの樣に無心な高臺が生れ得よう。どうしてあの五六の線で安心しきる事が出來よう。李朝の陶磁器の美は自然が加護してゐると私は想ふ。雅致は凡て自然が與へる惠みである。自然への無心な信頼、之こそは末期の藝術に於ける驚くべき異例ではないか。私達はそこに美が何ものであるかを學ぶ事が出來る。又心と自然との微妙な關係に就いて匿れた眞理を悟る事が出來る。それは末期の藝術ではあつても、偉大な藝術への共通な本質がある。そのうちの優秀な凡てのものは

窯藝が永遠であると共に永遠である。それを眺める時、吾々も自然の心に遊ぶ事が出來る。さうして幼兒の様に自然の慈母に抱かれて自らを忘れる幸ひを得る事が出來る。之こそは藝術が人類に與へる福祉ではないか。私は李朝の器と二人で一室に過した幾年かの幸ひを忘れる事が出來ぬ。

六

朝鮮はその窯藝に於て名譽ある朝鮮である。國勢は傾くとも、美によつて保證せられた國運に傾きはあらぬ。歴史に一變化が加へられた現在の危急の時に際して、その民族は藝術の意義に就いて、特に深く認得する處がなければなら

ぬ。朝鮮史を繙いて殘忍な政治に顏をそむける人はあつても、未來永遠に人類は朝鮮の窯藝に禮讃するであらう。嘗て日本の多くの陶工がなした樣に、必ずや吾々の師表としてその美を研鑽する人が絕え間なく出てくるであらう。あの李王家の高麗窯の一室は今日世界の人の順禮の足を集めてゐるではないか。朝鮮を見ようとする程の者は、誰もあの室を訪ねずに歸る者はないのである。必ずや多くの驚愕を以て朝鮮窯藝史が編纂される日は來るであらう。私達は今續く李朝の窯藝の名譽の爲に、京城に李朝窯の一室を設けようと努力してゐるのである。不幸にもその民族は目下かゝる事を意識する暇を持たず又興味を持たぬ。如何に偉大なものが自國にあるかを理解してゐる人は殆どないのである。却てその民族の敵と思はれてゐる日本の吾々が、その美を擁護しようと求めてゐる。併し朝鮮の人はいつか此事を自らに於てなさねばならぬ。さうして特に

自國の榮譽ある窯藝の歴史に、新しい一章を加へるやうに今後努力せねばならぬ。現狀を顧みると殆どその優れた歴史が閉ぢて了ふかの感がある。然し都を遠離くれた片田舍で造られつゝある純朝鮮のものを見ると、まだ溫い血が通つてゐる。然しそれは日に老いつゝあるのである。之を受け繼ぐべき新しい子は生れねばならぬ。さうしてもう一度その記憶すべき歴史を復興し持續せねばならぬ。朝鮮の人でなくして誰が朝鮮のものを造り得よう。

固有の藝術が漸次煙滅してゆく東洋に於て、朝鮮の工藝は特に貴重なものゝ一つである。私達はそれを意識し理解しようと用意し準備してゐる。然し誰よりも先に此事が朝鮮の民族それ自身によつてなされねばならぬのは自明な原則ではないか。若し私の此短い一篇が私の友達としての朝鮮民族への愛と望みとの卒直な云ひ現はしである事が出來るなら非常に幸ひである。さうしてそれが晉

に過去のものへの讃美に止らず、新しい陶工の出現を仰望する心によつて書かれたのである事を知つてほしい。今は重要な時期だ。決してその美しく偉大な窯藝の歴史を閉ぢる様な事をしてはならない。その自覺は朝鮮の人のみが持つべき特權であると意識せねばならぬ。（一九二二、八、一）

附

著者は讀者が李朝窯の爲に献げられた雜誌「白樺」（十三ノ九）特別號を、座右におかれる事を希望する。

大正十一年九月十八日印刷
大正十一年九月廿五日發行

（定價金貳圓八拾錢）

著作者　柳宗悅

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
發行者　足助素一

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
發行所　叢文閣
振替東京四二八八九番
電話番町四八一二番

東京市神田區宮本町五番地
印刷所　中正社
（印刷人）　高橋治一